

2020 年度

アイヌ語における存在型アスペクト形式

千葉大学大学院

人文社会科学研究科

博士後期課程

吉川佳見

目次

図表目次.....	iv
略号一覧.....	v
第1章 序論.....	1
1.1 研究の背景と目的.....	1
1.2 研究方法.....	2
1.3 表記.....	3
1.4 論文の構成.....	5
第2章 用語の定義.....	6
2.1 テンスとアスペクト.....	6
2.2 存在型アスペクト.....	10
2.3 証拠性.....	10
第3章 アイヌ語における「アスペクト形式」の位置づけをめぐって.....	13
第4章 存在型アスペクト形式—kor an, wa an, kane an, hine an.....	20
4.1 kor an と wa an の分析.....	20
4.1.1 先行研究の検討.....	20
4.1.1.1 接続助詞 kor と接続助詞 wa についての記述.....	20
4.1.1.2 kor an と wa an に関する研究.....	21
4.1.1.3 本項目の視点.....	27
4.1.2 共起する動詞.....	28
4.1.2.1 動詞分類.....	28
4.1.2.2 全体の傾向.....	29
4.1.3 kor an と wa an の両方と共起する動詞について.....	31
4.1.3.1 主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞の場合.....	31
4.1.3.1.1 kor an の習慣的用法について.....	31
4.1.3.1.2 動態的变化をあらわす kor an.....	33
4.1.3.2 主体動作動詞の場合.....	35
4.1.3.2.1 例外的な「動作動詞+wa an」について.....	35
4.1.3.2.2 認識・言語・表現活動をあらわす動作動詞について.....	37
4.1.3.2.3 長期的動作をあらわす動作動詞について.....	45
4.1.3.3 思考・感情・知覚動詞の場合.....	47
4.1.4 状態性動詞との共起について.....	49
4.1.5 日本語西日本諸方言のシヨル形・シトル形との対照.....	55

4.1.5.1 シヨル形・シトル形について	55
4.1.5.2 kor an とシヨル形	57
4.1.5.3 wa an とシトル形	58
4.1.5.4 kor an、wa an のあらかわす時間的的局面	60
4.1.6 存在様相を表す形式としての kor an、wa an	60
4.1.6.1 動詞 an が明示する事態の存在	61
4.1.6.2 動詞 an と動詞 isam の対立	63
4.1.7 小括	65
4.2 kane an の分析	67
4.2.1 先行研究の検討	67
4.2.2 共起する動詞	69
4.2.3 アスペクト的意味—wa an との差異	71
4.2.4 小括	75
4.3 hine an の分析	76
4.3.1 先行研究の検討	76
4.3.2 共起する動詞	77
4.3.3 小括	78
4.4 存在型アスペクト形式の複数使用	79
4.5 本章のまとめ	80
第5章 助動詞 a と助動詞 aan	82
5.1 助動詞 a	82
5.1.1 先行研究の検討	82
5.1.1.1 「完了」の定義について	83
5.1.1.2 過去でも完了でもない場合に使われる a について	86
5.1.2 助動詞 a のアスペクト的意味	87
5.1.3 助動詞 a と直接証拠性	91
5.1.4 諸問題	94
5.1.4.1 「a noyne」について	94
5.1.4.2 「a yak/yakne/yakun/yakka」について	96
5.1.5 小括	101
5.2 助動詞 aan	102
5.2.1 先行研究の検討	102
5.2.2 助動詞 aan と間接証拠性	102
5.2.3 助動詞 aan と意外性	106
5.2.4 助動詞 a との対応—直接証拠と間接証拠	106
5.2.5 小括	108

5.3 本章のまとめ.....	109
第6章 結論.....	110
謝辞.....	113
参考文献.....	114
参考資料.....	118
初出一覧.....	124
付録.....	125

図表目次

表 1	日本語におけるテンスとアスペクトの基本的な関係.....	7
表 2	先行研究における kor an と wa an の区分.....	26
表 3	本章における動詞分類.....	28
表 4	kor an と wa an の基本的な意味機能（非状態性動詞の場合）.....	65
表 5	kor an と wa an の基本的な意味機能（状態性動詞の場合）.....	66
表 6	yak/yakne/yakun/yakka と a の共起（先行研究）.....	96
表 7	助動詞 a と助動詞 aan の意味機能.....	109
図 1	アスペクトの対立の分類（コムリー1988：43）.....	7
図 2	シヨル形式の派生的意味.....	55
図 3	シトル形式の派生的意味.....	56
図 4	シヨル形式と kor an の意味範囲の比較.....	60
図 5	シトル形式と wa an の意味範囲の比較.....	60

略号一覧

1	1 人称	first person
2	2 人称	second person
4	4 人称 ※	fourth person
=	人称接辞境界	personal affix boundary
A	他動詞主語または所有者	transitive subject or possessor
COP	コピュラ動詞	copula
DESID	願望	desiderative
EMP	強調	emphastic
EXC	除外	exclusive
FIN	終助詞	final particle
HAB	習慣	habitual
HOR	勧誘	hortative
ITR	反復	iterative
NEG	否定	negative
O	他動詞目的語	transitive object
PL	複数	plural
POL	丁寧	polite
PROH	禁止	prohibitive
Q	疑問	question
REC	相互	reciprocal
S	自動詞主語	intransitive subject
SG	単数	singular
TOP	主題	topic

※3 人称はゼロ表示。4 人称は、包括的 1 人称複数、2 人称敬称、不定人称、物語中の叙述者の人称等の用法を持つ。

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

本論文では、アイヌ語の存在動詞 an「ある、いる、なる」を含むアスペクト形式を「存在型アスペクト形式」と位置づけたうえで、存在型アスペクト形式を中心に、その意味機能について議論を展開する。対象とするアイヌ語の方言は、沙流方言、千歳方言とする。

アイヌ語には文法的テンスはなく、アスペクト形式の使用も義務的ではないが、アスペクト的な意味を表現する様々な形式がある。田村(2003)によれば、「アイヌ語のアスペクトの意味の表現方法には、接尾辞、重複法、助動詞、V1+接続助詞+V2¹から成る連語形式の4つがあると考えられている(田村 2003: 17)」。本論文で扱う形式は、このうち、「助動詞」と「V1+接続助詞+V2」に区分される。各形式の基本的な意味や、相当する日本語訳は、先行研究や辞書によって、概略以下のように定義されている。(沙流方言における例)

kor an (複数形 kor oka)	「～ている」	動作継続、変化の進行過程
wa an (複数形 wa oka)	「～ている／てある」	変化の結果継続
kane an (複数形 kane oka)	「～ている」	wa an とほぼ同じ
hine an (複数形 hine oka)	「～ている」	wa an とほぼ同じ
a (複数形 rok)	「～た」	完了
aan (複数形 rokoka)	「～た (のだなあ)」	完了、感嘆

kor an、wa an、kane an、hine an は、接続助詞 kor/wa/kane/hine「～して」に存在動詞 an「ある、いる、なる」が後続している²。a と aan は「助動詞」である³。これらのうち、a 以外の形式、すなわち構造上存在動詞 an を含んでいる形式を、本論文においては存在型アスペクト形式とみなす。a は存在型アスペクト形式ではないが、特に aan や wa an の機能との関連性から議論の必要があることから、分析対象に含めている。

アイヌ語のアスペクト形式に関する記述は、金田一(1931)、知里(1974[1936], 1973[1942])、田村(1960, 1972, 1988)などに見られる。特に、沙流・千歳方言のアスペクトについての記述には、主なものに中川(1981)、佐藤(2006, 2007a, 2007b)がある。中川(1981)は知里(1973[1942])の動詞区分を踏まえ、沙流方言における kor an、wa an と動詞との関係を調べて、アイヌ語の動詞の基本的なタイプを提示した。中川(1981)で認められた kor an、wa an の機能は、千歳方言においても有効であることを佐藤(2006)は記している。さらに佐

¹ V は動詞を表す。

² それぞれ an が複数形 oka(y)の形をとり、kor oka(y)、wa oka(y)、kane oka(y)、hine oka(y)となる場合があるが、本論文では特にことわりがない限り an の形で代表させる。

³ それぞれ複数形 rok、rokoka(y)となる場合があるが、本論文では特にことわりがない限り a、aan の形で代表させる。

藤(2007b)は「完了」を表す形式という観点から wa an と a の比較検討を行なった。

しかしながら、いずれのアスペクト形式も無標の動詞と明確な対立がなく、さらにはアスペクト形式自体も相互排他的ではないことなどから、残されている課題は多い。本研究では、アイヌ語のアスペクトにおいて中核的な意味を示す形式を取り上げ、残された課題の解決を目指しつつ、文献資料をもとに各アスペクト形式の意味機能を分析する。

1.2 研究方法

用例は既存の公刊資料、Web サイトで公開済みの音声資料から収集した。用例には辞書や文法書に記載されているものも含めた。聞き取り調査は、近年のアイヌ語母語話者の急激な減少によりほぼ不可能であるため、行わなかった。

アイヌ語⁴は北海道方言、樺太方言、千島方言の3つにまず大別される⁵が、本論文では北海道方言のうち、先行研究や資料が比較的多く蓄積されている北海道南西部の沙流方言と、千歳方言を対象に分析を行った。千歳方言は文法的に沙流方言とほぼ差異がなく、アスペクトに関しても沙流方言での分析結果とほぼ変わらないことがこれまでに示されている（佐藤 2006 など）。⁶

資料ジャンルは、自然談話、散文説話、神謡、英雄叙事詩の4つに区分される。公刊資料

⁴ アイヌ語は系統不明の言語である。膠着的、複統合的、抱合的な特徴を示す。文の構成素の順番は SOV で、主要部標示型の言語である。（ブガエワ 2014：33）

⁵ 樺太方言は大きく東岸と西岸の方言に分類される。千島方言についての資料は、語彙目録などのわずかな資料を除いてほぼ存在しない。北海道方言の下位区分については、おおよそ、釧路・十勝・旭川などの道東・道央のグループ、宗谷などの道北のグループ、静内・浦河などの日高東部のグループ、沙流・千歳などの日高西部を中心としたグループ、幌別・虻田・八雲などの道西のグループに区分される。宗谷を除くオホーツク海沿岸と、日本海沿岸の方言についてはほぼ資料が無い。（Asai1974、服部 1964、中川 1998、ブガエワ 2014 など参照）

方言間の差異について、樺太方言と北海道方言は、音構造、語彙、文法面での差があり、相互にコミュニケーションを行うのはかなり難しいと考えられている。北海道方言の下位にある各方言の差異はそれよりも小さいものであり、ある方言を学んだ学習者が別の方言に接しても、まったく理解不可能ということはない。（中川 1998：2）

⁶ 他方言における存在型アスペクト形式は、沙流・千歳方言のものと形態や意味が異なる。たとえば日高東部の静内方言の存在型アスペクト形式には、kane an（複 kane oka）と wa an（複 wa oka）が挙げられるが、kane an は沙流・千歳方言の kor an、wa an は沙流・千歳方言の wa an にほぼ相当する形式である。（Refsing1986、奥田 1995,1999 参照）

また、道東の十勝方言の存在型アスペクト形式には、kor an（複 kor okay）、wa an（複 wa okay）のほかに、tek an（複 tek okay）、kan an（複 kan okay）、ka an（複 ka okay）といった形式が挙げられる。十勝方言の kor an と wa an は、沙流・千歳方言とほぼ同様の機能を持つが、kor an については人称制限がある点で沙流・千歳とは異なっている。tek an は wa an と同様に変化の結果継続を意味する。kan an（ka an）は動作継続や変化の結果継続を表す機能を持っている。（高橋 2004a,2004b,2006,2015,2018 参照）その他、幌別方言などでは kusu an ないしは kusan という形式がみられる。こうした他方言での現象は本論文では分析せず、今後の課題とする。

の数には限りがあるため、ジャンルの限定はしていない。自然談話資料は他のジャンル（すなわち、口承文芸資料）に比べて残されている数が少なく、そのため、日常会話を想定してアイヌ語母語話者が提供した用例も、自然談話資料に含めている⁷。

口承文芸資料のうち、散文説話は散文体、神謡と英雄叙事詩は韻文体である。散文説話は日常語に近いスタイルだが、韻文体の神謡と英雄叙事詩は、雅語の使用や、音節数の調節のために文法規則に従わない箇所も出現するなど、日常語や散文説話とは性質を異にする⁸。また、神謡は「サケヘ」⁹と呼ばれる折り返しの語句が挿入される点で、その他の資料とは異なっている。用例の調査と抽出に用いた資料は、本論文末尾の「参考資料」に掲載した。

最後に、本論文が有する方法上の限界に触れておきたい。この「1.2」冒頭で述べたように、聞き取り調査は、アイヌ語母語話者の急激な減少によりほぼ不可能であるため行っていない。また、自然談話資料は口承文芸資料に比べてはるかにその数が少なく、本論文で扱う資料ジャンルには偏りがある。加えて、アイヌの口承文芸は一人称叙述形式で語られるものが大多数であり、三人称の用例が少ないという制限がある。このように本論文の分析は、資料のもつ語彙的・文体的特徴からの影響を受けていることは否定できない。

1.3 表記

本論文においては、アイヌ語用例を引用する際、以下の表記法をとる。

- ・ローマ字によって表記する。母音は a, i, u, e, o の 5 文字、子音は p, t, k, s, h, c, r, m, n, y, w の 11 文字を用いる。¹⁰

⁷ ごく一部だが、独話資料も含めている。

⁸ 神謡と英雄叙事詩は、一定のメロディにのせて語られ、文章がそのメロディなりリズムなりの制約を受ける。それに対して散文説話は、日常会話と異なる一定の抑揚をつけて語られるが、韻律上の制約はない。アイヌ語の韻文は基本的に 4 ないし 5 という音節の数を基準にしている（4 よりかはむしろ 5 のほうが基本だと考えられる）。音節の調節のため、虚辞と呼ばれるようなそれ自体意味を持たない語が挿入されたり、代動詞が挿入されたり、語の長形短形を使い分けたりするなどの技法が用いられる。こうした技法や、神謡や英雄叙事詩などで特別に用いられる語彙（日常語とは異なる語彙）などを、「雅語」と呼んでいる。（中川 2020：203-209 参照）

⁹ サケヘは本来、その話の主人公である神々が何者であるかを明らかにするために、その鳴き声、様態、性格、特徴を擬音化したものだったと思われる。神謡はこのサケヘを繰り返しながら、その間に言葉を挟み込んでいくようにして語られる。例えば、以下のアオバトの神謡では、「wawori ワウォリ」というサケヘが各句の冒頭に繰り返されている。

wawori	samorun tono	ワウォリ	本州の殿様
wawori	samorun sisam	ワウォリ	本州の和人を
wawori	ci=nukar rusuy	ワウォリ	私は見たくて

（中川 2020：62-66 参照）

¹⁰ 現在のアイヌ語表記において、ひろく用いられている表記法に倣っている。アイヌ語の母音音素と音価は、/a/ [a]、/i/ [i]、/u/ [u]、/e/ [e]、/o/ [o]、である。子音音素と音価は、/p/ [p]、/t/ [t]、/k/ [k]、/s/ [s]~[ʃ]、/h/ [h]、/c/ [tʃ]~[ts]、/r/ [r]、/m/ [m]、/n/ [n]、/y/ [j]、/w/ [w]、である。このほか声

- ・人稱接辞境界は「=」（半角イコール記号）で示す。原典の人稱接辞がハイフンで示されている場合は、半角イコール記号に置換する。
- ・ゼロ形態の人稱接辞（3人稱）は表示しない。¹¹
- ・わたり音の表記の有無は原則原典に従う。
- ・用例中の言い淀みの部分は、必要がある場合には「…」記号で示す。
- ・原典にアクセントを示すアキュート記号がある場合、これを表示しない。
- ・音交替は表記せず、元の語形で表記する。
- ・韻文の行境界は「/」（スラッシュ記号）で示す。

上記のローマ字表記と人稱接辞境界の表記は、現在のアイヌ語表記で多く行われている表記方法に倣ったものである。

わたり音とは、以下のように挿入される w 音、y 音を指す（金田一 1993 [1931]: 156-157、知里 1974 [1936]: 13-14）。本論文で用例を掲載する際、わたり音の表記は基本的に原典に従うが、「付録」に掲載の動詞リストでは、わたり音を削除した表記に統一した。

i-uta（もの-を搗く）	> iyuta「搗きものする」
i-omap（もの-を可愛がる）	> iyomap「子供を可愛がる」
u-asur-ani（REC-噂-を持つ）	> uasurani「噂をしあう」
u-e-peker（REC-で-明るくなる）	> uwepeker「昔話する」

音交替とは、語と語などが連続するとき起きる現象で、例えば以下のような例がある。この音交替を、1行目の「pon_seta」のように、変化した音の後ろにアンダーバーを置くことで表す方法があるが、本論文では元の「pon seta」という形で表記する。

n+s → y+s	pon seta「小さい犬」	→ pon_seta /poyseta/
n+y → y+y	pon yuk「小さい鹿」	→ pon_yuk /poyyuk/
n+w → n+m	wen wa「悪くて」	→ wen w_a /wemma/
r+t → t+t	ku=kor tuki「私の坏」	→ ku=kor_tuki /kukottuki/
r+c → t+c	ku=kor cise「私の家」	→ ku=kor_cise /kukotcise/
r+n → n+n	ku=kor nima「私の木皿」	→ ku=kor_nima /kukonnima/
r+r → n+r	ku=kor rusuy「私は欲しい」	→ ku=kor_rusuy /kukonrusuy/

また、以下のように、語頭の h や y の脱落が起きる場合にもアンダーバーを用いてそれを

門閉鎖音（[ʔ] /ʔ/）を独立した音素として立てる立場もあるが、見解の揺れがあり、表記されない場合が多い。（服部 1964、田村 1988、ブガエワ 2014 など参照）

¹¹ 「φ=」を以て表す表記法もあるが、本論文では採用しない。

表記する方法があるが、このような場合でもアンダーバーは用いずに元の語形で表記する。

an hine 「(～が) あって」 → an h_ine /anine/
an yakka 「(～が) あっても」 → an y_akka /anakka/

その他、例文の日本語訳は原則原典通りとするが、本論文筆者によって改める場合や補足を
する場合は、<>に入れて訳文中に記す。例文のグロス
は原則本論文筆者によって付す。原典通りにグロスを付す場合は、例文下にその旨を明示する。引用に際して
改変した表記の誤りはすべて本論文筆者に帰する。

1.4 論文の構成

本論文は6章から成る。

第1章では、研究の背景と目的、研究方法、表記についての説明、本論文の構成を記す。

第2章では、「テンス」「アスペクト」「存在型アスペクト」「証拠性」について、本論文で
従う用語の定義を記す。

第3章では、アスペクト的観点からみた場合のアイヌ語の動詞の性質について説明し、アイ
ヌ語におけるアスペクト形式の位置づけに関する問題提起を行う。

第4章では、アスペクト形式 kor an、wa an、kane an、hine an の機能を分析する。中
でも kor an と wa an は、kor an が「動作継続または変化の進行過程」、wa an が「変化の結果
継続」を示すという基本的な機能は明らかにされているものの、その限りではなく、対立も
完全なものではない。さらに本論文では、kane an と hine an を加え、一様にテイル形（場
合によってはテアル形）で訳される四形式にどのような意味機能の差異があるのかを、文献
資料をもとに探る。

第5章では、助動詞 a と助動詞 aan の機能を分析する。a はこれまで過去、完了（パーフ
ェクト）を表すとされてきた形式であるが、その用法に該当しない用例が散見される。本論
文では a をテンス・アスペクト・証拠性の観点から捉え、先行記述とは異なる解釈を与え
る。また、aan は驚きや感嘆などを表すモーダルな形式とされてきたが、本論文では aan を
a と関連させた上で、こちらもテンス・アスペクト・証拠性の観点から捉えて分析する。

第6章では、各章の結論をまとめたうえで、総括を行う。

第2章 用語の定義

2.1 テンスとアスペクト

テンスとアスペクトは両者とも時間に関わるカテゴリーであるが、テンスは事態が時間軸のどこに位置づけられるか、つまり外的な時間に関わるのに対し、アスペクトとは、ある事態を述べる際に、その内的な時間展開をどう捉えるかに関わるカテゴリーである¹²。

アイヌ語では、文法的手段を以てテンスを区別することは無く、時間関係は時間副詞や文脈によって判断される（例(1)(2)参照）。

(1) numan unarpe ek. 「昨日おばさんが来た。」
昨日 おばさん 来る.SG

(作例)

(2) nisatta unarpe ek. 「明日おばさんが来る。」
明日 おばさん 来る.SG

(作例)

そのため、これ以降はアスペクトの定義を中心に述べることにする。

アスペクトは、一般に完結相(perfective)と不完結相(imperfective)とに分かれる。完結相と不完結相の違いとして、Comrie(1976)は以下のように述べている。

...the perfective looks at the situation from outside, without necessarily distinguishing any of the internal structure of the situation, whereas the imperfective looks at the situation from inside, and as such is crucially concerned with the internal structure of the situation...

(Comrie 1976 : 4)

(完結相は、場面を外がわからながめて、その内部構造を区別だてするということはけっしてしない。それにたいして、不完結相は場面を内がわからながめて、その内部構造に密接にかかわる。(山田小枝訳 1988 : 13))

WALSによると、perfective と imperfective との対立をもつ言語は 101 ある。日本語もそのひとつであり、日本語標準語におけるテンスとアスペクトの基本的な相関は、次の表 1 のようになる。ここでの「完成相」、「継続相」は、それぞれ perfective、imperfective とほぼ同じ概念規定である。

¹² As the general definition of aspect, we may take the formulation that ‘aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation’. (Comrie 1976 : 3) (アスペクトの一般的な定義としては、「アスペクトは場面の内的な時間関係をとらえる、さまざまなし方」であるという公式を、われわれは採用することにする。(山田小枝訳 1988 : 11-12))

アスペクト テンス	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

表 1 日本語におけるテンスとアスペクトの基本的な関係¹³

(工藤 1995 : 8)

不完結相は、典型的には次の図 1 のような下位区分を持つ。

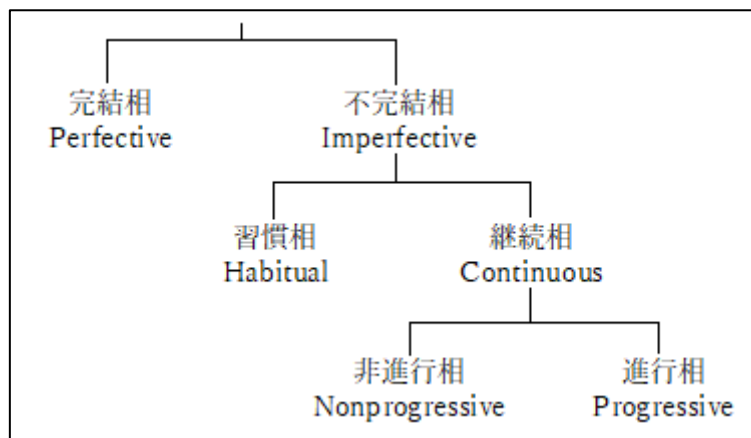


図 1 アスペクトの対立の分類 (コムリー1988 : 43) ¹⁴

「進行」と「継続」は同義で用いられることがあるが、本論文においては、ある動詞が表す運動の限界性が問題となる場合には「進行」、問題としない場合には「継続」を使用することにする。

テンスとアスペクトに跨る領域として、パーフェクト(perfect)がある。「先行する時間と後続する時間という2つの時間局面の事柄が融合し、この2つの時間局面に関係する、2つの状況間に何らかの結びつきがある場合 (マスロフ 2018 : 31)」に、パーフェクトと言える。二つの時間点を指していることから、パーフェクトをアスペクトとみなしてよいかどうかという議論もあるが、Comrie(1976 : 52)などに従い、本論文ではアスペクトとみなす。

パーフェクトには、状態パーフェクト(statal perfect)と動作パーフェクト(actional perfect)がある。前者の場合、後続の時間局面に重点が置かれ、すでに起こった変化や動作がもたらす何らかの状態や静的関係が表現される。後者の場合、先行する時間局面に重

¹³ 表の名称は本論文筆者が付した。

¹⁴ Comrie(1976 : 25)の Table I に対応。

点が置かれ、後に何らかの痕跡や結果を残す動作、ある特徴的な状況をもたらす動作が関心の対象となる（マスコフ 2018：31-32）。工藤(1995)は、状態パーフェクトを「結果継続」、動作パーフェクトを「動作パーフェクト」あるいは単に「パーフェクト」と呼んでいる。

本論文では、基本的には状態パーフェクトを「結果継続」、動作パーフェクトを「パーフェクト」または「perfect」と呼ぶことにする。ただし、両者の区別が特別必要な場合には、「状態パーフェクト」「動作パーフェクト」と呼び分ける。

日本語標準語においてはタ形とテイル（テイタ）形がパーフェクトを表わすが、工藤(1995)は、タ形が現在パーフェクトしか表せないのに対し、テイル（テイタ）形は未来パーフェクト・現在パーフェクト・過去パーフェクトのいずれをも表すことを記している（以下、工藤 1995 からの引用を参照）。

<未来パーフェクト>

あなたが家庭をもつ頃には、わたしはもうとっくに死んでいるわよ。 (*もう死んだ)

<現在パーフェクト>

私の父は、ガンで、もう死んでいます。 (=もう死にました)

<過去パーフェクト>

私が帰郷した時には、父は既に 3 時間前に死んでいた。 (*既に死んだ)

(工藤 1995：97-98)

工藤(1995)によれば、結果継続（＝状態パーフェクト）は基本的に変化動詞のみが表し、運動の必然的・直接的な結果をとらえるのに対し、パーフェクト（＝動作パーフェクト）は変化動詞も動作動詞も表し、運動の偶然的・間接的な結果をとらえる。工藤(1995)は必然的・直接的な結果を「結果」、運動の偶然的・間接的な結果を「効力」と呼んで区別している。

動作動詞が表すパーフェクトについて、工藤(1995：121)によれば、動作動詞は運動＝動作が実現した場合、どのような必然的結果が生じるかについては触れないが、動作が実現すればなんらかの結果が残る。しかし、以下の工藤(1995)の例で言えば、「歩けば必ず豆ができるという結果を生じるわけでもないし、青酸カリを飲めば、必ずきれいなバラ色になるという結果を残すわけでもない（工藤 1995：121）」。動作動詞のテイル形がとらえる結果とは、このような偶然的・間接的な結果である。

・「男も女も、青酸カリを飲んでますな」医者は言った。

「この、きれいなバラ色の顔色がそうです。このジュースといっしょに
飲んだんでしょ」 (点と線)

・「豆の様子じゃ、10 里位歩いているよ」 (二百十日)

(工藤 1995 : 121)

また、変化動詞においても、時間の経過とともに運動の直接的結果が消えてしまうことがあるが、その場合でも、その人を経験者にするという結果を、あるいは記録として残されるという結果を生じる (工藤 1995 : 121)。

・「あのね、その人前に1度結婚しているんですって」 (朱を奪うもの)

・「発駅は？」と、係員は、台帳をとって操りはじめた。

「新宿です」

係員は、帳簿の一点を指でおさえた。……

「着いていますよ」係員はあっさり答えた。

「到着していますが、もう受け取り人がありましたよ」 (影の地帯)

(工藤 1995 : 121)

その他、本論文では、習慣、多回という用語を用いることがある。工藤(2014 : 640)では、「多回性」は「同じ時空間での繰り返し」、「反復性」は「異なる時空間での不規則的繰り返し」、「習慣性」は「異なる時空間でのポテンシャルな規則的繰り返し」というように区別されているが、本論文で習慣と言った場合、反復も含めて指す。

さて、アイヌ語においてアスペクト形式と考えられているものは、いずれも義務的に用いられるものではない。工藤(1995 : 29)は、「文法性=形態論的範疇性の認定基準」として以下の①~⑤の5つの観点をあげているが、アイヌ語のアスペクト形式で以下のすべてを満たすものは存在しない(田村 2003 : 23)。つまり、アイヌ語の「アスペクト形式」は、文法的カテゴリーとしてではなく意味的カテゴリーとしての位置づけとなる。

①義務性 (使用の強制)

②包括性 (あらゆる動詞、あるいは述語形式をまきこんでいること)

③規則性

④抽象性・一般性 (語彙的意味からの解放)

⑤パラダイグマティックな対立性 (相補的対立関係)

(工藤 1995 : 29)

本論文で取り上げるアイヌ語のアスペクト形式は、これまで日本語標準語のテイル形やタ形と形態的意味的に並列に扱われる部分もあったが、実際はさまざまな点で異なっている。その諸問題から、本論文では一般言語学でのアスペクトの定義に加え、次の「2.2」で述べる「存在型アスペクト」という枠組みを導入することにした。

2.2 存在型アスペクト

存在動詞が文法化してアスペクト形式になる現象は様々な言語にある (Bybee1985)。これを、金水(2006)、岡(2013)などに倣い、本論文では「存在型アスペクト形式」と呼ぶ。

金水(2006)は、日本語の存在型アスペクト形式に関して、「人の存在を表す存在動詞が中核的なアスペクト形式の資源として選ばれるということは、アスペクト形式が存在表現と比較的近いところにあることを示している。(金水 2006 : 266)」と述べているが、アイヌ語においても、「継続」「完了」といった中核的アスペクトと、存在動詞 an を含むアスペクト形式とが密接にかかわっている。

また、岡(2013)は日本語のテイル形式に関して、「従来アスペクト形式としてとらえられてきたテイル形式を、事態の存在化形式として一次的に規定 (岡 2013 : 20)」している。そして、「アスペクトを状況の在り方=存在様相を述定する仕方」として、すなわち、実現した事態が「今、ここで、私において」表れたものとして把握する仕方である (岡 2013 : 20)」と捉えている。アイヌ語のアスペクトを考えるうえでも、存在様相を述定する仕方を考えることは有用であると思われる。

第4章では、存在型アスペクト形式 kor an、wa an、hine an、kane an を取り上げるが、これらはいずれも接続助詞+存在動詞 an (複数形 oka)「ある、いる、なる」という構造をとり、「～ている (てある)」と日本語訳されることが多い形式である。

また、第5章では、動詞 a「座る」を語彙の源泉とした助動詞 a、そして、その助動詞 a と存在動詞 an との複合形式と考えられている助動詞 aan を取り上げる。a は過去・完了を表し、aan は完了と感嘆を表すというのがほぼ定説となっており、前者は「～た」、後者は「～たのだなあ」と日本語訳されることが多い。a と aan のうち、本論文で存在型アスペクト形式と位置付けるのは aan であるが、本論文の主張には両者を関連付けて論じる必要があるため、a も分析対象としている。

2.3 証拠性

証拠性については、助動詞 a および助動詞 aan との関係から、第5章で扱う。証拠性 (evidentiality) とは、情報の出処を示す文法範疇である。De Haan(2005 : 314-315)によると、証拠性のマーカーは話者が自身の陳述に対して持っている証拠を表している。以下、De Haan(2005)の定義に従い、説明を行う。

証拠性は直接証拠 (direct evidence) と間接証拠 (indirect evidence) の二つに大別される。直接証拠は、話者が述べている動作や出来事に対して、話者自身が感覚的証拠を持っているときに用いられる。通常、直接証拠は視覚的証拠 (visual evidence) を示す。例えば次の Fasu 語の例では、接周辞 a-...-re によって視覚的証拠が示されている。

a-pe-re

VIS-come-VIS

‘[I see] it coming.’

(De Haan 2005 : 314、グロス は原典通り)

そのほか、直接証拠には聴覚的証拠(auditory evidential)や非視覚的感覚による証拠(non-visual sensory evidential)がある。

一方、間接証拠は、話者は出来事を目撃してはいないが、出来事のあとに事実を知った場合に用いられる。間接証拠は推量(inference)と引用(quotatives)に分けられる。推量証拠(inferential evidentials)は、話者が身体的証拠に基づいて推定する場合に用いられる。引用(quotatives)は一報告(reportatives)や伝聞(hearsay)やセカンドハンド(second-hand)とも呼ばれるが一話者が動作や出来事について他者から知った場合に用いられる。

多くの言語では、過去時制において、出来事を目撃したかしなかったか(すなわち direct か indirect か)を区別する。以下のトルコ語の例では、過去辞-di が話者によって目撃されたことを示すのに対し、過去辞-miş は目撃されていないことを示す。

a. Ahmet gel-di.
Ahmet come-PST.DIR.EVD
‘Ahmet came.’ (witnessed by the speaker)

b. Ahmet gel-miş
Ahmet come-PST.INDIR.EVD
‘Ahmet came.’ (unwitnessed by the speaker)

(De Haan 2005 : 314-315、グロス は原典通り)

また、間接証拠性との関連が指摘されているものとして、意外性(mirativity)がある。意外性とは、話し手の予想外の気持ちや新情報を表す意味範疇である (Delancy 2001, Aikhenvald 2004, De Haan 2012)。たとえば上に挙げたトルコ語の過去辞-miş は、「間接経験を表す一方、話し手の既存の知識(あるいは予測)に反する情報であれば、直接経験に基づく情報にも使用することができる。そのとき-miş は意外性(mirativity)を表す (児倉 2015 : 118)」。

日本語にも、直接/間接の対立がみられる諸方言が存在し、間接的エヴィデンシャルティーは意外性とも絡み合っている (工藤 2014)。たとえば首里方言の「maja : ja size : n. (マヤーヤ シジェーン)」という文は、次の3つの場面で使用できる (size : n はシテアル相当形式)。

- ①猫の死体はないが、間接的証拠となる血痕を見て「猫が死んだのだ」と、過去の事象を確認(推定)した場合

- ②猫の姿が見えないのでどうしたのかと思っていたところ、発話現場で人から「猫は死んだ」と聞いて確認した場合
- ③元気な猫なので死ぬはずがないと思っていたにもかかわらず、(話し手の予想を裏切って) 今日の前に猫の死体を見て直接確認した場合 (この場合は「シジェーサヤー」のように終助詞「サヤー」を伴うのがほぼ義務的になる) (工藤 2014 : 575)

第3章 アイヌ語における「アスペクト形式」の位置づけをめぐって

一般言語学におけるアスペクトはまず完結相(perfective)と不完結相(imperfective)の対立が基盤となっているが、アイヌ語のアスペクトを考える上では、その対立は必ずしも有用とはいえない。

まず意味的な点であるが、アスペクトという観点から分類した場合、アイヌ語の動詞は「状態性動詞」と「非状態性動詞」とに大別される(知里 1973[1942]、中川 1981)。中川(1981)によると、状態性動詞は、pirka「良い」、poro「大きい」等いわゆる日本語の形容詞にあたるものや、eraman「わかる、知っている」、an「ある、いる、なる」、ne「～である、～になる」などの動詞であり、「単独で<静的な状態>を表わし得る(中川 1981:132)」動詞¹⁵である。一方、非状態性動詞はそれを表し得ない動詞である。

注意すべき点は、アイヌ語において、形容詞は動詞に含まれ¹⁶、動詞と同様のふるまいを見せる点である。形容詞的動詞は「(その状態)になる」という変化の意味を持ち、動詞同様に人称接辞を取ることがある。例えば poro という単語の場合、例(3)のように「大きい」という意味にもなれば、例(4)のように「大きくなる」という意味にもなる。そして文法的にも同じで、例(5)のように人称接辞を取る。語彙自体、完結相と不完結相の形態的区別がなく¹⁷、そのときどきによってアスペクトの意味が異なる。

(3) teeta wano tan pet poro ruwe ne.

昔 から この川 大きい こと COP
昔からこの川は大きい(水が多い)

(中川・中本 2004:41)

(4) apto as wa nisapno pet poro ruwe ne.

雨 降る て 急に 川 大きい こと COP
雨が降って急に川が大きくなった(水かさが増した)

(中川・中本 2004:41)

¹⁵ 中川(1981)では動詞 kor「持つ、持っている」は状態動詞に含まれているが、実際は非状態性動詞と状態性動詞の中間に位置する動詞である(中川先生私信)。

¹⁶ 文法機能によって分類すると、アイヌ語では、①動詞、②名詞、③連体詞、④副詞、⑤接続詞、⑥助詞、⑦間投詞といった7つの品詞が立てられる(田村 1988:18)。アイヌ語では形容詞という独立のカテゴリーは設けておらず、形容詞の意味を表す要素は動詞(自動詞)に含まれる。

¹⁷ アイヌ語の形容詞的動詞について、知里(1973[1942])は「あらゆる形容詞は意味上「不完成態」「完成態」に相当する二種のアスペクトを有している。(p.483)」と記している。

- (5) tane pakno e=poro ruwe ne yakun
 もう まで 2SG.S=大きい こと COP なら
 もう今お前がこのくらい大きくなったのなら

(田村 1984 : 32)

完結相と不完結相の対立に関して、文法的な点から言えば、アスペクト的形式としての助動詞や構文などは使用の義務性が無く、完全な対立を生むものでもない。例えば、「座っている」という変化の結果継続をあらわす場合でも、a「座る」という動詞単独で用いられる場合と、wa an「～ている」と共に用いられる場合が存在する。例(6)(7)はどちらも副詞 rapok 「～間に」が後続している。日本語であれば「～間に」が後続すれば動詞「座る」はテイル形を取って「座っている間に」とならなければいけないところ¹⁸だが、例(6)は動詞単独で用いられていることから、動詞単独で変化の結果継続を表すことが可能だと分かる。そしてまた、例(7)のように、wa an というアスペクト形式（この場合は変化の結果継続をあらわす）も取ることができ、例(6)と例(7)の間には意味的な対立は無い。

- (6) a=an rapok kamuyutar ahuppa hine
 座る.SG=4.S 間に 神 たち 入る.PL て
 私が座っているうちに神々が集まって

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0147KM_34609ABP)

- (7) a=an wa an=an rapok
 座る.SG=4.S て いる.SG=4.S 間に
座っている間に

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0147KM_34609ABP)

これは動作の継続を表している場合 (kor an の場合) でも同様である (例(8)(9)参照)。

- (8) menoko utar suke pa rapok
 女 たち 料理する PL 間に
 女性達が料理を作っているうちに

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0178KM_34720ABP)

- (9) nea pon menoko suke kor an rapokke
 あの若い女 料理する て いる.SG 間に

¹⁸ 「座る間に」という表現自体はあり得るが、例(6)の状況には合わない。

あの若い娘が料理をしている間には

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0216UT_35237AP)

このように、アイヌ語においては、語彙的にも文法的にも、完結相と不完結相の対立は明確ではない。そのほか、日本語標準語の場合、形容詞はテイル (テアル) 形を取らないが、アイヌ語の状態性動詞はテイル (テアル) 形相当の形式をとることができる点も考慮しなければならない。例(10)では、poro「大きい」に kor an「～ている」が後続し、川が大きくなりつつある (増水している) 状況が表されている。

(10) pet poro kor an.

川 大きい て いる.SG

川が増水している

(佐藤 2007a : 44)

さらに問題となるのは、kor an、wa an、kane an、hine an は、形態的に、いわゆるアスペクトなのか、付帯状況を表しているのか、明確な境界を設けることはできないという点である。たとえば以下の例(11)(12)は、どちらも動詞 ramu「～を思う」に kor oka (oka は an の複数形) が後続し、「思う」という動作の継続が表されているが、例(11)が「思っていた」と訳されているのに対し、例(12)は「思っ^て暮らしていた」のように oka が「暮らす」という意味で訳されている。しかしながら、どちらも「思う」という動作が長期にわたって継続していた状況には変わらないのであり、接続助詞の前の動詞に重点を置いてアスペクト的に解釈する (例(11)) か、後ろの動詞に重点を置いて、前の動詞の動作を付帯状況として解釈する (例(12)) かは随意的なものである。

(11) sine tuyorop a=ne humi ne kunak a=ramu kor oka=an a p

一つ腹 4.A=COP 感じ COP ように 4.A=~を思う て いる.PL=4.S ただが

一つ腹に生まれた者で私達はあ^ると思^っていたのに

(人々の物語 : 123)

(12) tane pakno a=unuhu ne kunak a=ramu kor oka=an korka

今 まで 4.A=母 COP ように 4.A=~を思う て いる.PL=4.S けれど

今まで<あの魔猫を>母さんだと思^って暮ら^していたけれど

(上田トシの民話 1 : 25)

「暮らす」のような訳出を許す理由として、kor an、wa an、kane an、hine an の存在動詞 an 自体が、人称標示を必要とするものだという事情がある¹⁹。つまり、テイル (テアル) 形のイル (アル) という存在動詞が高度に文法化されているのに対し、アイヌ語の an は具体的な存在の意味を保持している。

さらに、これらの形式は、接続助詞(kor, wa, kane, hine)の前後の動詞で人称が異なることが珍しくない。たとえば次の例(13)では、動詞 parooske 「～を養う／～の食事の世話をする」の動作主は第三者である「女性」であり、oka 「いる (an の複数形)」の動作主は話し手と女性の両者である。つまり、文字通りには「i=parooske kor oka=an」は「(女性が) 私を養って、私たちは暮らしている」という意味になる。²⁰

- (13) i=parooske kor oka=an ayne a=kopokor ka ki.
 4.O=～の食事の世話をする て いる.PL=4.S あげく 4.A=～との間に子が生まれる も する
 <女性が>私を養ってくれていると<lit.私を養って、私たちは暮らしていると>
 子どもができました。

(上田トシの民話2:164)

また、変化の結果継続をあらわす wa an の場合は、主体の状態の変化を表すものと、対象の状態・位置の変化を表すものに区分されるが、後者は、wa の前の動詞と動詞 an の人称が異なっている (詳細は 4.1.1 参照)。

他にも問題となるのは、①これらのアスペクト形式は前の動詞句や文全体を受ける場合があること、②アスペクト形式の複数使用が可能であること、③モダリティ要素が前部に來ることが可能である点である。

①について、例(14)では、wa an は動詞 isam 「無い」単独ではなく、ene a=kar hi ka isam 「私はどうすることもできない」という文に接続している。

- (14) ene a=kar hi ka isam wa an pe a=ne ruwe ne
 どのように 4.A=～を作る ことも 無い て いる.SG もの 4.A=COP こと COP
 <私は>どうすることもできずにいたのでした
 <lit. どうすることもできなくているもので私はあったのでした>

¹⁹ 方言によっては kor an に人称制限がある。十勝方言では、kor an は動作継続や変化の進行を表す形式であるが、1 人称の主格形が表示された動詞と kor an が共起することはない、1 人称動作主の動作継続を表す場合には kan an という形式が用いられる。(このほか、十勝方言のアスペクトについては高橋 2004a, 2004b, 2006, 2015, 2018 参照)

²⁰ 「kor an の an の人称、数は kor an の付く動詞の人称、数に一致する (佐藤 2008: 197)」という記述もあるが、田村(1972: 150)では、kor の前の動詞の主語と an の主語が同一とは限らないと記されている。

②のアスペクト形式の複数使用とは、たとえば「動詞 kor an wa an」のようなものであるが、ここでは kor an と wa an のアスペクト的性質を両方有しているというわけではない(詳細は 4.4 参照)。

そして、③については、たとえば例(15)²¹のような事例である。「kusu ne (接続助詞 kusu + コピュラ動詞 ne)」は通常、意志や未来を表す²²文末表現として用いられるが、ここではその kusu ne に kor an が後続している。このような場合、kor an をアスペクトとして統語的に分析すること自体が困難となる。

- (15) a=e kusu ne kor an=an kotcake ta
 4.A=~を食べる つもり COP て いる.SG=4.S 前 に
 a=onaha a=unuhu pirka nanuhu sisuye pekor yaynu=an kor
 4.A=父 4.A=母 美しい 顔 揺れる ように 思う=4.S て
食べようとすると<lit. 私が食べようとしている>目の前に
 本当の父と母のきれいな顔がちらつくように思って

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0157KM_34681ABP)

つまり、kor an や wa an、そして 4.2 で扱う kane an や 4.3 で扱う hine an もそうであるが、これらはいわゆるアスペクト形式として扱われることが多いものの、文法的にも意味的にも、一部でアスペクト的解釈を許す場合があるにすぎないのである。

第 5 章で扱う助動詞 a は、「過去」や「完了」を表すとされてきた形式であるが、これもやはり義務的な形式ではない。a は日本語訳の面ではタ形で訳されてほとんど差し支えない形式であり、実際にほとんどの場面でそう訳されているのだが、タ形ほど多義的な用法も持っていない。尾上(2001)はタ形の表す意味を以下のように類型化しており、①⑥はアスペクト、②はテンス、③④⑤はムードに関わる。このうち、③~⑥の用法は a には見られず、①〔完了〕や②〔過去〕を表すときにしてもすべての場合で a が用いられるわけではない。

²¹ 「私」の本当の両親ではない夫婦に食事を出されるが、「私」がその食事を食べようすると、本当の両親が顔がよぎって食べることができないという場面である。

²² 二人称の場合は命令表現になる。

iteki neno an puri e=kor kusu ne na
 PROH そのように ある.SG 振る舞い 2.A=~を持つ kusu ne FIN
 けっしてそんな振舞いをするのではないぞ (中川 1995 : 163)

①〔完了〕

- (1) 病気はもう治った。
- (2) やっと試験が全部済んだ。
- (3) 裏の庭で猫がニャーと鳴いた。
- (4) 健康が何より大事だとつくづくわかった。
- (5) 思えばこれまでおまえにもずいぶん苦勞をかけたなあ。

②〔過去〕

- (6) 先週の日曜日は六甲山に登った。
- (7) あの時はずいぶん腹が立った。
- (8) 下宿では毎晩集まって騒いだものだ。

③〔確言〕

③-1 「事態の獲得」

- (9) わかった！なるほどそうだったのか。
- (10) しめた！
- (11) (試験前夜、教科書をバタンと閉じて) 覚えた！ 寝るぞォ。

③-2 「見通しの獲得」

- (12) (詰みにつながる手筋を発見して三1角を打ちながら) よし、これで勝った！
- (13) (殺人計画の完成) これで間違いなくあいつは死んだ！

③-3 「発見」

- (14) あった！あった！
- (15) バスが来た！

③-4 「決定」

- (16) よし、買った！
- (17) ええい、やめた！

④〔想起〕

- (18) おれには手前という強い味方があったのだ。
- (19) 君は、たしか、たばこを吸ったね。

⑤〔要求〕

- (20) どいた！どいた！
- (21) さっさとめしを食った！食った！

⑥〔単なる状態〕

- (22) とがった鉛筆は折れやすい。
- (23) 壁にかかった絵をごらん。

(尾上 2001 : 372-374)

「a がタ形で訳されてほとんど差し支えない」という問題は、資料の性質に依拠する部分

もある。現存するアイヌ語資料は、自然談話資料は極めて少なく、大多数が口承文芸資料である。さらに、登場人物のひとり（≡主人公）が物語中の一人称を以て叙述して語る形式がほとんどであり、テンスも表示しないために、aの有無に関わらず、タ形が用いられても不自然ではない場合が多いのである。

以上のように、現在のアイヌ語のアスペクト研究には、語彙アスペクトの問題、アスペクト形式が相互排他的ではない問題、資料のもつ語彙的・文体的制限といった様々な問題が絡み合っている。

第4章 存在型アスペクト形式—kor an, wa an, kane an, hine an

本章では、存在動詞 an「ある、いる、なる」を内部に含むアスペクト形式 kor an、wa an、hine an、kane an を扱う。4.1 では kor an と wa an、4.2 では kane an、4.3 では hine an を扱う。4.4 ではアスペクト形式の複数使用について述べる。4.5 で本章のまとめを行う。

4.1 kor an と wa an の分析

4.1.1 先行研究の検討

4.1.1.1 接続助詞 kor と接続助詞 wa についての記述

まず、接続助詞 kor と wa 単独の機能を見ておきたい。田村(1988:55)によると、接続助詞 kor は「～しながら、～するとき」というように、2つ事象の同時進行を表す(例(16))。また、日本語の「ながら」と違って、前後の文の主語は同じとは限らない(例(17))。

(16)kuni ku=ramu kor k=ek.

そう 1SG.A=~を思う ながら 1SG.S=来る.SG

そう (私は) 思いながら (私は) 来た

(田村すず子 1988:55)

(17)horippa=as kor en=nukar.

踊る.PL=1PL.S ながら 1SG.O=~を見る

(私たちが) 踊っているとき (彼は私を) 見た

(田村すず子 1988:55)

接続助詞 wa について、田村(1996:821)は「二つの動詞句をつないで一まとまりのことがらとしてまとめる働きをする」と述べている。以下に田村(1996:821)の記述を列挙する(例文番号は本論文のものによる)。

①一つのもの/ことについて二つ以上の説明や叙述をする場合にその二つの動詞句をつなぐ。

(18)upakno oka wa sattek kusu oka wa

同じくらいに ある.PL て 痩せる(とても) いる.PL て

同じくらいの大きさを痩せこけていて

②前の動詞句が後の動詞句の表す出来事の方法や意図などを説明する。

(19)ku=hoyupu wa k=ek

1SG.S=走る.SG て 1SG.S=来る.SG

私は走って来た

③前の動詞句の出来事が終わってから後の動詞句の出来事が起こることを言う。

(20) otcike huraye wa pirpa
お膳 ~を洗う.SG て ~を拭く.PL
お膳を洗ってふきなさい

④前の出来事が後の出来事の原因か理由になっている。

(21) k=ukao oyra wa rurikan
1SG.A=~をしまう ~を忘れる て 少し湿る
私は（洗濯物を）しまい忘れて少し湿った

また、佐藤(2008)は wa の機能について、以下のように説明している。

wa は日本語の「～て」に概ね対応するが、目立つ違いもある。「お椀を私が落として割った。」は正しい日本語であるが、「お椀を私が落として割れた。」は少しおかしい。すなわち、日本語の「～て」は、省略されている主節の主語が「～て」節の中の主語「私が」と同一であることを要求する。アイヌ語の wa にはそのような制約がないようである。itanki k-opici wa perke.²³「(直訳) お椀を私が落として割れた。」…中略…なお、wa は付帯状況を示すことがあるが、全くの同時進行というよりはむしろ、ある程度の前後関係を含意する場合が多いようである。

(佐藤 2008 : 46、一部省略)

4.1.1.2 kor an と wa an に関する研究

沙流方言における kor an と wa an について記述したものには中川(1981)がある。中川(1981)は kor an、wa an と共起する動詞との関係を調べ、動詞の基本的なタイプを探っている。アスペクティブな観点から分類した場合、アイヌ語の動詞はまず「状態性動詞」と「非状態性動詞」とに二分される (cf. 知里 1973[1942]、中川 1981)。中川(1981)によると、状態性動詞は、pirka「良い」、poro「大きい」等いわゆる日本語の形容詞にあたるものや、eraman「わかる、知っている」、kor「持つ、持っている」²⁴、an「ある」、ne「である」などの動詞であり、「単独で<静的な状態>を表わし得る (中川 1981:132)」動詞である。非状態性動詞は、それを表し得ない動詞である。

²³ itanki k=opici wa perke.
お椀 1SG.A=~を落とす て 割れる

²⁴ kor は「所有している」という状態を表す点で、非状態性動詞と状態性動詞の間にある。(中川先生私信)

状態性動詞は、その状態であることとその状態になることの二つの意味を持っている。たとえば an「ある、いる」は、「なる」という意味を表すことがある (例(22))。また、形容詞的な動詞、たとえば poro「大きい」は「大きくなる」という意味になることがある (例(23))。つまり、非限界的(atelic)、限界的(telic)のどちらの用法も持ちうる。

(22) kunneywa an.

朝 いる.SG

朝になる

(田村 1996 : 9)

(23) e=poro yakun

2SG.S=大きい なら

あなたが大きくなったら

(田村 1996 : 544)

非状態動詞について、中川(1981)はタイプ I～IIIの3つに分けている。タイプ I は主体・対象の状態・位置の変化を表わす動詞で、wa an が用いられた場合は変化の結果の継続を表し、kor an が用いられた場合は変化の進行過程を表す。

以下の3例はタイプ I の動詞のうち、自動詞の例である。例(24)は主体の位置の変化、例(25)は主体の状態の変化、例(26)はそのどちらにもとれる例である。

(24) nen ka soy ta ek wa an.

誰 か 外 に 来る.SG て いる.SG

誰か外に来ている

(中川 1981 : 132)

(25) tap ku=siyeye wa k=an.

今 1SG.S=病気になる て 1SG.S=いる.SG

今、私は体の具合が悪い<病気になっている>

(中川 1981 : 132)

(26) ne hotke wa an okaypo mos ka somo ki no

その 寝る て いる.SG 若者 目覚める も NEG するで

寝ているその若者は目醒めもしないで

(中川 1981 : 132)

タイプ I の他動詞は、主体の状態の変化を表すものと、対象の状態・位置の変化を表すものに区分でき、これらの違いは wa の直前の動詞と動詞 an の取り得る人称の関係に反映されるという。他動詞においては、wa の直前の動詞の主格の人称が an の主格の人称と一致する場合と、wa の直前の動詞の目的格の人称が an の主格の人称と一致する場合がある。例(27)では、hok 「～を買う」と an の主格人称接辞はどちらも ku=で、一人称単数である。例(28)では、an の主格人称接辞はゼロ（三人称）で、hok の目的語である tonoto 「酒」が an の主語になっている。²⁵

(27) sake ku=hok wa k=an na en=kosinewe yan.
 酒 1SG.A=~を買う て 1SG.S=ある.SG FIN 1SG.O=~のところへ遊びに行く POL
 お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
 (中川 1981 : 133)

(28) tonoto ku=hok wa an na en=kosinewe.
 酒 1SG.A=~を買う て 1SG.S=ある.SG FIN 1SG.O=~のところへ遊びに行く
 お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
 (中川 1981 : 133)

タイプ I の動詞が kor an と共起した場合、wa an と共起したときに表される結果状態に達するまでの変化の進行過程にあることを表す。これについて、中川(1981)は田村(1972)の mokor 「眠る」の例で典型的に表されているとし、その記述を参照している。本論文でも以下に田村(1972)の記述を引用する。

もっとも、……wa an は § 1 の……kor an とは異なり、やはり V1 が an に先行する場合に用いられるのである。たとえば：

mokor kor an. (眠りかかっている) mokor wa an. (すでに眠りについて
 眠り つつ ある 眠っ て いる しまっている)

(mokor は「眠りにつく」ことを表わす)

(田村 1972 : 153、一部表記変更、グロスは原典通り)

但し中川(1981)は、「V kor an の形をとる、とらないという問題は、その動作・変化が、人により場合により、どの程度持続するものとしてとらえられるかにかかっており、絶対的な線が引けるものではない。(中川 1981 : 135)」と述べている。上記の mokor kor an に

²⁵ 例(27)(28)は、「お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい」という日本語文を、別々のアイヌ語話者が訳したものである。

対しても、中川(1981)におけるインフォーマント2名の方は、そのような言い方はしないと指摘したという。

タイプIIの動詞は、主体・対象の状態・位置の変化には関与せず、動作そのものを表わす動詞であり、これには kor an のみが用いられて動作の継続が表される。

(29) tap neno tususke=an kor an=an ayne sirpeker hine

このように 震える=4.S て いる.SG=4.S うちに 明るくなる て

そうやってガタガタ震えているうちに夜が明けて

(中川 1981 : 135-136)

タイプIIIの動詞は nukar 「～を見る」一語で、これは wa an と kor an のどちらとも共起するが、どちらの場合もアスペクト的意味が同じという点でタイプIと異なる。例(30)と(31)は、それぞれ別のインフォーマントが、日本語の「何見てるの？」に対応するアイヌ語として提示した用例であり、kor an も wa an も同等に用いられている。また、例(32)は kor an、例(33)は wa an の例であるが、タイプIのように、kor an が動作継続・変化進行で wa an が変化の結果継続という関係にはなっていない。

(30) hinta e=nukar kor e=an?

何 2SG.A=~を見る て 2SG.S=いる.SG

何見てるの?

(中川 1981 : 138)

(31) hemanta e=nukar wa e=an?

何 2SG.A=~を見る て 2SG.S=いる.SG

何見てるの?

(中川 1981 : 139)

(32) nonno kikir kotoyse wa ku=nukar kor k=an.

花 虫 ~にたかる て 1SG.A=~を見る て 1SG.S=いる.SG

花に虫がたかっているのを見ているんだ

(中川 1981 : 139)

(33) toan kur en=nukar wa an.

あの 人 1SG.O=~を見る て いる.SG

あの人こっちを見ているよ <lit. 私を見ている>

(中川 1981 : 139)

中川(1981)はこうした nukar と kor an、wa an との関係について、「<注視する>という能動的な「見る」行為そのものを nukar が表わす時、kor an をとり、<視線をそちらに向ける>といった変化を nukar が表わして、その後の「見ている」状態が、<目を向ける>という行為の結果の状態と見なされる時、wa an をとる (中川 1981 : 140)」と解釈している。

このほか、kor an については田村(1988)によって習慣的用法が報告されている。(例 (34))

(34)nen ne yakka sapaha kunnere kor oka.
 誰 COP ても 頭 ~を黒く染める て いる.PL
 だれでも頭を黒くそめている

(田村 1988 : 55)

千歳方言の kor an と wa an については佐藤(2006)が記述しているが、佐藤(2006)は千歳方言についてもおおよそ中川(1981)の分類が当てはまることを認めている。

さらに佐藤(2007a, 2007b)は、日本語のテイルは「今、庭に犬が死んでいる (工藤 1995 : 119)」のような必然的、直接的な結果だけでなく、「豆の様子じゃ、10 里位歩いているよ (工藤 1995 : 121)」のような偶然的、間接的な結果も表すことができるのに対し、wa an は必然的、直接的な結果を表す場合にしか用いられないとしている。つまり、wa an は動作パーフェクトを表わすことができない (佐藤 2007a, 2007b)。佐藤(2007a)によれば、以下のような表現はアイヌ語には原則見られない。

(35)*tane ku=ipe wa k=an.
 今 1SG.S=食事する て 1SG.S=いる.SG
 私はもう食事している (食べ終わった状態だ)。

(佐藤 2007a : 50)

次に、状態性動詞について、中川(1982a)²⁶は、以下のタイプIVとVに分けている。(中川 1982a : 99-101 を要約)

タイプIV : pirka 「よい」、hure 「赤い」などの性質・形状を表す動詞

²⁶ 状態性動詞についての記述は中川(1981)では割愛されているため、ここでは中川(1982a)のみを参照する。

eraman「わかる、知っている」、eranpewtek「わからない」など精神活動を表す動詞

タイプV：eyaykopuntek「～が嬉しい、～を喜ぶ」、hayorototke「くすぐったい、くすぐったがる」などの感情・感覚を表す動詞

(但し、感覚動詞でも、全体的感覚を表す動詞はタイプV、部分的感覚を表す動詞はタイプIV)

そして、タイプIVの動詞が kor an と共起する場合は変化の進行過程にあり、タイプVが kor an と共起する場合は動作の過程にあるという。これらのことから、中川(1982a)は、タイプIVとVの関係が、非状態動詞のところでも述べたタイプIとIIの関係と平行 (I : II = IV : V = 変化 : 動作(非変化)) であり、「アイヌ語の動詞は、アスペクト的観点からは、状態—非状態、変化—動作(非変化)という二つの軸によって、大きく区分することができる (中川 1982a : 100)」と述べている。

先行研究にもとづき、沙流方言、千歳方言における kor an と wa an のアスペクト的意味をまとめると次の表 2 のようになる。kor an の習慣的用法については 1 例しか挙がっていないが、動詞 kunnere「黒くする」(例(34)参照)を変化動詞と考えて組み込んだ。また、kor an、wa an は必ずしも完全な対立をなすものではなく、使い分けは話者判断に依るところがあるようである²⁷。

		kor an	wa an
非状態性動詞	非限界動詞 (動作動詞)	～している<動作継続>	×共起しない
	限界動詞 (変化動詞)	～しつつある <変化の進行過程>	～している／ある <変化の結果継続 =状態パーフェクト>
		習慣的用法	—
状態性動詞	感情・感覚	～している<動作継続>	?
	性質・形状	～しつつある <変化の進行過程>	?

表 2 先行研究における kor an と wa an の区分

このほか、特筆すべき点としては、wa an が表す一時性がある。佐藤(2007a)は、存在動詞 an と wa an とが共起した場合のアスペクト的意味を、「一時的存在」であるとしてい

²⁷ 中川(1981)参照。

る。動詞 an「ある、いる」は存在を意味するのに通常単独で用いられるが、例(36)のように wa an を取る場合がある。これについて佐藤(2007a)は、「wa an が存在動詞のような本来恒常的な状態を表す動詞と共に用いられた場合は、「一時的な状態」を表すのではないか (佐藤 2007a : 47-48)」と考えている。つまり、例(36)は、「「存在」といっても、「たまたま一時的にそこにいた／あった」(今後もそこにある／いるかどうかは不確実) という意味 (佐藤 2007a : 48)」を表していることになる。

(36)ku=nimu akusu rik ta kinasutunkur an wa an.
 1SG.S=木に登る すると上 に ヘビ いる.SG て いる.SG
 私が木に登ったら上にヘビがいた。

(佐藤 2007a : 47)

4.1.1.3 本項目の視点

沙流方言における kor an、wa an と各動詞との関係は、中川(1981,1982a)によってほぼ明らかとなっている。しかし、佐藤(2006 : 49)も述べているように、中川(1981,1982)は動詞分類を目的としており、kor an、wa an 自体の機能の記述を目的としているわけではない。本論文では、kor an、wa an の機能に焦点を当てて記述することとする。

まず、4.1.2 で kor an、wa an とそれぞれ共起する動詞を調べて、分類する。

4.1.3 と 4.1.4 では、主に先行研究で残された課題を検討する。これまで特に問題となっているのは、kor an と wa an の両方を取り得る動詞についてである。そこで 4.1.3 では、まず kor an と wa an の両方と共起する動詞を調べ、その傾向を概観した上で、中川(1981)のタイプⅢの動詞に関する能動性の問題を含めた諸問題を検討する。4.1.4 では、これまであまり記述されてこなかった、状態性動詞との共起について述べるとともに、佐藤(2007a)で言及された wa an が表す一時性について検討する。

4.1.5 と 4.1.6 では、kor an と wa an が動作のどの局面までを表し得る形式なのかを考え、両形式のアスペクト的意味は、存在様相を表すところから派生した二次的なものであることを述べる。まず 4.1.5 では、日本語の西日本諸方言にあるシヨル形とシトル形を参照し、kor an、wa an のアスペクト的な意味と比較する。kor an、wa an は概して日本語標準語のテイル形相当として扱われているが、テイル形の意味は多様であり、kor an、wa an があらかうする意味範囲よりも広い。むしろ、非状態性動詞の場合の kor an「動作継続」または「変化の進行過程」、wa an「変化の結果継続」という対立は、シヨル形とシトル形の対立と類似している²⁸。4.1.6 では、kor an と wa an の動詞 an の非文法化に触れ、「存在—非存在」という意味的な対立がアイヌ語のアスペクトを考える上で重要であることを述べる。最後に、4.1.7 で、kor an と wa an の分析の小括を述べる。

²⁸ 西日本のシヨル形シトル形の対立については中川(1982a)も言及している。

4.1.2 共起する動詞

4.1.2.1 動詞分類

「参考文献」の用例を使用するほか、「参考資料」より抽出した動詞を使用する。抽出した動詞の一覧は本論文末尾の「付録」に掲載し、本項目においてはその一部を適宜用例として挙げる。なお、後述する kane an (4.2 参照)、hine an (4.3 参照) と共起する動詞についても、同様の方法で収集・掲載している。動詞の分類については、以下の表 3 を参照されたい。

A 主体動作・客体変化動詞 a1 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞 a2 所有関係の変化をひきおこす動詞
B 主体変化動詞 b1 意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞 b2 無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞
C 主体動作動詞 c1 主体動作・客体接触をあらわす動詞 c2 認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞 c3 意志的動作をあらわす動詞 c4 長期的動作をあらわす動詞 c5 非意志的な動き（現象）をあらわす動詞
D 思考・感情・知覚動詞 d1 思考をあらわす動詞 d2 感情をあらわす動詞 d3 知覚・感覚をあらわす動詞
E 状態性動詞

表 3 本章における動詞分類

A～D が先行研究における「非状態性動詞」にほぼ相当し、E が「状態性動詞」にほぼ相当する。ただし、「D 思考・感情・知覚動詞」は、非状態性と状態の間にあると言える。また、A～C についても、「b2 無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞」「c4 長期的動作をあらわす動詞」「c5 非意志的な動き（現象）をあらわす動詞」などには、非状態性に近いものも存在する。

この動詞分類は、工藤(1995: 73-78)の「動詞の全体的分類」および工藤(2014: 215-218)の「3.5 所属動詞一覧」を参考としている。これまで、kor an や wa an は日本語のテイル形と比較されることがしばしば行われているという事情から、今回試験的に日本語の動詞分類を参考とした次第である。しかし、表 3 の分類は工藤(1995, 2014)の分類そのま

まのものではなく、一部を改変したものである。その理由としては、動詞の自他の問題と、意味範囲の問題がある。

動詞の自他区分²⁹について、例えばAの「主体動作・客体変化動詞」は日本語の場合「他動詞」であるが、アイヌ語では他動詞も自動詞も「主体動作・客体変化動詞」に含まれると考えた。たとえば動詞「つくる」は日本語では他動詞だが、対応するアイヌ語の動詞は他動詞 kar「～を作る」のほか、kar が名詞 ay「矢」を抱合した自動詞 aykar「矢を作る」なども存在する。このような場合、aykar は客体の変化も意味に含みこむと考え、「主体動作・客体変化動詞」に相当するものとして、分類している。

意味の面では、例えば「祈る」という動詞は、工藤(2014)の分類では「状態動詞」に分類され、「思考」を表す動詞として扱われているが、アイヌ語の「祈る」に相当する動詞 nomi「～に祈る」や kamuynomi「神に祈る」などは一般的に言語活動や身体動作を主体とするため、ここでは「主体動作動詞」として分類した。

動詞の計上方法に関しては、同じ動詞が異なる表記で出現した場合は、そのうちの一つを代表させた。

4.1.2.2 全体の傾向

kor an と共起した動詞(句)は 807 個、wa an と共起した動詞(句)は 474 個であった。

kor an は変化動詞よりも動作動詞との共起率が高く、また、感情をあらわす動詞との共起も多く見られた。wa an は変化動詞と動作動詞はほぼ同等数であったが、kor an に比べ状態性動詞との共起が多く見られた。動作動詞のうち、非意志的な動作については、kor an のほうには kewrototo「ごろごろ鳴る」、pasrototke「パチパチ燃える」、kurkotkurkot「キラキラ輝く」のような連続的な動作が散見される。

構文的には、習慣性を表す助動詞 ranke や (例(37))、多回性を表す構文「動詞 a 動詞 a (動詞+助動詞 a の連続)」に kor an が後続する例 (例(39)) が多く見られた。助動詞 ranke と wa an の共起は 1 例しか無いが、その場合でも「助動詞 ranke + kor an」と同じく、習慣的な意味が現れている (例(38))。「動詞 a 動詞 a」構文と wa an が共起した例は見られなかった。

(37)sike=an wa iwak=an ranke kor an=an ayne
荷を背負う=4.S て 帰る=4.S HAB て いる.SG=4.S あげく
荷物を何度も運んで家へ帰ったのだが

²⁹ アイヌ語の動詞は、0 項動詞 (完全動詞)、1 項動詞 (自動詞)、2 項動詞 (他動詞)、3 項動詞 (複他動詞)、コピュラに分類される。0 項動詞は主語も目的語もとらない動詞、1 項動詞は主語をとるが目的語も補語もとらない動詞、2 項動詞は主語と目的語 1 つをとる動詞、3 項動詞は主語と目的語 2 つをとる動詞である。ここでの動詞分類にあたっては、便宜上、1 以下の項をとる動詞を「自動詞」、2 以上の項をとる動詞を「他動詞」としている。

- (38) seta suy seske ermu suy seske apa ka sina
犬 穴 ~をふさぐ ネズミ 穴 ~をふさぐ 戸 も ~を縛る
puyar ka sinasina wa i=hoppa ranke wa oka=an pe ne a p
窓 も ~を縛る て 4.O=~を置いて行く HAB て いる.PL=4.S もの COP た だが
<母は>犬の穴をふさぎ、ネズミの穴をふさぎ
戸をしぼり、窓もしぼって
私をおいて出かけた<lit. 私を置いていっていた>ものだったが
(中川 2016 : 85)

- (39) emus ruyke a ruyke a kor an akusu
太刀 ~を研ぐ ITR ~を研ぐ ITR て いる.SG すると
<兄が>太刀をしっかりと研いでいる<lit. 研ぎに研いでいる>と
(国研コーパス：K8010311UP)

また、kor an にも wa an にも、動詞の直後に助動詞 kane が現れる例 (例(40)(41)) が見られた。kane は助動詞的用法、接続助詞的用法、副助詞的用法をもつ形式であり、助動詞の場合何らかの継続性を表すという見解もあるものの、それ単独では訳しづらいことが多い。以下のデータでも、kane が無くとも文法的には問題が無く、アスペクト的意味が kane の有無によって大きく変わることはないように思われる。

- (40) "cikapkoyki=an" sekor hawean kor ekimne kor
鳥を捕える=4.S と 言う.SG て 山へ行く すると
onuman kane iwak kane kor an
夕方に 帰る て いる.SG
<息子は>『鳥を打って来る』と言って、山へ行っては、
晩になって帰って来ています
(ア音 3 : 4-5)

- (41) pon iyoykir an wa kasi ta seppa pirka p
小さい 宝壇 ある.SG て 上 に 罫 良い もの
a=yanke kane wa an
4.A=~を上げる て ある.SG
小さな宝壇があってその上に立派な刀のつばが出してありました。
(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0179KM_34724AP)

4.1.3 kor an と wa an の両方と共起する動詞について

kor an と wa an の両方と共起する動詞は 124 個見られた。分布を見ると、A~E のどの区分にも、両方と共起する動詞はあるが、C の主体動作動詞と共起する動詞は比較的少ないようである。特に、C の「c3 意志的動作をあらわす動詞」と「c5 非意志的な動き（現象）をあらわす動詞」にはほとんど分布していない。kor an と wa an の両方と共起するのは、変化動詞か、あるいは動作動詞にしても客体との関係を含む動詞である傾向にある。

先行研究では、kor an と wa an の両方と共起できる動詞は、非状態性動詞で言えば、変化動詞（中川(1981)の「タイプ I」の動詞）か、あるいは動詞 nukar「～を見る」（中川(1981)の「タイプ III」の動詞）ということになっていたが、今回の分布結果もこれに大きく反するものではない。しかしながら、細かい点で検討すべき点がさまざまにある。以下、4.1.3 では、kor an と wa an の両方をとる非状態性動詞について、問題点を検討する。

4.1.3.1 主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞の場合

4.1.3.1.1 kor an の習慣的用法について

変化動詞と共起した場合、kor an では変化の進行過程、wa an では変化の結果継続を表すというのが先行研究での記述であった。今回収集したデータの中では、たとえば以下の例(42)(43)のようなものである。例(42)では、動詞 yan「沖から陸に向かう／陸に上がる[単]」が kor an を取り、舟が陸に向かって来つつあるという変化の進行過程を表している。一方、例(43)では、ホタテ貝が陸にあがっているという変化の結果継続を表している。

- (42)“repun cip yan _____ kor an siri too ekari a=nukar” sekor
沖の 舟 上陸する.SG て いる.SG 様子 ずっと に向かって 4.A=~を見る と
haweoka hi kusu soyne=an hine inkar=an akusu
言う.PL ことので 外に出る.SG=4.S て 見る=4.S すると
sonno ka repun cip ne yak a=ye p si poro cip sine cip ne
本当にも 沖の 舟 COP と 4.A=~を言う ものととも 大きい 舟 1の 舟 COP
hine yan siri ekari a=nukar kor an=an ayne
て 上陸する 様子 に向かって 4.A=~を見る て いる.SG=4.S あげく

「海の向こうの国の人の舟が来る<lit. 陸に向かって来ている>様子が見えたので
す」と言うので外に出て見たところ

本当に沖の方から舟というもの、

とても大きな舟一艘の舟がやって来るのがちょうど見えました。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0178KM_34720ABP)

- (43)Pananpe pis ta san akusu humpe yan hine an.
パナンペ 浜 に 下りる.SG すると クジラ 上陸する て いる.SG

akketek hem yan wa an.

ホタテ も 上陸する.SG て いる.SG

パナンペが浜に下りていきますと、クジラがあがっていました。

ホタテ貝もあがっていました。

(ア音 3 : 20-21)

しかし今回、変化動詞と共起した場合に、必ずしもこのような対応にならない用例もあった。例(44)では動詞 ahun「入る」に kor an が付いている（ここでは、ahun は「家に帰る」という意味で用いられている）。ahun は wa an と共起すると変化の結果継続が表されることがから、kor an と共起した場合には「入りつつある」という変化の進行過程が表されることが期待されるが、例(44)では変化の進行過程ではなく、家に帰るという行動の繰り返しが表されている。これは、kor an の習慣的用法（田村 1988、例(34)参照）によるものとも考えられる。

(44)kesto kesto sirpekertere wa sirpeker kotpok ta soyne

毎日 毎日 夜明けを待つ て 夜が明ける 前 に 外に出る.SG

sirkunne kotpok ta ahun kor an a p

日が暮れる 前 に 家に帰る.SG て いる.SG ただが

hopuni moyre siri an ?

起きる.SG 遅い 様子ある.SG

毎日毎日、夜が明けるのを待って、夜が明ける間際に出かけて、

日が暮れる間際に家に帰って来ていたのに、今日は寝坊しているんだねえ

(ア音 10 : 30)

また、tere「～を待つ」は通常 wa an をとることが先行研究で報告されている³⁰が、今回 kor an をとる例が散見された（例(45)～(48)）。用例を見る限り、待つという行為を連続的にとらえており、習慣的、多回的動作として解釈できる可能性がある。

(45)kesto kesto a=yupihi a=tere kor an=an pe ne

毎日 毎日 4.A=兄 4.A=~を待つ て いる.SG=4.A もの COP

ruwe ne ayne

こと COP あげく

毎日毎日兄を待っていると

³⁰ 「まつ」は日本語では主体動作動詞である（cf.工藤 1995 など）が、tere は wa an との共起率が高いことから、ここでは変化動詞と位置付けて検討している。

- (46) tutko rerko ne wa ray kuni a=tere kor an ruwe ne korka
二日 三日 COP て 死ぬように 4.A=~を待つ て いる.SG こと COP けれど
二、三日して死ぬばかりと待たれているのだが

(大谷 1998 : 45-46)

次のように、言葉の合間を待つという意味で「tere kor an」(例(47))あるいは「tere tere kor an」(例(48))という例もあるが、これらも待つ行為の連続であろう。

- (47) yaynu=an hi a=ye rusuy wakusu
思う=4.S こと 4.A=~を言う DESID ので
itak utur a=tere kor an=an
言葉間 4.A=~を待つ て いる.SG=4.S
思うことを言いたいので言葉の合間を待っていた

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0159KM_34683ABP)

- (48) sine ancikar a=yupihi eun itak utur tere tere kor an ayne
ひとつの夜 4.A=兄 へ 言葉間 ~を待つ ~を待つ て いる.SG あげく
ある夜(その若者は)兄の言葉の間を待っていてやがて

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0147KM_34609ABP)

以上の事例から、kor an と変化動詞が共起したときには、変化の進行過程を表す場合と、習慣的あるいは多回的動作を表す場合があると言える。後者については、先行研究で指摘されていた「kor an の習慣的用法」に合致するところがある。しかしながら、「動作動詞+kor an」でも習慣性や多回性を表すことがあるため、動詞の語彙的アスペクトに限らず、kor an は習慣的用法、多回的用法を持つと考えられる。

4.1.3.1.2 動態的变化をあらわす kor an

次の例(49)は、動詞 san「前へ出る」に kor an が付いた例(ここでは、川が流れるの意)であるが、4.1.3.1.1 で見たような習慣的意味を表すものではない(この場面で、主人公は沢を初めて目の前にしている)。

- (49) ne pet or un pirka poro nay san kor an hike
その川 ところに 美しい 大きい 沢 前へ出る.SG て いる.SG だが
その川にきれいな大きい沢が流れ込んでいて

(上田トシの民話 1 : 46)

ちなみに、同様の状況で動詞 san が wa an を取る場合 (例(50)) もあり、kor an と wa an の対立がはっきりしない。

(50) poro pet san _____ wa an pe ne p
大きい川 前へ出る.SG て いる.SG もの COP だが
大きな川が下がっていたのだが

(大谷 2002 : 103)

類似の例だが、以下の動詞 ratki 「垂れ下がる」も、kor an と wa an でほぼ同じ状況を表している (例(51)(52))。

(51) kasi peka ciw(?) so ratki _____ kor an.
上 を 急な(?) 滝 垂れ下がる て いる.SG
その上を急な滝が落ちていました

(千葉大学 2015c : 2277)

(52) inkar wa poro poro so ratki _____ wa an
見ると 大きい 大きい 滝 垂れ下がる て いる.SG
見ると大きな滝が落ちている。

(中川 2015 : 151)

上記の例(49)~(52)はそれぞれ「変化動詞+kor an」と「変化動詞+wa an」の対応になっているが、「変化動詞+kor an」のほう (例(49)(51)) は変化の進行過程を表しているわけではない。おそらくここで可能になるのは、san や ratki を「二側面動詞」ととらえる解釈である。工藤(1995)は、「のぼる」「くだる」「ころがる」「たれる」などの動詞を「二側面動詞」³¹と位置付け、主体動作動詞の下位区分としている。二側面動詞とは、主体の動作とともに変化をとらえている両義的なものであり、日本語のシテイルにおいては動作の継続か結果の継続かのどちらを実現するかは、構文的条件³²が決める (工藤 1995 : 79)。kor と wa の区別のあるアイヌ語では、水が流れ落ちる光景を動的に (すなわち、何度も水が落ちているように) とらえた場合は kor an、単なる風景として静的にとらえた場合は wa an が選ば

³¹ 工藤(1995 : 76)では、くだる、ころがる、したたる、すすむ、たれる、のぼる、ふえる、へる、が例として挙げられている。

³² 「崖の上のにぼっている／崖をのぼっている」「1万人にふえている／じょじょにふえている」(工藤 1995 : 79)

れるという解釈が可能になるだろう。

この動的／静態的という関係は、中川(1981)が言及していたタイプⅢの動詞 nukar 「～を見る」問題にも関連するところがある。中川(1981)は nukar kor an と nukar wa an が「動作継続—変化の結果継続」の関係にならないことを述べた上で、「<注視する>という能動的な「見る」行為そのものを nukar が表わす時、kor an をとり、<視線をそちらに向ける>といった変化を nukar が表わして、その後の「見ている」状態が、<目を向ける>という行為の結果の状態と見なされる時、wa an をとる (中川 1981 : 140)」という考えを示している (4.1.1.2 参照)。この問題に関して、4.1.3.2 および 4.1.3.3 で適宜触れていくことにする。

4.1.3.2 主体動作動詞の場合

4.1.3.2.1 例外的な「動作動詞+wa an」について

先行研究では、動作動詞は普通 kor an と共起し、wa an と共起することは無いことが述べられていたが、今回、以下の例(53)(54)のような動作動詞の例がみられた。例(53)は apkas 「歩く」、例(54)は e 「～を食べる」に wa an が後続している。

- (53) a=e=kosinewe yakka e=yaysitoma kuni a=ramu kusu
4.A=2SG.O=～を訪れる ても 2SG.S=恥ずかしく思う と 4.A=～を思う ので
somo apkas=an wa an=an hine a p
NEG 歩く=4.S て いる.SG=4.S て ただが
私があなたの所に訪問しても、あなたは恥じ入ってしまうと私は思ったので、
行かずにいたのですが<lit. 歩かないでいた>

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 8)

- (54) neun wenkur a=ne yakka
どのように 貧乏人 4.A=COP ても
a=e wa okay pe semas haru ne yakka
4.A=～を食べる て いる.PL もの 凡庸な 食糧 COP ても
どんなに貧乏人の私であっても、食べているもの、粗末な食べ物であっても

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0156KM_34677ABP)

まず例(53)については、動作動詞 apkas 「歩く」が使われているものの、文脈をみる限り、「行く (訪問する)」のような位置変化の意味を表している。つまり、ここでは動詞 apkas が変化動詞のように扱われており、形態上は「動作動詞+wa an」という例外的構文だが、意味上は例外ではない。また、この例(53)では wa an と否定辞 somo が共起してい

るが、通常 kor an や wa an は否定表現と共起しにくい³³ことを踏まえると、ここでは接続助詞 wa によって統語的に分断されていると考えるほうが妥当かもしれない。

一方、例(54)に関しては、e「～を食べる」という動作の継続が wa an（ここでは wa okay(複)）の形態をとって現れている。動詞 e は専ら kor an とのみ共起するため例外的使用にみえるが、注目すべき点は、動作主が単数であるにもかかわらず、wa の直後の存在動詞が単数形 an ではなく複数形 okay になっており、かつ三人称表示である点である。ここでは、三人称 okay として表示されているものが、食べる行為の対象となる物（＝食物それ自体）であるという解釈も可能だと考えられる。

もう一つの可能性としては、「kor wa okay pe『持ち物』」のような、語彙化した表現とみる解釈である。「kor wa okay pe（～を持つ・て・いる(複)・もの）」は、直訳すると「持っている物」になるが、財産的な「持ち物」という意味を表すことが多い（例(55)）。例(54)の「a=e wa okay pe」はこれに倣った、食糧（＝財産）としての食べ物を表す表現とも考えられる。

(55) a=kor wa okay pe an pakno

4.A=～を持つ て いる.PL もの ある.SG だけ

aynu nispa a=koyay'asinke kusu ne ruwe ne na.

人 長者 4.A=～に賠償として差し出す つもり COP こと COP FIN

私の持ち物をあるだけ人間の旦那さんに償いの品とするつもりなのですよ。

（アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0178KM_34720ABP）

e「～を食べる」と wa an との共起に関しては、次のような例もある（例(56)）。ここでは、e「～を食べる」という動作がいったん終了し、そのあと、an「いる」状態が続いて夕方をむかえた解釈となっている。この場合、副詞 kironnuno「腹いっぱい」があることから、「e wa an」が「e kor an（食べる動作の継続）」と同義で用いられているとは考えにくい。つまり、ここでの wa an はアスペクトではなく、原典の和訳がそうであるように、e と an を独立した事態としてとらえるほうが自然である³⁴。

³³ 4.1.6.1 の佐藤(2008)の記述を参照。

³⁴ 例(56)と類似の例として、次のような沙流方言の例もある(K8303245YR、中川先生提供データ)。

この文脈では e wa an を動作の継続と捉えることは困難であり、「食べ終わると（ここでの接続助詞 kor は「～すると」の意）」とするほうが適切である。

a=e wa an kor a=oyepi uyna wa

4.A=～を食べる て いる.SG すると 4.A=食器 ～を取る.PL て

uraye a uraye a wa

～を洗う ITR ～を洗う ITR て

食べて、いると（＝食べ終わると）、食器を取って洗って洗って

(56) rur takup ne yakka kironnuno a=e wa an=an ayne
 汁 だけ COP でも 腹いっぱい 4.A=~を食べる て いる.SG=4.S あげく
 sirtokes akusu
 夕方になる すると
 汁だけでもおなかいっぱい食べてから、しばらくいて<lit. 食べて、いたあげく>
 夕方になると

(ア音 10 : 104)

4.1.3.2.2 認識・言語・表現活動をあらわす動作動詞について

動詞 nukar 「～を見る」については、先行研究同様、今回のデータでも kor an と wa an の両方と共起している。nukar kor an と nukar wa an については、「<注視する>という能動的な「見る」行為そのものを nukar が表わす時、kor an をとり、<視線をそちらに向ける>といった変化を nukar が表わして、その後の「見ている」状態が、<目を向ける>という行為の結果の状態と見なされる時、wa an をとる (中川 1981 : 140)」という見解がある。

今回のデータを見ると、nukar kor an は、①習慣的、多回的動作である場合、②進行中の動作を見ている場合、③複数の異なる場面を見ている場合に現れやすいようである。例(57)は①、例(58)は②、例(59)は③の例である。また、これら①～③の性質は同時にあらわれる場合もある。例(60)は①と②、例(61)は①と②、例(58)は①と③の性質を持つものもある。

(57) onautari turano uhekoteno oka wa ipe kor oka ranke
 父たち と一緒に 互いに いる.PL て 食事する て いる.PL HAB
 kor oka siri a=nukar kor an=an a p
 て いる.PL 様子 4.A=~を見る て いる.SG=4.S た だが
 父達と共に仲良く食事をいつもしているのを私は見ていたのでした。
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0147KM_34609ABP)

(58) citarpe sike kar hine se hine
 ゴザ 荷物 ~を作る て ~を背負う て
 i=hekote ek kor an siri ekari a=nukar kor an=an.
 4.O=~の方へ 来る.SG て いる.SG 様子 ~に向かって 4.A=~を見る て いる.SG=4.S
 背負い莫塵を彼女は作って、背負って、
 私の方へ来ている様子をこちら側から私は見ていた
 (AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト : 川上まつ子民話 17)

(59) menoko ne ya okayo ne ya pencay oro wa
 女 COP も 男 COP も 弁財船 ところ から

heyas terke terke sir a=nukar kor an=an a p
 陸へ 跳ねる 跳ねる 様子 4.A=~を見る て いる.SG=4.S た が
 女の人たちや男の人たちや弁財船（の中）から（次々と）上陸して
 飛び出してくる有様を俺は（じっと）見続けていたもので

（トウイタク3：199）

(60) onkami a onkami a mina kor ki siri a=nukar kor an=an
 拝礼する ITR 拝礼する ITR 笑う て ~をする 様子 4.A=~を見る て いる.SG=4.S
 kesto kesto ene iki pa siri a=nukar kor an=an ora
 毎日 毎日 そのように する PL 様子 4.A=~を見る て いる.SG それから
 礼拝し続けることを笑いながらする様子を私は見ている、
 毎日毎日そうするのを私は見ている、

（AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 11）

(61) isane pon menoko koyaykatkar wa arpa kunak ramu kor an siri
 姉のほう 若い 娘 ~に恋をする て 行く.SG よう ~を思う て いる.SG 様子
a=nukar kor an=an pe ne a p
 4.A=~を見る て いる.SG=4.S もの COP ただが
 <自分の兄が、川下に住む姉妹の>姉の方の娘に片思いをして
 行こうと思っている様子を私は見ているのであったが

（大谷 2015：31-32）

(62) nen nen iki=an siri e=oyamokte kor e=an siri
 いろいろと する=4.S 様子 2SG.A=~を不思議に思う て 2SG.S=いる.SG 様子
a=nukar kor an=an wa
 4.A=~を見る て いる.SG=4.S て
 いろいろと私がする様子をお前が不思議に思っている様子を私は見ている

（アイヌの民話 1：120）

これに対し、nukar wa an は、ある方向に目を向けている静態的な動作である。たとえるならば、nukar kor an は複数枚の写真を次々に見ているような様子であるが、nukar wa an は一枚の写真を見ているような様子であり、両者に能動性の有無があらわれているとみることが出来る。

(63) mina kane i=hekote mo kane oka hine
 笑う て 4.O=~の方 静かである て いる.OPL て

mina kane pa kor oka siri a=nukar wa an=an
笑う て PL て いる.PL 様子 4.A=~を見る て いる.SG=4.S

<皆が>笑って私の方を向いて静かにして

笑いながらいる様子を私は見ている

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 11)

例(64)は、犬がじゃれあっているという動きのある場面であり、*nukar kor an* が使われていてもよさそうな状況ではあるが、一方向のみに目を向けていることや、場面の推移が無いことから *wa an* が選ばれているのかもしれない。

(64) *sirokane pon seta konkane pon seta poronno cise soy ta*

銀 小さい犬 金 小さい犬 たくさん 家外で

arukoterke kor oka ruwe ene an hi ne wa

じゃれあう て いる.PL こと このように ある.SG こと COP て

mina=an kane pon seta a=omap pe ne kusu

笑う=4.S て 小さい犬 4.A=~をかわいがるもの COP ので

mina=an kane wa a=nukar wa an=an akusu

笑う=4S て 4.A=~を見る て いる.SG=4.S すると

銀の子犬、金の子犬がたくさん家の外でじゃれあっている

私は笑いながら子犬がかわいいので笑いながら見ている

(中川 2010 : 169)

また、*nukar kor an* と *nukar wa an* の取り得る人称について、先行研究では「一人称より二、三人称で *wa an* が多様されるのは、<視線を向ける>という解釈が、自分の行為より他者の行為に対して、より成立しやすいためだ、と考えられる (中川 1981 : 140)」という記述があるが、今回のデータでは、*i=nukar kor an* 「(第三者が) 私を見ている」が 1 例しか無かったのに対し、*i=nukar wa an* 「(第三者が) 私を見ている」は 10 例あり、近い結果が得られている³⁵。

一方、動詞 *inkar* 「見る」は通常 *wa an* を取る動詞とみなされている³⁶が、今回 *inkar kor an* という用例もわずかに見られた (例(65)(66))。特定の対象を見ることを表す *nukar* に対し、*inkar* は「特定の対象を定めず、漠然とものを見ることを表わす動詞 (中川 1981 : 140)」である。先ほどの *nukar kor an* を参照した上で以下の例を見てみると、例(65)は副

³⁵ 二人称主格のデータに関しては、顕著な差は見られなかった。今後データ数を増やし、検討したい。

³⁶ 沙流方言の *inkar* については中川(1981 : 140)、千歳方言の *inkar* については佐藤 (2007a : 51) 参照。

詞 *ekesinne* 「あちこちへ」とあることから、複数の方向を見ていることがわかり、例(66)は「いろいろな舟が行き交う」という複数の場面が見て取れる。

(65) *ekesinne inkar kor an hikusu*
 あちこちへ 見る て いる.SG ので
 あちこちを見回しているので

(千葉大学 2015c : 2208)

(66) *atuy or un inkar kor an akusu orano*
 海 ところへ 見る て いる.SG するとそれから
atuy or ta cip usa cip utasatasa siri ne saru nukar
 海 ところに 舟 いろいろな 舟 行き交う 様子 COP サル ~を見る
earkinne eyaykopuntek kor atuy or un inkar kor an ruwe ne
 とても ~を喜ぶ て 海 ところへ 見る て いる こと COP
 <サルが>海を見ていると海にいろいろな舟が行き交う様子が見え
 とても喜んで海を見ていました

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0235UT_35300AP)

これらのことから、*nukar*、*inkar* が語彙的意味として持つ能動性の対立と、*kor an* と *wa an* が持つ同様の対立が、互いに絡み合っていると言える。しかし、*nukar kor an / wa an* の関係に対し、*inkar* はやはり *wa an* を取る例がほとんどであり、その他、ほぼ *wa an* を取るとされている *sikerayke* 「~をにらみつける」、*sikkasma* 「~を見守る」、*epunkine* 「~を見張る、~を守る」についても、*kor an* をとる用例が少数あるとは言え³⁷ (例(67)~(69))、*wa an* を取る例のほうが多数である。

つまり、*inkar*、*sikerayke*、*sikkasma*、*epunkine* といった動詞は、目を向けるという視線の位置変化を表す動詞であるために基本的には変化の結果継続を表す *wa an* を取るが、*kor an* を取る場合には *kor an* の持つ多回性や進行性があらわれる。それに対し、*nukar* は主体動作・主体変化の両面を持ち、共起するアスペクト形式によってどちらかが顕在化すると考えられる。

(67) *i=sikeraykepa³⁸ kor oka ayne*
 4.O=~をにらみつける.PL て いる.PL あげく
私を睨みつけていたあげく

³⁷ 千歳方言において *sikerayke*、*sikkasma*、*epunkine* は通常 *wa an* をとることが佐藤 (2006 : 65) で報告されている。

³⁸ *sikerayke* に複数接尾辞 *-pa* が付いた形。

(68) a=e=sikkasma kor an=an ayne
 4.A=2SG.O=~を見守る て いる.SG=4.Sあげく
<私は>お前を加護してきたのだ

(白石 2004:195)

(69) aynu koraci kamuy koraci owse hopuni semkoraci a=ki wa
 人間 ように 神 ように まっすぐに 飛ぶ.SG かのよう 4.A=~をする て
a=epunkine kor an=an pe ne ruwe ne a p
 4.A=~を守る て いる.SG=4.S もの COP こと COP た だが
 人間のように、神のように、まっすぐ空飛ぶかのようにして、
守っていたのであったのだが

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト:川上まつ子民話14)

このほか、認識・言語・表現活動を表す動詞のうち kor an と wa an のどちらも取る動詞には、nu 「~を聞く」、ye 「~を言う」などがある。

nu 「~を聞く」は、kor an の場合、ある情報を耳にしながらいる状況であるのに対し(例(70))、wa an の場合には、聞いた結果理解しているという状況を表している(例(71))。佐藤(2008)は、nu 「~を聞く」について、「知覚獲得過程は kor an、知覚獲得後の状態は wa an で示される(佐藤 2008:199)」可能性を指摘しているが、以下の例にも通じるものである。しかし、nu wa an が「聞いて、すべて内容を理解している」のに対し、nu kor an の方は「内容を理解しつつある」という変化の進行過程というより、単に「聞く」という動作の継続か、あるいは習慣的動作であろう。nu も nukar 同様、主体動作・主体変化の両面があり、アスペクト形式によってどちらかが前面に出ると言える。

(70) casi pok oran wa oar isam sekor hawas pahaw
 城 下 ~に下りる て 全く無い と 話である 噂
a=nu kor an=an ruwe ne akusu
 4.A=~を聞く て いる.SG=4.S こと COP すると
 "poro pencay yan yan." sekor kane kotan or un utar
 大きい 弁財船 上陸する.SG 上陸する.SG と 村 ところにいる人々
 haweoka kor arkimatekka kor okay ruwe ne akusu
 言う.PL て 大騒ぎする て いる.PL こと COP すると
 <殿さまが>城下に下りていなくなったという噂を私は聞いていたところ
 「大きな弁財船がやって来た」と、村人たちが言いながら大騒ぎをしていると

(71) ona unu orawki p a=ne hine a=erampewtek korka
 父 母 ~を見失う もの 4.A=COP て 4.A=~がわからない けれど
 tapne kamuy katkemat i=wentarapte kuskeraypo
 このように 神 淑女 4.O=~に夢見をさせる おかげで
a=nu wa an=an katu ne
 4.A=~を聞く て いる.SG=4.S 様子 COP

私は父の顔も母の顔も見たことがなくて分からなかったのですが、
 これこれのように女神さまが夢を見せてくれたおかげで
その理由が分かったのです<lit. 私は聞いているのです>

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話9)

「(既に) 聞いている」ということは、日本語の「聞いている」という表現で考えれば変化の結果継続(状態パーフェクト)と動作パーフェクトの中間に位置するだろう。動作パーフェクトは、運動の先行性を捉えてその偶然的・間接的な結果(効力)を表すが、「その話なら聞いている=その話なら知っている」のように、聞くことの結果は半必然的である。しかしながら、nu という動詞は「承諾する」「話を聞いて知る」という意味を表すことがある³⁹。ことを踏まえると、nu という動作の完結性が現れたときに、知識の獲得という意味が必然的に現れるのだと思われる。つまり nu wa an の場合、動作パーフェクトに近いものではなく、「聞いて、いま知った状態にある」という変化の結果継続と捉えることが妥当であろう。

自動詞であるほうの inu 「聞く」についても、inu kor an は習慣的に噂を聞いている状況であるのに対し(例(72))、inu wa an は噂を聞いて内容を把握している(例(73))、という nu と同様の対応が見られた。(例(73)は、「聞いた話はこのようである」と述べた後に、聞いた事情を述べる場面に続いていく。)

(72) ekusne wa aynu paye kusu ne kor sapa ka sak cip ani
 川向かいへ 人 行く.PL つもり COP すると 頭 も ~を欠く 舟 で
 ikusa kor an pe ne sekor inu=an kor an=an.
 人を渡す て いる.SG もの COP と 聞く=4.S て いる.SG=4.S

川の向こう側に人が行こうとすると、<川向こうの貧乏人である彼は>船首のない舟で、人を渡していると、私は聞いていました。

(ア音 2 : 36-37)

³⁹ 中川(1995 : 300)、田村(1996 : 437)。

(73) inu=an wa an=an akusu
 聞く=4.S て いる.SG=4.S すると
 seta or peka cikap or peka ne korka inu=an hawe
 犬 ところ から 鳥 ところ から COP けれど 聞く=4.S 話
 ene an hi
 このように ある.SG こと
聞くとところによると<lit. 聞いていると>
 犬のうわさに、鳥のうわさにではあるが
 聞いたところでは<lit. 聞いた話はこのような>

(中川 2010 : 183)

言語活動を表す動詞について、動詞 ye 「～を言う」の場合、ye kor an は、言う動作の最中である (例(74)) か、習慣的な動作の場合に用いられる (例(75))。また、ye が「呼ぶ」という意味で用いられて、日常的に「呼ぶ」動作が発生している場合にも kor an が用いられる (例(76))。それに対して ye wa an は、言うべき内容を最後まで言い終え、かつ何らかの依頼をしてあるという文脈で用いられている (例(77)(78))。

(74) yayrayke=an hi a=ye kor an=an rapokke ora
 感謝する=4.S こと 4.A=～を言う て いる.SG=4.S 間に それから
 pirka suke ki hine
 良い 料理 ~をする て
 私は感謝の言葉を言っていました。その間に妹はおいしい食事を作り

(上田トシの民話 3 : 18)

(75) kunne hene tokap hene kamuy sisermakuste=an hi
 夜 も 昼 も 神 守護を願う=4.S こと
a=ye kor an=an ruwe ne a p
 4.A=～を言う て いる.SG=4.S こと COP ただが
 夜も昼も神に守ってくださいと言っていたのだが

(上田トシの民話 1 : 84)

(76) a=onaha a=unu sekor a=kor tono utar a=ye kor an=an wa
 4.A=父 4.A=母 と 4.A=～を持つ 旦那 たち 4.A=～を言う て いる.SG=4.S て
 po hene i=omapkarpa kor oka=an pe ne hike
 尚一層 4.A=～をかわいがる.PL て いる.PL=4.S もの COP ただが
 私の父よ私の母よと私の旦那さんたちを呼んだら<lit. 言っていて>、

彼らはなお一層私を可愛がりながら、私たちは暮らしていたのですが、

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 5)

- (77) iworkorkamuy ne yakka opitta eun a=ye wa an kusu
 獵場の神 COP でも 皆 に 4.A=~を言う て ある.SG ので
 獵場をつかさどる神であれ (神々) みんなに言て (頼んで) あるから
 (人々の物語：129)

- (78) iworso kurka erok kamuy opitta a=nure wa
 獵場 上 ~に住まう 神 皆 4.A=~を聞かせる て
 sorekusu e=epunkine kuni a=ye wa an kus
 それこそ 2.O=~を守る ように 4.A=~を言う て ある.SG ので
 獵場の上にいるカムイ全部に私は頼んで
 お前を守ってくれるように言てあるので
 (国研コーパス：K7908032UP)

これは nukar や nu と類似しているが、ye の場合、wa an は主体の変化ではなく客体の変化を表す点で異なっている。今回「a=ye wa an=an」という例は見つかっていない。

日本語の「言っている」の場合、言う動作の後には具体的な事物が残らないために、客体結果ではなく動作の先行性が前面にあらわれるが、「a=ye wa an」は、ye の主語が物語中の一人称で、an の主語が三人称となっているために、an は言った内容そのもの (客体) の存在を表していると見ることができる。ye wa an のようにどちらも三人称が主語である例(79)もみられたが、ここでは、あらかじめ動作主 (=殿様) が言っておいたという意味ではなく、動作主の言葉が具体的な内容をもったものであり、an はその内容 (言葉) の存在を指す可能性がある⁴⁰。

- (79) kamuy tono or ta paye=an kor ye itak a=kasi kor
 神 殿 ところ に 行く.PL=4.S すると 言う 言葉 4.A=~にそむく すると
 wen pe ne sekor hawas pe ne kusu
 悪い もの COP と 話 もの COP ので
 ye wa an pe a=itaktasare kor oka=an
 言う て ある もの 4.A=~に答える て いる.PL=4.S
 殿様のところに行ったならその言葉にさからってはいけないと言われているので

⁴⁰ ただし、三人称はゼロ表示であるため、ye の主語と an の主語が同じか異なるかは形態的に判別できない。ここでは、an の主語が言葉という客体である場合の解釈の可能性を示した。あるいは、4.1.3.2.1 で挙げた kor wa okay pe のように、固定化した表現の一種であるのかもしれない。

言われたことに<lit. 殿様が言っている(ある)こと>に私たちは答えていた。

(中川 2015 : 144)

また、動詞 *inonnoytak*「祈る」は言葉と身体的動作を含むという点で、言語活動と表現活動の中間といえるが、*kor an* の用例がほとんどである一方で、次のような例もあった (例(80))。ある村に夜襲をしかけに来た集団が祈りを行なったことによって、その村を守る神がいなくなり、村人たちも眠ってしまっているという場面である。ここでは、祈るという動作が完結し、その結果が継続していることが現れている。

(80) *ne kotan or ta noski ta ahup=an ruwe ne akusu*
その 村 ところに 真ん中に 入る.PL=4.S こと COP すると
sorekusu inonnoytak wa okay pa p ne kus
それこそ 祈る て ある.PL PL もの COP ので
kotan kor utar okaskamuysak pa kusu
村 ~を持つ 人々 ~を見守る神がない PL ので
aynu opitta mokor wa tokap mokor wa oka ruwe ne hine
人 皆 眠る て 昼 眠る て いる.PL こと COP て
その村の真ん中に (ある家に) 入ったところ
それこそ祈りをかけられている<lit. 祈りをしてある>ので
村人たちを見守るカムイがいなくなっていたので、
人々はみんな眠って、昼寝をしていた。

(国研コーパス : K7908051UP)

その他の、*kor an* と *wa an* の両方をとる認識・言語・表現活動を表す動詞についても、これまでに述べた特徴があてはまる。すなわち、*kor an* は、動作継続、または習慣的・多回の動作である場合に用いられる。一方、*wa an* は主体または客体の変化の結果継続を表す。変化動詞の場合に *kor an* では基本的に変化の進行過程が表されるが、こちらは *kor an* で動作性がより前面に出る点で異なっている。これは *nukar* について中川(1981)が指摘した能動性と共通している。

4.1.3.2.3 長期的動作をあらわす動作動詞について

長期的動作を表す動詞の中でも、動詞 *resu*「~を育てる」およびその派生形は *kor an* にも *wa an* にも一定数の共起が見られる。

resu kor an と *resu wa an* について、前者は育てる上での様々な行動が直前に描かれている場合か、*omap* が前部に現れる場合は *kor an* をとる傾向がある (例(81)(82))。*resu wa an* にはそのような特徴は見られず、育てているという事実を述べるにすぎない(例(83)(84))。

omap は「心の中でかわいいと思うことだけでなく、だいたりなでたりなど、具体的にかわいがる行為をすることをも含む (田村 1966 : 467)」意味を持つため、具体的な動作が描写されている場合は kor an が選ばれやすいのだろう。omap 「~をかわいがる」自体も wa an より kor an との共起数が多く、omapresu 「~をかわいがって育てる」は kor an が 10 例に対し wa an は 1 例のみであった。

(81) i=omap kor i=pirkaresu aep ne yakka pirka aep patek
 4.O=~をかわいがる て 4.O=~をよく育てる 食べ物 COP でも 良い 食べ物 ばかり
 i=parenukannukar wa a=i=resu kor an=an ayne
 4.O=~を選んで食べさせる? て 4.A=4.O=~を育てる て いる.SG=4.S あげく
 <兄は>私を可愛がって、大事に育てた。食べる物もよい物だけを
 私に選んで食べさせて<私は>育てられているうち

(アイヌの民話 1 : 101)

(82) Iskar emko ta iwan a=yupi an. iwan a=saha an hine
 イシカラ川 上流 に 6 4.A=兄 いる.SG 6 4.A=姉 いる.SG て
 oka=an ruwe ne p earkinne a=i=omap kor
 いる.PL=4.S こと COP だが とても 4.A=4.O=~を可愛がる て
 a=i=resu kor an=an hike
 4.A=4.O=~を育てる て いる.SG=4.S だが
 イシカラ川の上流に6人の兄がいて6人の姉がいて、暮らしておりました。
 とてもかわいがられて育てられておりましたが

(国研コーパス : K7908032UP)

(83) ne ene iki hekaci a=ne ruwe an hi ka a=eramiskari no
 何 このように する 少年 4.A=COP こと ある.SG ことも 4.A=~がわからないで
 Iskar putuhu ta sisam or ta a=i=resu wa an=an.
 石狩川 河口 で 和人 ところで 4.A=4.O=~を育てる て いる.SG=4.S
 私はいったいどうしていた男の子だったのかもわからずに、
 石狩川の川口で和人の所で育てられました。

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト : 川上まつ子民話 5)

(84) a=resu pito a=resu kamuy e=ne wa
 4.A=~を育てる 神 4.A=~を育てる 神 2SG.A=COP て
 a=e=resu wa an=an yakka
 4.A=2SG.O=~を育てる て いる.SG=4.S けれど

ona sak pe e=ne ruwe ka somo ne katu
 父 ~を欠く もの 2.A=COP こと も NEG COP 様子

a=opeope tanepokusnam ki kusu ne na
 4.A=~を語る 初めて ~をする つもり COP FIN

あなたは私が育てた神、私が育てた神であって私が育ててきたけれど
 父親がいないわけではないことを今こそ身の上を語りますよ

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 16)

しかしこの他の、kor an、wa an 両方をとり得る長期的動作をあらわす動詞については、目だった対立が見られなかった。

4.1.3.3 思考・感情・知覚動詞の場合

kor an、wa an の両方をとり得る思考・感情・知覚動詞に関しては、対立関係が見出しにくい。動詞 yaynu「思う」、動詞 yaywennukar「苦勞する」、動詞 sirkirap「困る」などは kor an を取る例が多く、wa an を取った場合との差異はほとんど見られない。

しかしながら、4.1.3.2.2 で得た結果に類似するものとして、動詞 eram(u)an「~をわかる」、動詞 erampewtek「~がわからない」が見られた。eraman は、kor an の場合は習慣的動作 (例(85))、wa an の場合はある内容を理解してわかっているという状態 (理解するという変化の結果継続) を表す (例(86))。

(85)a=yuputari a=onaha sama ta an yak pirkano ne pekor
 4.A=兄たち 4.A=父たち そば に いる.SG なら良く COP ように
 hawoka hike ka iwor or peka huymampa kor
 言う.PL けど も 狩場 ところで ~を注意して見る て
 i=keske kor oka siri a=eraman kor an=an pe ne a p
 4.O=~を妬む て いる.PL 様子 4.A=~をわかる て いる.SG=4.S もの COP ただが
 兄達は父さんのそばにいるときはいいようなことを言うけれど
 狩り場で気をつけて見ていると私を妬んでいるのはわかっているのです。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0162KM_34692AB_34693ABP)

(86)a=macihi yuputari kokewtumkor siri a=eraman no an=an wa
 4.A=妻 兄たち ~と同調する 様子 4.A=~をわかる で いる.SG=4.S て
 asinuma anakne aynu sani a=ne ruwe ka somo ne. kamuy sasimi
 私 TOP 人 子孫 4.A=COP こと も NEG COP 神 子孫
 a=ne wa an=an wa kamuy a=onaha i=uk patek
 4.A=COP て いる.SG=4.S て 神 4.A=父 4.O=~を取る ばかり

tere wa an hi a=eraman wa an=an ruwe ne kus
 ~を待つ て いる.SG こと 4.A=~をわかる て いる.SG=4.S こと COP ので
 妻が兄さんたちと心を合わせているのを、私はわかっている。
 そして私は人間の子ではない。神の子なのだ。
 そして神である父が、私を天に受け入れようとばかり待っている。
 そのことを私はわかっているから

(ア音 10 : 28)

erampewtek 「~がわからない」は、kor an の場合、わからないままで暮らすという習慣性や (例(87))、わからない状況が何度も発生するという多回性 (例(88)) が目立つが、wa an の場合、物事の事情が理解できずにいるという状態を表す (例(89))。

(87)ine hampak to ka ine hampak cup ka hotke wa patek an hike ka
 いくつの 日 も いくつの 月 も 寝る て ばかり いる.SG しても
 omotokor erampewtek kor an hine
 素性 ~がわからない て いる.SG て

幾日も幾月も寝てばかりいても (邪魔をした者の) 素性をわからずにいて

(大谷 2015 : 38-39)

(88)cip hum as a as a wa a=oyamokte kor an=an
 舟 音 立つ ITR 立つ ITR て 4.A=~を不思議に思う て いる.SG=4.S
 hike ka... ne kusu ney wa cip ene humi asi ne ya ka
 だがも COP ので どこから舟 このように 音 ~を立てる COP Q も
a=erampewtek kor an=an ayne
 4.A=~がわからない て いる.SG=4.S あげく

舟の音が何度もして不思議に思ったのですが
 どこから舟の音がするのかわからないでいました。

(上田トシの民話 2 : 106)

(89)cis kor iruska korka ene iruska p ka
 泣く て 怒る けれど このように 怒る ものも
a=erampewtek wa an=an akusu
 4.A=~がわからない て いる.SG=4.S すると

<母は>泣きながら怒っていたが、
 何を怒っているのか私にはわからないでいるうち

(中川 2016 : 86)

4.1.4 状態性動詞との共起について

状態性動詞が kor an と共起する場合については既に中川(1982)が触れており、動作あるいは変化の進行過程にあることを示すというものであった。例えば例(10)(再掲)では、川が大きくなりつつあるという変化の進行過程にある。

(10)(再掲) pet poro kor an.

川 大きい て いる.SG

川が増水している

(佐藤 2007a : 44)

今回収集した「状態性動詞+kor an」には、変化の進行過程とも単なる状態とも読み取れる例 (例(90)(91)) がある。

(90)ene ekimne=an kor ene oka usi ta ekimne=an kor

このように 山に行く=4.S と このように ある.PL ところに 山に行く=4.S と

pirka yuk ka pirka kamuy ka a=ronnu p ne hi

良い 鹿 も 良い 熊 も 4.A=~を殺す もの COP こと

a=tura wa epakasnupa p ne kusu i=akkari ka

4.A=~を連れる て ~に教える.PL もの COP ので 4.O=~よりも

tane ison kor okay ruwe ene an hi ne wa

もう 狩りが上手い て いる.PL こと このように ある.SG こと COP て

狩をする時には、このようなところに狩に行くと立派なシカや立派なクマを捕れるぞ
ということ、私は一緒に行って<息子たちに>教えたので、

もはや私以上に狩上手になって<lit. 狩上手になっていて>

(中川 2002 : 141)

(91)a=kor paskur utar uymam=an wa isam=an hi okake ta

4.A=~を持つ カラス たち 交易する=4.S て 無い=4.S こと 後 で

iperusuypa⁴¹ kor okay ne kuni a=ramu hi kusu

空腹である て いる.PL COP ように 4.A=~を思う ので

翌朝また私のカラス達が私が交易に行っていなくなった後で

お腹を空かせているように思ったので

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0151KM_34637BP)

⁴¹ iperusuy に複数接尾辞-pa が付いたもの。

変化の進行過程である場合、例(90)は「狩り上手になりつつある」、例(91)は「空腹になりつつある」と解釈できるが、アスペクトとしてではなく、「～という状態で暮らす」という文同士の接続と考えれば単なる状態になるだろう。以下の例(92)～(95)を参照されたい。例(92)は、a=kor humi「私たちの気持ち、感じ」が pirka「良い」という状態で、oka=an「私たちは暮らしていた」ということであり、このような場合、動詞 oka「いる(複)」が意味上本動詞として解釈され、「a=kor humi pirka」はその付帯状況となっている。つまり、「接続助詞+補助動詞的な an」のアスペクト形式(構文)とみることも、文同士の接続であると分析して an を本動詞的に「暮らす」と解釈することもできるため、kor an の習慣的用法か、動詞 an に起因する習慣性かは区別しきれない。an「ある」の例(93)(94)、ne「である」の例(95)においても同様の解釈が成り立つ。

(92) a=kor humi pirka kor oka=an ayne
 4.A=～を持つ 感じ 良い て いる.PL=4S あげく
 気持ちよく私たちは暮らし
 <lit. (私たちは) 気持ちが ?よくていた/?よくていながら暮らしたあげく>
 (千葉 2015a : 211)

(93) cis=an a an a kor
 泣く=4.S ITR (=)4.S ITR て
 hotke=an wa an=an uske ka an kor oka=an
 寝る=4.S て いる.SG=4.S とき も ある て いる.PL=4.S
 泣き続けながら寝ていたときもありました。<lit. ?ありながらいました。>
 (ア音 2 : 2)

(94) kimun=an hi ka an kor an=an
 山に入る=4.S こと も ある て いる.SG=4.S
 山猟に行くこともありました <lit. ?ありながらいました。>
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0162KM_34692AB_34693ABP)

(95) a=unuhu ka ray wa isam ora
 4.A=母 も 死ぬて いない それから
 a=onaha patek SUMIYAKI ne kor an wa
 4.A=父 だけ 炭焼き COP て いる.SG て
 お母さんも死んでしまって、いなくて、
 お父さんだけで、炭焼きをしていて<lit. *炭焼きであっていて>
 (ア音 2 : 8)

isam 「無い」にしても、「uweepakiun isam kor an だんだんなくなって（減って）いく。
 (田村 1996 : 246)」という例が辞書記述にはあるが、今回の isam のデータにおける kor
 an は、「ene~hi ka isam (どう~ようもない)」という構文全体との接続であり、「無くな
 りつつある」という変化の進行過程を表しているわけではない (例(96)(97))。

(96) kamuy opitta orowa a=wenapapu wa
 神 皆 から 4.A=~をひどく攻める て
ene iki hi ka isam kor an ruwe ne
 どうすることも 無い て いる.SG こと COP
 神々みんなから、ひどくとがめられてどうしようもなくいた
 (千葉大学 2015a : 180)

(97) mak ne hine nisap siyeye wa
 どう COP て 急に 病気になる て
ene a=ye hi ka isam kor an.
 どう 4.A=~を言う ことも 無い て いる.SG
 どうしたことか、(川上の長者が) 突然病気になって、
手の打ちようがなくいる。<lit. どう言いようもなくいる>
 (千葉大学 2015a : 154)

このように、状態性動詞と kor an の共起については、「~という状態で暮らす」という
 意味で用いられ、単なる状態か、あるいは習慣的事態の一種と解釈可能な例がみられた。

次に、状態性動詞と wa an が共起する場合については、これまで動詞 an 以外はほぼ言及
 されていない。例(36)(再掲)の「an wa an」の場合、存在の一時性が表されているというの
 が先行研究における見解であった。

(36)(再掲) ku=nimu akusu rik ta kinasutunkur an wa an.
 1SG.S=木に登る すると 高所に ヘビ ある.SG て いる.SG
 私が木に登ったら上にヘビがいた
 (佐藤 2007a : 47)

これと類似の現象は日本語の方言にもある。工藤(2014 : 481)によると、熊本県松橋方言
 では存在動詞、形容詞にシヨル形式が後続し、一時性が表される。(以下に引用した例は
 すべて現在時制のものであり、過去時制の場合は「~ヨッタ」となる。)

- ・鳥居ノ前 ゴミン アリヨル。 <一時性・現在>
- ・コノ部屋 寒カリヨル。 <一時性・現在>
- ・花子ン顔 白カリヨル。 <一時性・現在>

(工藤 2014 : 544,545 より抜粋)

一時性の意味があらわれることについて、工藤(2014)は「運動動詞は、<時間限界のある動的事象>をあらわすがゆえに、<進行(終了前の段階)>か<結果(終了後の段階)>というかたちで、時間的限定性のある一時的な動的事象を表すことになる。一方、存在動詞、形容詞、名詞述語の場合には、開始限界、進展過程、終了限界、結果といった時間的展開性がない。従って、<一時性>という意味が直接的に顔を出すことになる。(工藤 2014 : 549)」と述べている。

今回の調査で、wa an と状態性動詞が共起する用例を見てみると、一時性が現れていると解釈できるものもあれば、そのように解釈しにくいものもある。以下の例(98)(99)は、一時的な状態としてみなすことができるが、例(100)(101)は一時性と恒常性の中間に位置する。また、例(98)~(100)は、変化の結果継続と捉えられるが、例(101)以降にはその性質がない。「状態性動詞+wa an」が表す一時性は、変化の結果継続というアスペクトの意味と比例しているのかもしれない。前掲の「an wa an (存在の一時性)」にしても、前部の an が「出現する」という存在の変化を表す⁴²ならば、変化の結果継続といえる。

日本語の形容詞は時間的展開性がないため、熊本方言の「存在動詞または形容詞+シヨル」の場合は一時性が前面に出るが、アイヌ語の状態性動詞は時間的展開性のある解釈も無い解釈も可能であるため(つまり、変化動詞の意味も形容詞の意味も持つため)、一時性の現れ方が段階的になっているのだと考えられる。

(98)tane kuca okari ne yakka mun ri wa an hi kusu

今 狩小屋のまわり COP でも 草 高くて あることので

今は狩小屋のまわりであっても草が伸びていた<lit. 高くなっていた>ので

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0237UT_35301AP)

(99)soy ta MACI NO KI a=etoyta wa pirka wa an a p

外 に 松の木(日本語) 4.A=~を植える て 美しい て いる.SG ただが

⁴² 佐藤(2007a)は an を「出現する」と解釈する見方があることを挙げつつも、「an が単独で出現の意味で用いられる例が容易に見つからないことを考えると、傍証がない限り即座には従いがたい(佐藤 2007a : 51)」としている。しかし、an には「hekaci an na. 男の子が生まれたよ。(田村 1996 : 9)」(hekaci : 男の子、na : FIN) のような「生まれる」という意味があることから、「出現する」に近い意味を an が持っていると考え、本論文では an wa an を出現という変化の結果継続と捉えることにしたい。

ekusukonna cinine hine ruwe ne kusu
 突然 枯れる て こと COP ので
 外に松の木を植えてきれいだったのに<lit. きれいになっていた／きれいであったの
 に>、突然枯れてしまったので

(千葉大学 2015b :)

(100) nen poka poro wa an ruwe ne p
 なんとかして 大きい て ある.SG こと COP だが
 どうにかこうにか大きくなった (成長した) のですが

(ア音 2 : 42)

(101) ene katuhu imi ka wen wa an pe
 あのような 格好 着物 も 悪い て ある.SG もの
 ahun ek sir an hi an
 入る.SG 来る.SG 様子ある.SG ことある.SG
 あんな (貧乏だったらしい) 格好して 着てるもんだってひどい者が
 (葬儀に参加すべく) 家の中に入ろうとしてやって来ているよ
 <lit. あんな格好、着物も悪い者が、入りに来ている>

(トゥイタク3 : 157)

さらに、次の例(102)は、前文脈によれば沢の水が増水しているわけではなく、道に沿って
 沢が大きくなっている状態を言い表しており、単なる状態の描写といえる。例(103)になる
 と wa an のアスペクト性は失われ、動詞単独で用いられた場合と完全に中和している。

(102) DANDANNI nay poro wa an nankor kusu
 だんだんに(日本語) 沢 大きい て いる.SG だろう から
 だんだん沢が大きくなっているだろうから

(千葉 2015a : 499)

(103) aynu opitta honihi kor wa okay pe ne wa.
 人間 皆 腹 ~を持つ て いる.PL もの COP FIN
 ‘Human beings all have a belly.’

(Sato1997 : 150)

そして、状態性動詞と kor an との共起の問題と同様の問題が、wa an にもある。今回収
 集した状態性動詞で、kor an と wa an の両方と共起した動詞は、an「ある、いる、な

る」、ne「である／になる」、kor「～を持つ」、hekote「～に連れ添う」、eus「～の先に付いている」、pirka「良い／美しい」、sikopayar「～のごとくである」であったが、これらの動詞についても、kor an と wa an の間でアスペク的な対立は明確には現れず、対立が無いか、もしくは kor an のほうに習慣性や多回性が認められるというものであった。先行研究において、専ら wa an を取るとされた iwanke「元気である」は、今回 wa an の例は出ていないものの、iwanke kor an の例(104)がある。しかし、この場合は「元気になりつつある」という変化の進行過程ではなく、「元気で暮らしている」という状態である。

- (104) acapo ka sone iwanke kor oka he
 おじさん も 本当に 元気である て いる.PL Q
 a=nukar humi ka isam ayne ora
 4.A=～を見る 感じ も ない あげく それから
 おじさんも元気でいるのか 姿を見ることもないので
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0161KM_34690AB_34691AP)

以上をまとめると、状態性動詞と kor an・wa an の関係は、

- ・状態性動詞+kor an…変化の進行過程、動作の習慣性・多回性、単なる状態
- ・状態性動詞+wa an…変化の結果継続、単なる状態

となるだろう。しかしながら、「変化の進行過程—変化の結果継続」という対応にしても、必ずしも同一の動詞においてその対応が成り立つわけではない。また、状態性動詞+kor an、状態性動詞+wa an のいずれも単なる状態を表す現象については、kor/wa 以前の文が付帯状況として解釈されることに起因している。

4.1.5 日本語西日本諸方言のシヨル形・シトル形との対照

本項目では、これまで日本語標準語のテイル形と比較されることの多かった kor an、wa an を、日本語西日本諸方言に見られるアスペクト形式シヨル形、シトル形とそれぞれ比較して、kor an と wa an の表す意味範囲を明らかにする。

4.1.5.1 シヨル形・シトル形について

日本語標準語は2項対立型アスペクトであり、テイル形が<進行>と<結果>の両方を表し、<完成>を表す形式と対立関係を形成している。これに対して京阪地域を除く西日本諸方言は、<進行>、<結果>、<完成>が対立関係を成す3項対立型アスペクトである(工藤 1995,2014)。例えば以下の例では、「破りよる」が動作継続を表し、「破っとる」が客体の変化の結果継続を表している。

- ・猫が障子、破りよる。おっばらいさい。
猫が障子、破っとる。張り替えないけん。

(工藤 1995 : 262)

工藤(1995)によれば、シヨル(シヨー、シユー等)とシトル(シトー、シチュー等)には「いくつかのアスペクト的意味のバリエーションがあるが、基本的には、時間のなかに成立・展開・消滅する<運動>の、<終了限界>をめぐる、その<限界達成前の段階>をとらえるか、<限界達成後の段階>をとらえるかで、対立している(工藤 1995 : 262)」。

シヨル形式の派生的意味は以下の図 2 のように表されている。(下線部が派生的意味である。)

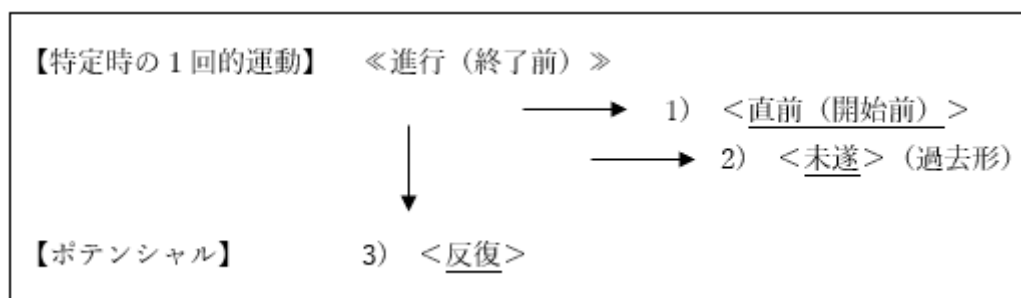


図 2 シヨル形式の派生的意味⁴³

(工藤 2014 : 374)

<進行>という基本的意味が<終了前の段階>であるとすれば、派生的意味<直前>は<開始前の段階>である(工藤 2014 : 374)。

⁴³ 表の名称は本論文筆者が付した。

- ・[魚に近づいていっているのを見て] ア 猫ガ 魚 食べヨル!
- ・[戸に近づいていっているのを見て] オ父サンガ 戸 開ケヨライ。
- ・[屋上から乗り出した人を見て] ア 人ガ 死ニヨル!

(それぞれ工藤 2014 : 374-375 から抜粋)

こうした<直前>は、単純なアスペクトの意味ではなく、<兆候の近くに基づく近未来の動作・変化の推定>というテンス的側面、ムード的側面が複合化されているという (工藤 2014 : 375)。

派生的意味<未遂>は、シヨッタ形式にあらわれる。例えば、自分のではなく他人のビールであることに気づいて、「モーチョットデ 人ノビール 飲ミヨッタ! (工藤 2014:376)」とすることができる。

派生的意味には、<反復>もある。<進行>が1回のな<具体的な動作・変化>を捉えているとすれば、<反復>は、「毎朝 (時々) オ父サンガ 戸 開ケヨルンヨ。」繰り返し起こる動作・変化を捉えている。

また、「シトル形式の派生的意味は以下の図 3 のように表されている。(下線部が派生的意味である。)

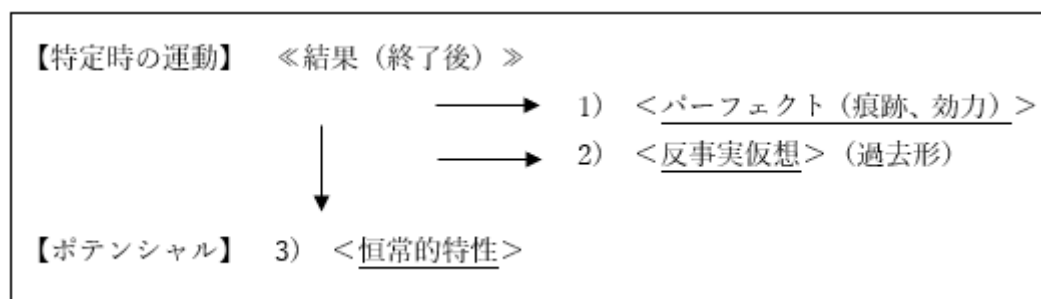


図 3 シトル形式の派生的意味⁴⁴

(工藤 2014 : 379)

<パーフェクト (痕跡、効力)>について、シトル形の基本的意味が必然的結果をもたらすのに対し、派生的意味の<痕跡>は、偶然的な間接的結果にすぎない。(工藤 2014 : 380)

- ・[足跡や靴の汚れを見て] 子供ガ 畑ノナカ 歩イトル。
- ・[ビールがなくなっているのを見て] マタ オ父サン オ酒 飲ンドライ。

⁴⁴ 表の名称は本論文筆者が付した。

- ・[窓の汚れを見て] 子供ガ マタ 汚い手デ 窓 開ケトライ。
- ・[荷物があるのを見て] 留守ノ間ニ 誰カ 来トライ。

(それぞれ工藤 2014 : 380-381 から抜粋)

また、派生的意味の<効力>では、<先行時の動作・変化の完成>と、後続時におけるそのなんらかの<効力>の現存が関係づけられている。先の<痕跡>の場合は知覚可能であるが、<効力>は知覚不可能である。(工藤 2014 : 382. 646)

- ・私 昨日モ ビール 飲ソドルンヨ。 ソンデ 今日ワ 飲メナイ。
- ・アノ子 小サイ頃 外国ニ 行ツトルンヨ。 ソンデ 英語ガ シャベレルンヨ。

(それぞれ工藤 2014 : 382 から抜粋)

過去形のシトツタ形式になると、「アンタガ 止メンカッタラ オ父サン 今頃 オ酒 飲ソドツタゼ。(工藤 2014 : 382)」というような、<反事実仮想>というモーダルな派生的意味も表すようになる。(工藤 2014 : 382)

また、「大キナ 道路ガ 走ツトルゼ。(工藤 2014 : 384)」のような、派生的意味の<恒常的特性>はもはやアスペクトの意味とは言えず、形容詞化している。(工藤 2014 : 384)

4.1.5.2 kor an とシヨル形

kor an とシヨル形を比較してみると、管見の限り kor an の用法は<進行>と<反復>のみであり、<直前>と<未遂>は表すことができない。

ちなみに、<直前>を表すことができるのは、oasi という助動詞である。oasi は「～を始める」という動詞であるが、助動詞としても機能する。しかし、助動詞としてはたらいの場合、「～しはじめる」という事態の開始を表す意味にはならず、「～しようとする」あるいは「～することになっている」という意味を表す(例(105))。中川(1982b)は助動詞 oasi が「～しはじめる」と解釈されてきたことについて問題提起し、助動詞 oasi は「<ある事象が将来確実に起こると予想される>ことを表わす(中川 1982b : 243)」形式であり、実際にはムードを表わすのが基本的用法である⁴⁵と述べている(中川 1982b : 242-243)。

(105) nisatta k=arpa oasi ruwe ne.
明日 1SG.S=行く.SG oasi こと COP

⁴⁵ oasi がモーダルな要素であるという点について、Izutsu(2000)は、「oasi kor an」のように oasi にはアスペクト形式が後続することが可能であることを根拠として疑問を呈している。しかし、本論文第3章で示した「kusu ne kor an」のような事例(第3章、例(15))を考えると、アスペクトとみなされている形式の前にモーダルな要素が来ることは可能である。

(行くことになった、行くことに決まっている、という意味)

(中川 1982 : 243)

また中川(1982b)は、「～しはじめる」という意味を表しうる形式としては幌別方言などの heasi があるということを述べつつも、該当する実例はないとしている。heasi は沙流・千歳方言の語彙ではないため、少なくとも沙流・千歳方言では事態の開始を表す文法的形式はないと考えられる。

4.1.5.3 wa an とシトル形

佐藤(2006, 2007a, 2007b)によれば、wa an は変化の直接的結果の継続を表すことはできるが、動作パーフェクトを表す機能はなく、間接的結果を表すことはできない。

例えば、日本語標準語のテイルは「豆の様子じゃ、10 里くらい歩いているよ (工藤 1995 : 121)」のような表現が可能であり、方言のシトル形式でも客体結果を表す意味で「太郎が 戸 開けとる」(実際の動作は見えていないが、戸が開いていることから判断)とすることができるが、wa an にはこうした用法が無い。例えば例(106)のように言うことができず、中川(1981)によれば、例(106)について話者は「歩くんではなくて、立っているみたいだ」という見解を示したという。

(106) * apkas wa an

歩く て いる.SG

(中川 1981 : 136)

そしてまた、<反事実仮想>を表す用法も wa an には見当たらない。つまり、wa an が表せるのは<結果>と<恒常的特性>ということになる。

動作が終わったあとの段階を表す際には、wa isam や wa okere という形式が使われるが、これは<パーフェクト (痕跡、効力)>の意味は持っていない。wa isam、wa okere は、接続助詞 wa+自動詞 isam 「ない、なくなる」、接続助詞 wa+他動詞 okere 「～を終える」という構成であり、どちらも「～てしまう」と訳されることが多いが、前者は「行動の結果、何かがなくなってしまったこと (田村 1988 : 43)」(例(107))を表し、後者は「予定の行動がすんだこと (田村 1988 : 43)」(例(108))を表すという違いがある。⁴⁶

⁴⁶ 日本語のテシマウは、期待外や残念・後悔といった意味を持つことがあるが、沙流・千歳方言の wa isam や wa okere には、そのような用法はみられない (本論文 4.1.6.2 も参照のこと)。(テシマウについては、高橋(1969)、寺村(1984)など参照。)但し、Izutsu(2001 : 26)によれば、旭川方言や静内方言では (wa)okere に(adversity)の含みがあるという。

(107) ku=ku wa isam

1SG.A=~を飲む て 無い

飲んでしまった

=全部飲んでしまって、からっぽにした（だからお茶碗の中に水がない）

(田村 1988 : 43)

(108) ku=ku wa okere

1SG.A=~を飲む て ~し終える

飲んでしまった=飲むはずになっていたのを飲み終えた

(田村 1988 : 43)

wa isam や wa okere は、その構造から wa an と並列に扱われることがあるが、文法的に同じレベルでは扱い難い。

まず、wa isam の isam は通常人称接辞を取ることがなく、文法化された形式であるのに対し、wa an の an は人称標示が必須である。wa okere の okere は人称を取る場合もあるが、取らないもののほうが多く見られる⁴⁷。また、wa okere は接続助詞 wa を伴わずに okere 単独で助動詞としてはたらくこともできる点で、wa isam とともに異なっている⁴⁸。つまり、例(108)であれば「ku=ku okere」と言っても同じことになるし、程度のはなはだしさを表す場合も okere のみ (pirka okere 等) になることがある。

また、wa okere が状態性動詞に付くと、その程度のはなはだしいことを指す形式となる。たとえば pirka 「よい、美しい」であれば、pirka wa okere 「それはそれはきれいな、最高に美しい。(田村 1996 : 462)」という意味になる。この場合の wa okere は、「~し終える」というよりむしろ「~しきる」に近いものであり、動作の一局面を取り出すアスペクト性から少し遠ざかる。須田(2010)は「しきる」について、「対象への働きかけが、あますところなく、徹底的であるということを表し、動作の過程全体の実現のし方を表していると言える。動作の結果との関係において動作の実現のし方を表しているので、動作が終わったということを表すともいえるのだが、動作の始まりや続きとの関係において、終わりを表しているわけではない。(須田 2010 : 176)」としている。

⁴⁷ 以下は okere が人称をとった場合の例である。(下記の例の人称接辞「c=」は通常除外的一人称複数主格を表すが、神話中では叙述者の一人称単数主格を表す。そのため和訳は「私」となっている。)

c=e wa c=okere
1PL.EXC.A=~を食べる て 1PL.EXC.A=~を終える
「私が食べ終え」 (千葉大学 2015b : 1407)

⁴⁸ 通常、動詞の否定は「否定辞 somo + 動詞」の形式で表されるが、「動詞 + isam」という形式で同じ意味を表すことがままある(中川 1995 : 32)。例えば動詞 ek 「来る」に isam が後続して、「ek isam (彼は) 来ていない。」という意味になる。ただし、この場合は wa isam の wa が省略されているわけではないことに注意されたい。

4.1.5.4 kor an、wa an のあらかず時間的的局面

シヨル形 kor an、シトル形と wa an をそれぞれ比較してみると、意味範囲の差異は以下の図 4 と図 5 のようになる（それぞれ図 2、図 3 を参考に作成）。太枠内が kor an、wa an の表す範囲となる。

図を参照すると、kor an、wa an は、特定時の運動の基本的意味またはポテンシャルな事態を表すのに限られ、それぞれの表の(1)(2)の派生的な意味への拡張はなされていないことがわかる。<直前>や<未遂>、<パーフェクト>や<反実仮想>は、動作が実現していない（もしくは実現したかどうかは明確ではない）か、動作の結果が間接的にしかあらわれていないのだが、kor an と wa an はこうした事態を表さない。ここから、kor an と wa an は、運動の直接的な存在を必要とする形式であると考えることができる。

この点に関して、次の 4.1.6 で述べる。

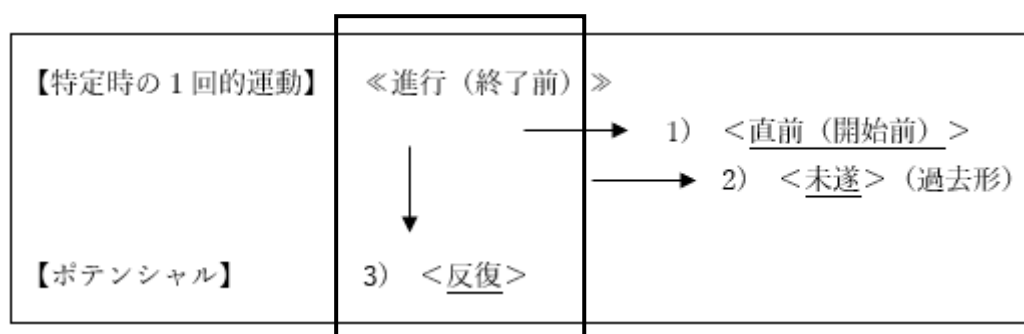


図 4 シヨル形式と kor an の意味範囲の比較

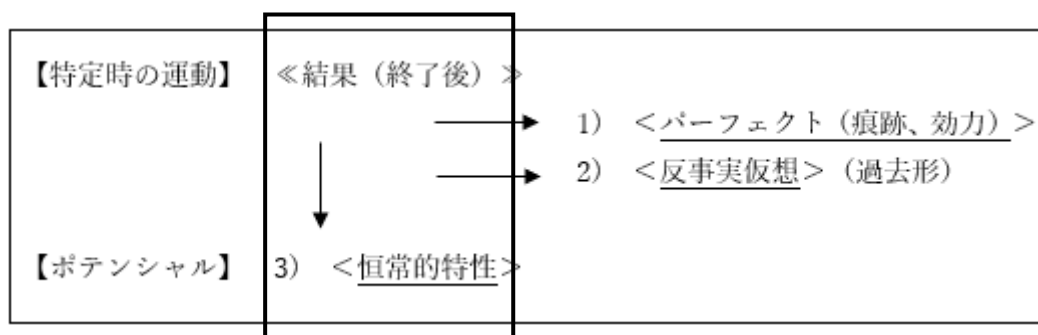


図 5 シトル形式と wa an の意味範囲の比較

4.1.6 存在様相を表す形式としての kor an、wa an

本項目では kor an、wa an を存在の様相を表す形式として捉え、事態の内的時間構造という時間的側面だけでなく、存在・非存在という空間的な側面が問題とされる形式であることを述べる。

4.1.6.1 動詞 an が明示する事態の存在

現代日本語のテイル／テアル形の動詞イル／アルの文法化が進行しているのに対し、kor an、wa an の an は文法化が進んでおらず、具体的な存在を明示している。それは、an が①人称表示を要求すること、②否定表現と共起しにくいこと、③未来の事態を推量する場合に用いられにくいことの3点から説明され得る。

①について、先行研究でも指摘されているように、沙流・千歳方言では kor an、wa an の an は人称表示を要求する。wa an において an がゼロ表示の場合でも、それは抽象的存在を指すのではなく、三人称 (= 客体) を表していることになる (例(28)参照、an は「お酒」の存在を表す)。

- (28)(再掲) tonoto ku=hok wa an na en=kosinewe.
酒 1SG.A=~を買う て 1SG.S=ある.SG FIN 1SG.O=~のところへ遊びに行く
お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
(中川 1981 : 133)

②について、佐藤 (2008 : 200) によれば「～ていない」に相当する否定表現は、kor an、wa an ではなく、基本的には *somo ki no an* 「～ないでいる」⁴⁹ という形式で表される (例(109)(110))。

- (109) na ku=ipe ka *somo ki no k=an*
まだ 1SG.S=食事する も NEG するで 1SG.S=いる.SG
私はまだ食わずにいる (=私はまだ食べていない)
(佐藤 2008 : 200)

- (110) hokus ka *somo ki no an* pe
ひっくり返る も NEG するで いる.SG もの
ひっくり返らずにいるもの (=ひっくり返っていないもの)
(佐藤 2008 : 200)

③について、日本語では「明日の今頃は札幌で食事をしているだろう」というように、動詞のテイル形は未来の運動を推量する際にも用いることができるが、同様の状況で kor an や wa an が使用されている用例は管見の限り無い。推量を表す助動詞 *nankor* 「～だろう」との共起にしても、発話時現在における現在の状況の推量 (例(111)(112)) である。

⁴⁹ no は接続助詞で、動詞句に後続して副詞句を作る。

(111) iskar un nispa a=pahaw nu kor an nankor
 石狩 の 長者 4.A=噂 ~を聞く ている.SG だろう
 石狩の旦那さん 私の噂を聞いておいででしょう<lit. 聞いているだろう>
 (上田トシの民話3:44)

(112) i=os a=hekote nispa ka ek kor an nankor
 4.O=後 4.A=~にかしづく長者 も 来る.SG て いる.SG だろう
 私の後から夫も来るでしょう<lit. 来ているでしょう>
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ: C0184KM_34739ABP)

しかし、未来の事態であっても、話者の意志性が現れている場合には、kor an や wa an が用いられることがある。話者にとって、その事態はほぼ実現しているものとみなされるために、より発話時現在に近い未来として捉えられていると考えられる。例(113)は、kor an に kusu ne 「~するつもりだ、~する予定だ」が後続しているが、動詞 yayasanniyo は「先に行って支度している」という意味で用いられている⁵⁰。また、nankor を用いた「~しなさいよ」という命令表現⁵¹ (例(114)) や、kusu ne を用いた「~しよう」という勧誘表現 (例(115)) の場合にも kor an や wa an が共起する。

(113) kamuy or ta yayasanniyo=an kor an=an kusu ne na
 神 ところで 自分について考える=4.S て いる.SG=4.S つもり COP FIN
 (こちらで私と) 暮らすことができるよう<lit. 神の国で>
私はこちらで手筈を整えておく<lit. 私は支度しているつもりだよ>
 (白石 2004 : 196)

(114) ney ta pakno nisasnu mintum e=kor wa e=an nankor na.
 いつまでも 健康である 体 2SG.A=~を持つ て 2SG.S=いる.SG だろう FIN
 どうかいつまでも健康な体を持っているんですよ(=いなさいよ)。
 (田村 1996 : 405)

(115) okokko ek na
 お化け 来る.SG FIN
 a=uni ta ahun=an wa oka=an kusu ne
 4.A=家に 入る.SG=4.S て いる.PL=4.S つもり COP

⁵⁰ 原典 (白石 2004) の注釈による。

⁵¹ 「予言の形をとった命令表現の一つ (田村 1996 : 405)」

お化けが来たぞ。家に入っていましょう

(大谷 1999 : 101)

4.1.6.2 動詞 an と動詞 isam の対立

kor an、wa an における an が存在動詞としての意味を保持していることは、wa an と wa isam の対立からも見て取れる。

例えば例(116)のように、「ray wa an」は目の前で第三者が死んでいる（目の前に死体がある）ことを表し、発話時において死体がない場合には例(117)のように wa isam を使う。例(117)は、船に乗って出かけて行った和人が、息も絶え絶えで帰り、「一緒に船に乗っていた足軽たちは皆死んで、一人で生き残って帰ってきた」という事情を、相手のアイヌに説明している場面である。wa an には間接的結果を表す機能はないため(佐藤 2006, 2007a, 2007b)、例(117)の状況では ray wa an は使用できない(例(117)')ということになる。

(116) uni ta ahup=an akus ne hokuhu ne aan pe ape ekohopi

家 に 入る.PL=4.S すると その 夫 COP た もの 火 ~からわかれて

hokus hine ray wa an

倒れる て 死ぬて いる.SG

家に入ると、夫であった人は囲炉裏に背を向けて倒れて死んでいました

(千葉大学 2015c : 1854)

(117) nea a=tura asinkaro utar ka opitta ray wa isam

あの 4.A=~を連れる 足軽 たちも 皆 死ぬて ない

一緒に船に乗っていた足軽たちはみんな死んでしまったのです

(萱野 1998 : 84)

(117)' nea a=tura asinkaro utar ka opitta ray wa an

あの 4.A=~を連れる 足軽 たちも 皆 死ぬて いる.SG

一緒に船に乗っていた足軽たちはみんな *(もう) 死んでいる

(例(117)からの作例)

今回調査した限りでは、ray wa an (ray wa oka(y)含む) の用例は沙流・千歳方言において計 30 例が抽出されたが、いずれも死体が発話時点において存在している状況であった。また、ray wa isam の用例は計 30 例であったが、死体が存在している状況で ray wa isam が用いられている例はほとんど見られなかった。⁵²

⁵² 死体が存在している状況で ray wa isam が用いられるケースは全く無いわけではなく、神謡中に 3 例あ

また、物語中で既に死んでしまっている話し手が自らのことを語る場面で、動詞 ray および動詞 an が一人称を取って「ray=an wa an=an (私は死んでいる)」となる用例はあるが、同様の文脈で「ray=an wa isam=an (私は死んでしまった)」あるいは「ray=an wa isam (私は死んでしまった)」と表現されている用例は無い。「ray=an wa isam=an (私は死んでしまった)」は、以下の例(118)のように接続助詞 yakun 「～したら」など⁵³を後部に伴い、条件節として現れる場合のみが確認された。

- (118) ray=an wa isam=an yakun, a=kotanu ne a p anakne
 死ぬ=4.S て ない=4.S たら 4.A=村 COP た もの TOP
 earkinne supuyasak kuni a=ramu kor an=an pe ne wa
 本当に 煙が絶える ように 4.A=~を思う て いる.SG=4.S もの COP て
私が死んでしまったら、村だったところは、
 すっかり煙も絶えてしまうと思っていたのです。

(ア音 10 : 126)

wa isam はほとんどの場合に「～てしまった」と日本語訳されるが、日本語の「～てしまった」よりも意味が限定される。日本語の「～てしまった」は動詞の表す事態の完了が基本的な意味となるが、wa isam は動作の主体あるいは客体の消失を前提とするような事態の完了しか表すことができない。例えば、「壁に子供が落書きしてしまった。(作例)」のような文章は、何らの消失も意味していないため、wa isam によっては表せない。そしてまた、「～てしまった」に現れるような「残念」や「後悔」といったムード的な意味にしても、wa isam の場合は積極的に表しているとは言えない。仮にムード的解釈が可能であったとしても、そこには必ず「事物の消失」が前提にある。

動詞 ray 「死ぬ」のほか、動詞 arpa 「行く(単)」(paye 「行く(複)」) も wa an と wa isam の両方の例があるが、こちらも基本的には動作主が既に消失している場合は wa isam が選ばれる。目の前に動作主がいない場合でも wa an が選ばれる場合があるが、その際には何らかの形でその動作主の存在に言及しているという特徴がある。例えば次の例(119)では、主人公の妻と息子・娘は既にあの世へ行ってしまっているのだが、この直後では、実際には妻と息子・娘はあの世の手前で留まっていることが語られる。

- (119) a=macihi ka i=kotcawot arpa wa an
 4.A=妻 も 4.O=先に 行く.SG て いる.SG

った。

⁵³ 他、yakne 「～したら」、ciki 「～したら」、yakka 「～しても」を伴う例が見られた。

a=poho ka a=matnepoho ka i=kotcawot arpa wa an pe
 4.A=息子も 4.A=娘 も 4.O=先に 行く.SG て いる.SG だが

私の妻も私に先んじて（あの世に）行っていて

息子も娘も私に先んじて行っていたのですが

（アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0246KM_34612BP）

つまり、もはや言及する必要のない対象の場合には wa isam、何らかの理由でその存在を問題にしなければならない場合には wa an が選ばれると推測される。

こうした an と isam の対立については特にこれまで指摘されることはなかったが、アイヌ語のアスペクト形式においては最も対立関係が見出しやすい。ただ、これは「存在—非存在」という意味的な対立であって、一般に言うアスペクト的意味すなわち「事態の内部的な時間構造の捉え方（事態の開始・持続・終結のどの段階に注目するかなど）（野田 2015:4）」の対立ではない。

しかしながら、存在の様相を仕分けるものとしてアスペクトを定義するならば、アイヌ語におけるアスペクトの対立に、こうした「存在—非存在」という基準を見出すことができる。つまり、kor an、wa an は事態の内的時間構造という時間的側面だけでなく、存在・非存在という空間的な側面が問題とされる形式なのであり、存在の様相を表すのが第一義であり、事態の内的時間にかかわるアスペクト的意味はそれに付随するものとする。

4.1.7 小括

以上、4.1 では、沙流・千歳方言における kor an と wa an の意味機能を分析した。まず、非状態性動詞について、両者の基本的な対立は以下の表 4 のようになる。

		kor an	wa an
非状態性動詞	動作動詞 (限界性-)	動作継続 習慣性、多回性	(基本的には共起しない)
	動作・変化の両面 が現れる場合	動作継続 習慣性、多回性	変化の結果継続（動作の完結性）
	変化動詞 (限界性+)	変化の進行過程 習慣性、多回性	変化の結果継続

表 4 kor an と wa an の基本的な意味機能（非状態性動詞の場合）

非状態性動詞の場合、動作動詞は、kor an では動作継続か動作の習慣性・多回性を表す。限界性をもたない動作動詞は基本的には wa an とは共起しない。変化動詞は、kor an では変化の進行過程、wa an では変化の結果継続を表す。kor an が習慣性・多回性を表す

例についてはこれまで一部の動詞で認められているものであったが、今回のデータを見る限りでは、動詞の性質に関わらずひろく見られる現象である。

動作動詞の中でも、いわゆる二側面動詞や、認識・言語・表現活動を表す動詞、思考・感情・知覚動詞の一部には、動作と変化の両面が現れるものがある。kor an では動作性が前面に現れて、動作継続や習慣性・多回性を、wa an では変化性がより前面に現れて、変化の結果継続を表す。先行研究で指摘されていた nukar の能動性の対立も、これに含まれるものと考ええる。

次に、状態性動詞については、両者の基本的な対立は以下の表 5 のようになる。

		kor an	wa an
状態性動詞	限界性－	習慣性、多回性、単なる状態	単なる状態
	限界性＋	変化の進行過程	変化の結果継続

表 5 kor an と wa an の基本的な意味機能（状態性動詞の場合）

状態性動詞の場合、同じ動詞でも限界的に捉えるかどうかによってアスペクト的意味が変化する。kor an は、限界性が問題とならない場合には動作の習慣性・多回性、単なる状態を表し、問題となる場合には変化の進行過程を表す。wa an は、限界性が問題とならない場合には単なる状態を、問題となる場合には変化の結果継続を表す。先行研究では、wa an が状態性動詞と共に共起した場合に、その状態の一時性が現れ得ることが指摘されていたが、今回のデータを見ると、一時性の現れは段階的なものであり、恒常的性質を表す場合もある。

また、kor an、wa an は、具体的な存在を要求する形式である。それは、特定時の運動の基本的意味またはポテンシャルな事態を表すのに限られること、an が人称表示を要求すること（an の非文法化）、否定表現と共に共起しにくいこと、未来の事態を推量する場合に用いられにくいことから説明され得る。ここから、kor an、wa an は存在の様相を表すのが第一義であり、事態の内的時間にかかわるアスペクト的意味はそれに付随するものと考えられる。

4.2 kane an の分析

4.2.1 先行研究の検討

kane は、助動詞的用法、接続助詞的用法、副助詞的用法をもつ形式であり、既に多くの記述がなされている（金田一 1931、知里 1974[1936]、知里 1973[1942]、田村 1960、Refsing1986、中川 1995a、佐藤 2002 など）。沙流方言の例を挙げると、例(120)は助動詞的用法、例(121)は接続助詞的用法、例(122)は副助詞的用法の例である⁵⁴。

- (120) ponpon kane ayne tane us wa isam
小さくなる て あげく 今 消える て 無い
だんだん小さくなってとうとう消えてしまった。

(田村 1996 : 273)

- (121) sinu kane reye kane ahup
ずる て 這う て 入る.PL
彼らはひざをついて身をずらしはって家の中へ入った（遠慮して身を低くして入る様子）。

(田村 1996 : 273)

- (122) sisam nisu a=kutkore ruwe neno kane an
和人 白 4.A=〜に帯をさせる 様 のような ある.SG
日本の白に帯をしめさせたのみたいだ。

(田村 1996 : 273)

本項目で取り上げる「kane an」は、「接続助詞 kane + 存在動詞 an」という構成である。沙流・千歳方言の接続助詞 kane については、「(なんと)...して、...したままで、...するほど。(田村 1996 : 273)」、「[〜して]の意味で、wa や hine と同じように使われる。(中川 1995a : 144)」とある。kane an は「〜ている (てある)」と訳されることが多く、知里(1973[1942])は kane an を「状態の継続、動作の結果を示す (知里 1973[1942] : 571)」ものとして、「持続態(durative)(知里 1974[1936]:101)」を表す形式と位置付けている⁵⁵。この点で、kane an

⁵⁴ ①[助動] (なんと)...している。②[接助](なんと)...して、...したままで、...するほど。③[副助] (慣用表現の中で、副詞句の後に置かれて)nenno kane an ネノ カネ アン...とそっくりだ。(田村 1996 : 273)

⁵⁵ 佐藤(2002)は kane について、各方言の先行研究を概観した上で、千歳方言のデータに基づき、千歳方言の kane に概略「極端な程度を表す kane」、「比況的意味を表す kane」、「婉曲的意味を表す kane」、「継続や同時性を表す kane」の用法を認めているが、それらを総合して、kane の意味は、「「あるもの、ある事柄と等価である」という基準を満たすのに足りる程度」のようなものとするほうが、kane の多様な意味を統一的

は wa an と類似している。

以下、沙流・千歳方言における kane an の用例をいくつか挙げる (例(123)~(128))。

(123) saparusihi meske kane an.

頭の皮 はがれる て いる.SG

頭の皮がむけている。

(田村 1988 : 44)

(124) merayke wa hecururu kane an

寒い て 首を引っ込める て いる.SG

寒いので首をちぢめている。

(田村 1996 : 273)

(125) a=kor mantari ranma ekutkor kane an hine ahun

4.A=~を持つ 前掛け やはり ~を締める て いる.SG て 入る

私の前掛けをやはり締めて入って来た <lit. 締めていて、入った>

(佐藤 2002 : 77-78)

(126) a=mire wa arpa amip amip ne ya huku ne ya ka

4.A=~を~に着せる て 行く.SG 着物 着物 COP か 服 COP か も

sak kane ear amnep patek mi kane an

無い て ただ 下着 だけ ~を着る て いる.SG

着せられて行った着物、着物だか服だかも無くしてただ下着一枚だけ着ている

(佐藤 2002 : 78)

(127) piskan apa un kane oka wa poronno an na

両側 戸 ~に付く て いる.PL て たくさん ある.SG FIN

(廊下の) 両側にずっと戸が付いていて (部屋が) たくさんあった

(佐藤 2002 : 78)

(128) tasiro ka anpa makir ka anpa kane oka wa ukohoyuppa

山刀 も ~を持つ.PL 小刀 も ~を持つ.PL て いる て みんなで走る

に説明できる可能性がある (佐藤 2002 : 85)」と述べている。このうち、kane an 「~ている」とアスペクト的に解釈されるのは「継続や同時性を表す kane」の用法に含まれるが、継続や同時性の意味が「程度」から説明可能な理由として、「あるものの程度の叙述は、そのものに付随して同時に存在する性質、状態を表すから (佐藤 2002 : 84)」であるとしている。

山刀も持ち小刀も持っていて走り回った

(佐藤 2002 : 78)

本項目では kane an が他の存在型アスペクト形式とはどのように異なるかに注目して考察を進めたい。

4.2.2 共起する動詞

沙流・千歳方言において、kane an と共起し、継続や同時性を表している動詞(句)を調査したところ、120 個収集された。動詞の一覧は本論文巻末の「付録」を参照されたい。全体的な傾向として、kane an と共起する動詞は変化動詞が多く、中でも身体的(物質的)特徴や状態にかかわる動詞がよく見られる。また、状態性動詞の割合も高く、「動詞句+kane an」で一種の常套表現として固定化している例が散見される。

身体的(物質的)特徴は、主体の表情(例(129)(130))や服装(例(131))、身体への接触を伴う所有物(例(132)~(135))などを含んでいる。このときの所有物は無情物・有情物どちらもあり得る。例(136)のように「妊娠している」というのも一種の所有状態と考えることができるだろう。また、例(137)のように、模様などの物質の形状に関する描写もあり、この例の場合は鷲神の形が耳輪に付いているという点で、接触関係のひとつであると言える。

(129) mina kane an wa a wa an uske un
笑う て いる.SG て 坐る.SG て いる.SG ところに
笑って<lit. 笑っていて>座っているところに

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0159KM_34683ABP)

(130) ipor kurkus kane an wa ne yakka
顔 影がある て いる.SG て COP でも
渋い顔をしつつですが

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0162KM_34692AB_34693ABP)

(131) cokusamip mi kane an okaypo apeetok ta an hine
裏返しにした着物 着る て いる.SG 男性 上座 に いる.SG て
喪服を着ている男性が上座に座っていて

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0184KM_34739ABP)

(132) pon kuwa kor kane an wa
小さい 杖 ~を持つ て いる.SG て

小さい杖を持って <lit. 持っていて>

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0161KM_34690AB_34691AP)

- (133) a=wenpoutari sapanum takupi a=ani kane an=an wa
4.A=悪い息子たち 頭部 だけ 4.A=~を持つ て いる.SG=4.S て
私は極道息子たちの頭部だけを手に持っていました。

(ア音 10 : 46)

- (134) hoski nisike kane an wa san pe
先に 薪を背負う て いる.SG て 下りる.SG もの
最初に薪を背負って下がってきたのが <lit. 薪を背負っていて下りた者>

(平石 2003 : 56)

- (135) yaykata ka pakkay kane an kor
私 も 子をおぶう て いる.SG て
私も (孫を) 背負い <lit. 背負っていて>

(上田トシの民話 3 : 37)

- (136) ene an poro pet or ta
このように ある.SG 大きい川 ところで
ene an menoko honkor kane an menoko
このように ある.SG 女 妊娠する て いる.SG 女
こんなに大きな川で、あんな身重の女が <lit. あんな女、妊娠している女が>

(上ウ : 30)

- (137) kapacir noka oma kane an ninkari
鷺 形 ~につく て いる.SG 耳輪
ワシ神の形がついている耳環を

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0159KM_34683ABP)

kane an が状態性動詞と共起する場合は、その状態性動詞が単独で用いられる場合と意味的な対立はほぼ見られない。例(138)は、集まった鳥によって一時的に山が黒く見えているという点では一時性が読み取れるが、例(139) (140) (141)は恒常的な、単なる状態を表している。ただ、例(139)(140)は動詞単独の場合との意味的対立が見られないのに対し、例(141)の動詞 cekantoorsoye「天に向かってそびえている」は今のところ kane an を伴った形でしか出てきておらず、常套句として固定化しているものとみられる。

- (138) paskur uwekarpa ayne sorekusu kunne kane
 カラス 集まる あげく それこそ 黒い て
 nea nupuri corpok ta kunne kane oka
 その山 下 で 黒い て ある.PL
 烏がたくさん集まって来て、それこそその山の下辺りが真黒くなるぐらいでした
 <lit. 烏が集まった挙句、それこそ黒くて、その山の下で黒くなっていた>
 (萱野 2005 : 65)

- (139) ponno sapaha だか、どこだか hure kane oka cikap いるもんだ話だ
 少し 頭 赤い て ある.PL 鳥
 ちょっと頭だか、どこだか赤くなっている鳥がいるものだという話だ
 (千葉大学 2015c : 1638)

- (140) kewe pon kane an okkayo nukunne okkayo
 体 小さい て いる.SG 男 顔が黒い 男
小柄な男<lit. 体が小さい>、顔色の小黒い男が
 (平石 2003 : 20)

- (141) cekantoorsoye kane an poro nupuri an ruwe ne
 天に向かってそびえている て いる.SG 大きい 山 ある.SG こと COP
天を突いてそびえている大きな山がありました
 (ア音 5 : 4)

4.2.3 アスペクト的意味—wa an との差異

知里(1973[1942] : 503)で、kane an が wa an と同じく「結果態(resultative aspect)⁵⁶」をあらわす形式であるとされているように、kane an は結果状態を表す点では wa an に似ている。しかし、佐藤(2002)が kane の性質に「比況」⁵⁷を認めたように、kane an では主体の状態が何らかの比喩になる傾向を持っている。

例えば、例(142)は「頭を下げる」という変化の結果継続と捉えることが出来るが、ここで「頭を下げている」という状態は、大きい荷物を背負っていることの比喩的描写となっている。対して例(143)では wa an (ここでは複数形 wa oka) が用いられているが、こちらは「頭を下げる」⁵⁸といっても単に頭を下げている状態であって、比喩的な描写ではない。

⁵⁶ 「結果態」は知里(1973)が用いている用語であり、この場合の「態」は aspect を指している。

⁵⁷ 注 55 参照。

⁵⁸ hepokiki 「頭を下げる」は自動詞、kohepokiki 「～に頭を下げる」は他動詞である。

(142) kimosma hine suy poro sike kohepokiki kane an wa iwak
hine
山に入る て また 大きい 荷物 ~に頭を下げる て いる.SG て 帰る て
山に行ってまた大きな荷物を背負って頭を下げながら<lit. 荷物に頭を下げていて
>帰って来ました。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0184KM_34739ABP)

(143) kamuy opitta hepokiki wa oka rok pe hetaripa wa
神 皆 頭を下げる て いる.PL た もの 顔を上げる て
神々が全て頭を下げていたものが顔を上げて

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0152KM_34639ABP)

また、kane an の場合は主体の属性（ステータス）を積極的に表している場合が多い。例えば着物にしても、ただ着ているというより、それによってその人物の属性が表されるという一種の装備に相当する（例(144)）。これに対して mi wa an 「~を着ている（た）」の場合、着ている物はあくまで単なる着物であり、着脱可能な物質である。（例(145)、(146)）

(144) kunne kosonte utomciwre kunne cipanup epaunu kane an
黒い 小袖 ~を身につける 黒い 鉢巻 ~を頭につける て いる.SG
kamuy menoko ni opes ran hine ora
神 女 木 ~に沿って 下りる.SG て それから
黒衣着物をまとい、黒いかぶり物をした<lit. 鉢巻を頭に付けている>女神が
木を伝って下りて来て

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0227UT_35298ABP)

(145) ne a=mi wa an pe ika wa amip use a=anu hine
その 4.A=~を着る て いる.SG もの 上から着るもの ~を脱ぐ(4.A) て
私は着ていた上着を脱いで

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0211UT_35234BP)

(146) nani a=mi wa okay pe use a=anu huraye wa i=kore.
すぐ 4.A=~を着る て いる.PL もの ~を脱ぐ(4.A) ~を洗う て 4.O=くれる
sinna amip sanke hine i=imire ne ya ki wa
別の 着物 ~を出す て 4.O=~に着せる COP か する て
私が着ているものを脱がせて洗ってくれました。

別の着物を出して私に着せてくれたりしました。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0194UT_35224AP)

次の例(147)では、「コタンブンキヨ (人名) の着物」というある種の属性を持った着物のように思えるが、ここではコタンブンキヨではない人物がコタンブンキヨの着物を一時的に着ているという場面であり、その人物の特性をあらわすものではない。

(147) Kotanpi... punkiyo mipihi ka mi wa an a p
コタンブンキヨ 着物 も ~を着る て いる.SG ただが
(彼女は) コタンブンキヨの着物も着ていたが

(千葉大学 2015c : 1826)

とはいえ、kane an と wa an は必ずしも常に上記のような対立を示すわけではない。(例(148))

(148) a=kor amip e=heusi kane e=an wa
4.A=~を持つ 着物 2SG.A=~をかぶる て 2SG.S=いる.SG て
ene iki=an siri e=i=nukar kor e=an yakka
このように する=4.S 様子 2SG.A=4.O=~を見る て 2SG.S=いる.SG ても
iteki e=hawkor.
PROH 2SG.S=声を出す
私の着物を頭から被って <lit. 私の着物をお前が頭から被っていて>
私がやることを見ている決して声を出すのではないよ。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0161KM_34690AB_34691AP)

しかし、kane an には以下の例(149)～(152)のような常套表現としての使用例が多くみられ、やはり wa an よりも使用場面が限られていることは明らかである。

例(149)は、夢の中で「神の男性」(クマ)が人物(主人公)に語りかける場面である⁵⁹。クマが送り儀礼を経て頭骨を整えられると、神の世界では整髪された姿になると考えられており、ここではクマが髪を切りそろえた人間の姿で現れている⁶⁰。

⁵⁹ 神(カムイ)は夢を通じて人間にメッセージを伝えることができると考えられている(中川 1995b : 120)。

⁶⁰ 「クマの送り儀礼では、所定の方法で頭骨を整えてもらう(ウンムケ unmemke 頭部の解体)。すると神の世界へ行ったクマ神はきれいに整髪された姿になり、大いに満足すると考えられている。」(該当部分原典注釈より引用)

- (149) nea asir sapa tuye kane an kamuy okkaypo
 あの新しい頭 ~を切る.SG て いる.SG 神 若者
 新しく髪を切りそろえた神の男性が <lit. 髪を切っている (切っている)>
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0226UT_35298AP)

例(150)は、髭の生えそろっている状態と生えそろっていない状態がどちらも kane an を用いて表されている。ここでは、髭によってその人物が年長であるか年少であるかが表現されている。例(151)も、同様の例 (年少の例) である。

- (150) rekomatu kane an kur ora rek kur poka
 ひげが生えそろっている て いる.SG 人 それから 髭 影 も
careaytare⁶¹ kane an kur utura hine ahup hine
 生えそろっていない て いる.SG 人 一緒にいる て 入る.PL て
髭のある男性が、<lit. 髭が生えそろっている男性が>
髭もまだ生えそろっていない人と一緒に入って来て
 (千葉大学 2015a : 115)

- (151) poniwnekur rekkur poka ciarehayta kane an pe
 年下の人 ひげ も 全く足りない て いる.SG もの
 年下の方はひげが生えそろっていない者が <lit. ひげが全く足りないでいる>
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0162KM_34692AB_34693ABP)

例(152)は、凶事の際の女性の姿の描写である。通常アイヌの女性の髪形はおかっぱ型であったが、凶事の際には髪を切らずに放置することが多い⁶²。ここでは髪が伸び、泣き続けてまぶたが腫れている様子が描写されている。

- (152) otop ne kor pe tapsutu kasi eociw kane an.
 髪 COP ~を持つ もの 肩 上 ~に刺さる て いる.SG
 sikrap emko kootukutke kane an menoko soyne.
 まつ毛 半分 埋まる て いる.SG 女 外へ出る.SG
 髪は肩に届くまで伸びていて、(泣き続けてまぶたが腫れ) まつげが半分埋まって

⁶¹ 音声は careaytare もしくは ciarehaytare のように聞こえる。例(151)ciarehayta と同じものか。

⁶² 「髪容は広く、肩口よりも長くすることを嫌い、たいていは、おかっぱ型で耳たぶから後頭部にかけて切りそろえていた。しかし、凶事の際にはその逆に幸せへの願をかける意味で放置することが多い。即ち、髪を切らずに伸ばすことへの異様さは神々の注目するところであり、その原因を神々に探索させてあえて噂にさせることでより早く凶事から逃れることになると思ったからである。」(トゥイタク2 : 121)

しまっているような女性が出てきた。

(国研コーパス：K8109171UP)

このことから、kane an は基本的には変化の結果継続あるいは単なる状態を表すが、「動詞(句)+kane an」の構文全体で主体の性質(属性)を表す傾向があり、常套句としての固定化と脱アスペクト的な現象が起きているものと考えられる。

4.2.4 小括

以上、4.2 では沙流・千歳方言における kane an の機能について考察した。kane an は、基本的には wa an と同じく変化の結果継続または状態を表すが、kane an の場合は主体の属性(ステータス)を積極的に表し、また、主体の動作・状態が何らかの比喩になる傾向がある。また、kane an は構文全体で常套句として固定化し、いわゆる形容詞的な機能をみせているものが散見され、脱アスペクト的な現象を見出すことができる。

4.3 hine an の分析

4.3.1 先行研究の検討

「hine an」は「接続助詞 hine+存在動詞 an」という構成である。hine an も、wa an と同じく知里(1973[1942]:503)では「結果態(resultative aspect)」の形式であるとされている。この接続助詞 hine は接続助詞 wa 同様、「～して」と訳される形式であるが、hine と wa の違いについて、田村(1996)は「日常会話では、前後の関係が密接で切り離せない場合、因果関係がある場合、前部が後部の方法を表す場合などには wa が用いられ、一つの事が起こったことを言い、その後で次のことが起こったという表現をするときに hine が使われる、というような使い分けがある。(田村 1996:190)」と記している。また中川(1995)も「前後の文がその順序で行なわれたことを示す。wa に比べると、前後の動作に因果関係や緊密性が少ない。(中川 1995a:331)」と記している。以下に沙流方言の例を示す(例(153)(154))。hine は「2つの事象を別々の、それぞれが1つの情報としての重さをもった事柄として表現する(田村 1988:54)」ことが、例(154)の hine の例と例(154)'の wa の例との比較にあらわれている。

(153) nea kur ek hine rewsi wa an.

例の人 来る.SG て 泊まる て いる.SG

例の人が来て泊まっている。

(田村 1988:54)

(154) te ta ipe=an hine ataye a=kar easkay kusu he?

ここで 食事する=4.S て 代金 4.A=~を払う できる だろう Q

ここで食べてお金を払うことができるんですか?

(田村 1988:54)

(154)' te ta ipe=an wa paye=an ro.

ここで 食事する=4.S て 行く.PL=4.S HOR

ここで食べて行きましょう

(田村 1988:54)

一方で、田村(1988, 1996)は「日常会話で接続助詞 wa が使われるような文脈でも、民話や神話の語りの中では多くの場合この hine が使われる(田村 1996:190)」「特に hine の性格によるものではなく、単に昔話口調ゆえの、wa の代わりに hine を用いる使い方もある(田村 1988:54)」とも述べており、口承文芸資料では wa と hine の区別が曖昧になるようである。

4.3.2 共起する動詞

沙流・千歳方言において、hine an と共起する動詞(句)を調査したところ、159 個収集された。動詞の一覧は本論文巻末の「付録」を参照されたい。

hine an と共起する動詞は変化動詞が多く、また、その場合のアスペクトの意味も wa an との差が見られないが、動作動詞と共起する例も一部あった。例えば、例(155)は動詞 wakkata 「水汲みをする」⁶³に hine an が付いているが、例(155)の文脈では「水汲みをする」動作は長期的な生活の中で繰り返される反復的動作であり、このような場合、hine は前節を受ける接続詞、動詞 an は補助動詞ではなく本動詞として解釈され、「泣きながら水を汲んで、暮らしていました⁶⁴」と訳されることがある。つまり、「wakkata hine an」は意味上動作継続を表しているが、それは hine と an が接続詞と本動詞として機能していることに起因するものであり、「変化の結果継続の表示を基本的な意味に持つであろうアスペクト形式 hine an の例外的機能」というわけではない。

(155) cis kor suke cis kor wakkata hine an

泣くて 料理する 泣くて 水を汲む て いる.SG

(叔父は) 泣きながら料理して泣きながら水を汲んでいました。

(千葉大学 2015b : 1544)

このような現象（非アスペクト形式としての解釈）は、kor an にも wa an にも見られることであり、「～して暮らしていた」とするか「～していた」とするかは訳者の意向に委ねられている。

次の例(156)も同様の例である。例(156)は動作動詞 apkas 「歩く」に hine an が後続した例であるが、この場合も前文脈を参照すると、他の村人が残した肉を得るために、主人公がシカなどの「解体の跡を探して歩いている」ことが、生活における反復的動作として描写されている。

(156) iri oka hunara=an kor apkas=an hine an=an a p

解体 後 探す=4.S て 歩く=4.S て いる.SG=4S ただが

解体の跡を探して歩いていたのですが

(AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 8)

hine an の用例中に多数見られたものは、コピュラ動詞 ne に hine an が後続する構文である。例(157)は物語冒頭、主人公が自らが何者であるかを語った部分になっている。散文

⁶³ wakkata は、kor an と共起する例はあるものの、wa an と共起する例はない。

⁶⁴ 動詞 an の意味として、「ある、いる、なる、暮らす」がある。

説話ではこうした始まり方はごく一般的であり、「a=ne hine an=an 私は～である」という表現がよく用いられる。例(158)は、物語中盤で神が自分の素性を明かす場面である。ここでも同様に、「a=ne hine an=an」という表現が用いられることがある。

(157) Tannesar sekor a=ye kotan or un kur

タンネサル と 4.A=~を言う 村 ところ ~に住む 人

a=ne hine an=an pe ne hike

4.A=COP て いる.SG=4.S もの COP だが

タンネサルという村に住むのが私でした。

<lit. 私はタンネサルという村に住む人である者だが>

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0201UT_35227AP)

(158) “tan menoko, asinuma anakne nep aynu a=ne ruwe ka somo ne

この女 私 TOP 何 人間 4.A=COP こと も NEG COP

upascironnup a=ne hine an=an ruwe ne a p

白狐 4.A=COP て いる.SG=4.S こと COP ただが

「これ、娘よ。私はどんな人間でもない。私は白狐の神であって

(平石 2003 : 22-23)

こうした例(157)(158)のような用法はアスペクト性を持たないものであり、ne 単独で用いる際とどのような違いがあるのかは明確には分からない。また、wa an を用いた同様の表現 (a=ne wa an=an) もあり、wa an を用いるか hine an を用いるかはその時々話者の判断に依るものと考えられる。

4.3.3 小括

以上、4.3 では沙流・千歳方言における hine an の機能について考察した。hine an は基本的には wa an と同じく変化の結果継続を表すアスペクト的性質を持ち、かつ、今回の調査では wa an との顕著な差異は見られなかった。「昔話口調ゆえの、wa の代わりに hine を用いる使い方もある (田村 1988 : 54)」という記述を先に挙げたが、口承文芸資料を対象とした分析の場合、wa an と hine an の対立は見出しにくいようである。

4.4 存在型アスペクト形式の複数使用

数は多くないが、存在型アスペクト形式が複数連続して用いられるケースがある。以下の例(159)～(162)を参照されたい。

- (159) asinuma ka kamuy katkemat a=koycarpa kor an=an wa an pe
 私 も 神 淑女 4.A=~を祀る て いる.SG=4.S て いるもの
 私だって神の淑女にお供えして暮らしていた<lit. (を)祀っていた>ものを
 (AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 3)

- (160) nina ne ciki nep nep an pe
 薪取り COP も 何 何 ある.SG もの
somo a no moymoyke=an kor an=an wa an
 NEG 座る.SG で 動く=4.S て いる.SG=4.S て いる.SG
 まきとりや色々なことを座ることなく働いていました。
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0161KM_34690AB_34691AP)

- (161) nitek or ta rew wa an wa
 木の枝 ところに とまる て いる.SG て
oro wa hoyupu kor an wa an.
 ところ から 走る.SG て いる.SG て いる.SG
 木の枝に飛んでとまって、そこから飛ぼうとしている⁶⁵
 (佐藤 2017 : 64)

- (162) i=parosuke kor oka hine an
 4.O=~の食事の世話をす て いる.PL て いる.SG
 <母や父が>私に食事を作ってくれていた
 (大谷 2003 : 114)

これらはいずれも、kor an(oka)に wa an または hine an が続いた形をとっているが、意味上 wa an や hine an は本来不要であり、話者が意図的に付加したものかそうでないかは判然としない。しかし、たとえこのようにアスペクト形式が連続したとしても、意味の重なりが生じることはないと考えられる。例えば例(159)ならば、次の例(159)'のように「a=koycarpa kor an=an」としても文法的意味的に問題は無い。

⁶⁵ 動詞 hoyupu は通常「走る」と訳されるが、ここでは鳥が飛ぶことを指している。

(159)' asinuma ka kamuy katkemat a=koycarpa kor an=an pe
 私 も 神 淑女 4.A=~を祀る て いる.SG=4.S もの
 私だって神の淑女にお供えして暮らしていた<lit. (を)祀っていた>ものを
 (例(159)からの作例)

例(159)～(162)に共通するのは、kor an(oka)の an(oka)が動作主の人称を表示しているのに対し、wa an や hine an の an は三人称表示であるということである（但し、例(161)については動作主も三人称のため形態的区別はない）。つまり、kor an はアスペクト形式とみなされるが、後続の wa や hine は直前の文を受ける接続助詞として分析し、直前の動詞句（または文）で表される状況を an が表示していると考えられる。

4.5 本章のまとめ

以上、第4章では、アイヌ語沙流方言・千歳方言における kor an、wa an、kane an、hine an の意味機能を考察した。

4.1 では kor an と wa an について述べた。

まず非状態性動詞について、動作動詞は、kor an では動作継続か動作の習慣性・多回性を表す。限界性をもたない動作動詞は基本的には wa an とは共起しない。変化動詞は、kor an では変化の進行過程、wa an では変化の結果継続を表す。kor an が習慣性・多回性を表す例についてはこれまで一部の動詞で認められているものであったが、今回のデータを見る限りでは、動詞の性質に関わらずひろく見られる現象である。

動作動詞の中でも、いわゆる二側面動詞や、認識・言語・表現活動を表す動詞、思考・感情・知覚動詞の一部には、動作と変化の両面が現れるものがある。kor an では動作性が前面に現れて、動作継続や習慣性・多回性を、wa an では変化性がより前面に現れて、変化の結果継続を表す。先行研究で指摘されていた nukar の能動性の対立も、これに含まれるものと考えられる。

状態性動詞の場合、同じ動詞でも限界的に捉えるかどうかによってアスペクト的意味が変化する。kor an は、限界性が問題とならない場合には動作の習慣性・多回性、単なる状態を表し、問題となる場合には変化の進行過程を表す。wa an は、限界性が問題とならない場合には単なる状態を、問題となる場合には変化の結果継続を表す。先行研究では、wa an が状態性動詞と共起した場合に、その状態の一時性が現れ得ることが指摘されていたが、今回のデータを見ると、一時性の現れは段階的なものであり、恒常的性質を表す場合もある。

また、kor an、wa an は、具体的な存在を要求する形式である。それは、特定時の運動の基本的意味またはポテンシャルな事態を表すのに限られること、an が人称表示を要求すること（an の非文法化）、否定表現と共起しにくいこと、未来の事態を推量する場合に用いられにくいことから説明され得る。ここから、kor an、wa an は存在の様相を表すのが

第一義であり、事態の内的時間にかかわるアスペクト的意味はそれに付随するものと考え
る。

kane an は、基本的には wa an と同じく変化の結果継続または状態を表すが、kane an の
場合は主体の属性（ステータス）を積極的に表し、また、主体の動作・状態が何らかの比
喩になる傾向がある。また、kane an は構文全体で常套句として固定化し、いわゆる形容
詞的な機能をみせているものが散見され、脱アスペクト的な現象を見出すことができる。

hine an は、基本的には wa an と同じく変化の結果継続を表すアスペクト的性質を持
ち、かつ、今回の調査では wa an との顕著な差異は見られなかった。物語の語りにおいて
は wa の代わりに hine を用いる場合があることが先行研究では指摘されており、口承文芸
資料を対象とした分析の場合、wa an と hine an の対立は見出しにくいものと思われる。

これらの存在型アスペクト形式は、複数連続して用いられるケースがあるが、話者が意
図的に付加したものかそうでないかは判然としない。しかし、アスペクト形式が連続した
としても、意味の重なりが生じることはないと考えられる。

第5章 助動詞 a と助動詞 aan

本章では、存在動詞 a「座る」を語彙的源泉とする助動詞 a と助動詞 aan を中心に扱う。5.1 では助動詞 a、5.2 では助動詞 aan について述べる。5.3 で本章のまとめを行う。

5.1 助動詞 a

5.1.1 先行研究の検討

a については、金田一 (1993 [1931])、知里(1974[1936],1973[1942])、田村(1960, 1988a)⁶⁶、佐藤(2006,2007,2008)などがその機能について記述している。

金田一(1993[1931])は、「a は「完了態 (perfective) ⁶⁷」を表す。『「ちゃんと…した』意、即ち完了の様な意味を表わす。而もその結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある。(金田一 1993[1931] : 293)」と記している。知里(1974[1936])は、a が「動作の完了又は過去を示していることが多い (知里 1974[1936] : 157)」とし、a を「確説法 (文の内容を既定の事実として確説するもの) (知里 1974[1936] : 157)」をあらわすムードの形式とみている⁶⁸。田村(1988)では、「a は、今、問題にされているときよりも以前に起こったことを表わす「～した」を表す。現在からみて過去のできごとであるだけでなく、それ以後のできごととも問題にされているときに、この助動詞は用いられる。(田村 1988 : 41)」と説明されている。例えば例(163)の場合、例文の解説にあるように、食べるという動作が過去のものであるというだけではなく、「食べてしまったから包丁はいらない」という気持ちも表されているようである。

(163) ku=mimaki ani kapu ku=kar wa k=e _____ a wa.
1SG.A=歯 で 皮 1SG.A=~をむく て 1SG.A=~を食べる a FIN

私の歯で皮をむいて食べたよ

(りんごの皮をむくために包丁を持って行って渡そうとしたら、こう言った。

もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち)

(田村 1988 : 41)

また、田村(1960)では、a が発話時以前と発話時現在との「比較」をあらわす要素であることにも言及されている。例えば例(164)では、雨が降ったときと、涼しくならなかったときが「比較」の関係にあるという。

⁶⁶ 田村(1960)は、「参考文献」の田村(福田)すず子(1960)を指す。

⁶⁷ 態の訳語としては aktionsart, aspect を用いている。

⁶⁸ 知里(1973[1942])にも、a が「態を表すというよりは寧ろ法を表している」と見られる(知里 1973[1942] : 503)」とある。

(164) apto as a korka sirmeman ka somo ki.
 雨 降る a けれど 涼しい も NEG する
 雨が降ったけれど涼しくならなかった

(田村 1960 : 347)

そして参考として例(165)を挙げ、この場合は「比較する時がないので、昨日のことも a を用いない (田村 1960 : 347)」と説明している。

(165) numan apto as.
 昨日 雨 降る
 「昨日雨が降った」

(田村 1960 : 347)

佐藤(2008)⁶⁹は、「a は「～た」と訳することができるが、単純な過去の意味だけを表すのではなく、ある行為が既に行われたかまだ行われていないのかを現在時点との密接な関係付けにおいて述べる「完了」の機能を持っている (佐藤 2008 : 78-79)」と説明している。例えば例(166)については、「その記憶が今も生生しく残っている」というようなニュアンスで語られているようである (佐藤 2008 : 187)」と述べている。また、現在に与えている影響は「漠然とした、間接的なもの (佐藤 2008 : 188)」であるという。

(166) k=onaha k=unuhu ku=kasuy wa poronno ku=nepki a wa.
 1SG.A=父 1SG.A=母 1SG.A=~を手伝う て たくさん 1SG.S=働く a FIN
 「私の父母を私は手伝ってたくさん働いたよ。」

(佐藤 2008 : 183)

これらの先行研究の記述に関して、以下、「完了」の定義について (5.1.1.1)、過去でも完了でもない場合に使われる a について (5.1.1.2) の二部に分けて、問題提起を行う。

5.1.1.1 「完了」の定義について

アイヌ語は無テンス言語であるため、そもそも無標の動詞でも過去の事態を表すことができる。例(163)(再掲)では動詞 e「～を食べる」に a が後続して「食べた」と過去の出来事として解釈されているが、a がなかったとしても、状況判断で過去形として解釈することは可能である。例(166)(再掲)も同様に、a がない場合でも、動詞 nepki「働く」が「働いた」という過去の出来事を表していると解釈することができる。

⁶⁹ 佐藤(2006,2007,2008)において a の機能に関する記述を行なっているが、以下では各記述の総括に相当すると考えられる佐藤(2008)を参照した。

(163)(再掲) ku=mimaki ani kapu ku=kar wa k=e a wa.
 1SG.A=歯 で 皮 1SG.A=~をむく て 1SG.A=~を食べる a FIN

私の歯で皮をむいて食べたよ

(りんごの皮をむくために包丁を持って行って渡そうとしたら、こう言った。
 もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち)

(田村 1988a : 41)

(166)(再掲) k=onaha k=unuhu ku=kasuy wa poronno ku=nepki a wa.
 1SG.A=父 1SG.A=母 1SG.A=~を手伝う て たくさん 1SG.S=働く a FIN

父母を私は手伝ってたくさん働いたよ

(佐藤 2008 : 183)

a が「完了」として解釈されてきたのは、それが単に過去のことを言い表すのではなく、過去の場面が例(163)(再掲)の「もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち(田村 1988 : 41)」や、例(166)(再掲)の「その記憶が今も生々しく残っている」といった形で、現在にまで引き続けていると考えられてきたからである。ここで言う「完了」とは、perfect すなわち「過去の出来事の結果が現在にのこっていることをいいあらわす(コムリ-1988[1976] : 25)」ものである。佐藤(2007b,2008)は、wa an が動作パーフェクトを表わさない一方で、a が動作パーフェクトを表わしうると述べている。

確かに、そうしたニュアンスが a のアスペクト的機能に起因する可能性は排除しきれない。しかし佐藤(2008)が、以下の例(167)(168)については「現在との関係が不明瞭であり、なお一考を要する(佐藤 2008 : 188)」としているのも事実であり、a が perfect を示すのかどうかは検討の余地が残されている。

(167) monpe tup ka k=us a korka yasyaske wa eparunparun.
 もんぺ 二つ も 1SG.A=~を履く a けれど ぼろぼろに破れる て ぶらぶら垂れ下がる

もんぺを二つも私は履いたけれど、ボロボロに破れてぶらぶら垂れ下がった。

(佐藤 2008 : 188)

(168) en=sam ta an a okkaypo kemaha k=oterke.
 1SG.O=側 に いる.SG a 若者 足 1SG.A=~を踏む

私のそばにいた若者の足を私は踏んだ。

(佐藤 2008 : 188)

また、a は例(163)や例(166)のように終助詞 wa を伴って文末相当の位置にあらわれるほか、例(164)(再掲)のように逆接の接続助詞を伴う場合が多くある。

(164)(再掲) apto as a korka sirmeman ka somo ki.
 雨 降る a けれど 涼しい も NEG する
 雨が降ったけれど涼しくならなかった

(田村 1960 : 347)

このとき、a が perfect であるならば、雨が降ったという事態が現在において何らかの<痕跡>や<効力>を残していることになるが、だとすれば逆接の接続助詞とは本来共起しにくくなるのではないだろうか。たとえば例(169)のように、a は現在の事態とは逆に相当するような過去の事態を表すことが多くあり、現在に<痕跡>や<効力>を残していることを積極的に表す形式とは言えない。本論文ではこうした a のアスペクト的意味を、perfective であるとみている。詳しくは 5.1.2 で述べる。

(169) esir pak anakne upas ka isam a p
 さっきまで TOP 雪 も ない a だが
 tane upas as kor an wa.
 今 雪 降る て いる.SG FIN
 さっきまでは雪もなかったのに、今雪が降っているよ。

(佐藤 2008 : 184)

また一方で、「完了」の定義に関しては、先行研究の記述において perfective と perfect が混在しているという問題がある。金田一(1993[1931])は、「完了態(perfective)」の項目名のもと、a について『「ちゃんと…した」意、即ち完了の様な意味を表わす。而もその結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある (金田一 1993[1931] : 293)』と記しているが、項目名で perfective としている一方で、「結果の今まで及んでいるような心持」という perfect の性質を a に認めている。実際のところ、perfective と perfect は研究者によって定義や訳語の扱いがまちまちであり、ここでも金田一(1993[1931])は perfect の意味で“perfective”という用語を用いていた可能性もある⁷⁰。しかし、a についての項目を見ると、a の例文に加え次の例(170)のような aan(rokoka)⁷¹の例文も含まれており、perfect を表すのが a の機能なのかどうか断定できない。つまり、a が『「ちゃんと…した」意 (金田一 1993[1931] : 293)』を表すにしても、「その結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある (金田一 1993[1931] : 293)」のは a ではなく aan であるという可能性も否定できないのである。

⁷⁰ Shibatani(1990)は perfect の意味で perfective という用語を用いている。

⁷¹ aan については 5.2 で述べる。

- (170) Siramkutturi ciki ayke Oyna kamuy kene inunpe kar rok oka.
よく考えて見る すると オイナ神 はんの木 炉縁 ~を作る rok oka
よくよく考えて見たるにオイナ神がはんの木の炉ぶちを作ったのであった。
(金田一 1993 [1931] : 293)

しかしながら、実は a を perfective を表す形式であると定義したとしても、これだけでは説明が不十分なのである。先行研究では触れられていないが、過去 (past) の事態でもなければ perfective でも perfect でもない a の用例がある。これについて、次の 5.1.1.2 で述べる。

5.1.1.2 過去でも完了でもない場合に使われる a について

a が過去でも完了でもない事態を表す場合に用いられることがある。以下の例(171)は物語の主人公が自身の素性について語る場面であり、例(172)は川の性質について語っている場面である。例(171)については、主人公(私)が「湧別川の中流の者」であることは時間の影響を受けない性質であるため、ここで a が用いられる理由が何であるのかという疑問が生じる。例(172)についても同様に、石狩川が増水すると沼のような大きな川になるとするのはその川のもつ性質である。

- (171) Yupet emko un aynu a=ne a p sitturaynu=an hine
湧別川 中程 の 人間 4.A=COP a だが 道に迷う=4.S て
oro ta ek=an ruwe ka a=erampewtek ruwe ne wa
そこに 来る.SG=4.S こと も 4.A=~がわからない こと COP て
mak a=ye uske ne ruwe ne ya a=kopisi akusu,
どう 4.A=~を言う ところ COP こと COP か 4.A=~に尋ねる すると
私は湧別川の中流の者だけれども、道に迷って、
どこに来たのかわからないので、何という場所なのかと、たずねますと
(ア音 6 : 30)

- (172) a=kor Iskar anak pon uske ta anak nay pakno an oraun,
4.A=~を持つ 石狩川 TOP 小さい とき に TOP 沢 ほど ある.SG そして
poro kor anakne to neno kane an poro pet ne p ne a p,
大きくなる と TOP 沼 のような 大きい 川 COP もの COP a だが
pet sat hine nay neno kane an rapok ne hike
川 乾くて 沢 のような ~の間 COP だが
petkasu=an hine okusne wa yan=an ruwe ne.
川を渡る=4.S て 向こう側 から 上がる=4.S こと COP

石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、
水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、
その時は川が水がなくなって沢のようになっている時でしたが、
私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。

(ア音 5 : 77)

本項目では、a が直接証拠性を標示する形式であることを提案し、そのために上記のような「例外的な a」の使用が成り立つことを説明する。そして、a はテンス的意味 (=past)・アスペクト的意味 (=perfective)・証拠性 (=direct evidential) を表す複合形式であり、そのときどきによって表出する意味が変化することを結論として述べる。

5.1.2 助動詞 a のアスペクト的意味

5.1.1.1 で述べたように、a は perfect ではなく perfective を表すというのが本論文の主張である。これに関して、他言語での例を参照してみる。

現在とは断絶した過去を表す形式には、日本語の東北諸方言のタッタ形がある。タッタ形とは、「見タッタ」「行タッタ」などのように「動詞+タッタ」で表される形式である。竹田(2020)は岩手県盛岡市方言のタッタ形について、同じく過去を表すタ形と比較し、その特徴を以下のようにまとめている。

- ①発話時現在において出来事が眼前に存続している場合、タッタ形は使用できず、タ形しか用いられないが、存続していない場合にはタッタ形が用いられる。
- ②発話時現在において出来事の結果が残存している場合はタ形が用いられ、残存していない場合にはタッタ形が用いられる。
- ③以上から、盛岡市方言のタッタ形は、テンス的には出来事が過去であることを表す形式、アスペクト的には出来事を完成的にとらえる形式として位置づけられる。
- ④タッタ形には「出来事と発話時現在との断絶性」という特徴が認められる。これは、過去の出来事を完成的にとらえるところから発展的なムード性であると考えられる。
- ⑤タッタ形の「出来事と発話時現在との断絶性」というムード性を最も表面化させた用法が、タッタ形の「回想」用法である。
- ⑥タッタ形の出自は、過去の継続的な出来事を表す動詞+テアッタであるが、現在では継続というアスペクト的意味を失い、代わりに現在と切り離された過去の出来事というテンス的意味、さらには回想というムード的意味をもつようになった。語形の変化とともに意味用法が変化した点で、文法化の一例と考えられる。

(竹田 2020 : 116)

上に引用したタッタ形の諸特徴は、アイヌ語の a の使用場面に共通するところが多い。ま

ず、①発話時現在において出来事が眼前に存在せず、②出来事の結果も残存していない⁷²。ここから、③テンス的には過去であり、アスペクト的には完成相すなわち perfective といえることができる。そして、a が現在と対比関係にある過去の場面を表すことから、a は④⑤「出来事と発話時現在との断絶性」を表す形式だといえる。そして、a には過去の場面を回想するニュアンスがあり、これまでの研究ではそれがアスペクト性 (完了) から生じるものと考えられていたが、タッタ形を参考とすれば⑤「出来事と発話時現在との断絶性」から生じるムード性 (=「回想」) と位置づけることが可能になる。

また、タッタ形のほか、現在とは断絶した過去を表す形式には韓国語の -essess-ta がある。高田(2008)によれば、タッタ形と -essess-ta は「基本的類似点として①現在との断絶性、②体験・目撃性を持つ (高田 2008 : 34)」という。ただし、-essess-ta は過去のある時点に先立つ出来事を表す「過去パーフェクト」の用法を持つようであり、この点ではタッタ形とは異なっている。

a の場合、管見の限り、過去パーフェクトを積極的に示すとは考えにくく、この点で -essess-ta とは異なっている。また、タッタ形と比較すると、a は例(173)のように「もう食べた」のような表現が可能であるが、副詞 tane は必ずしも日本語の「もう」に相当する語彙ではない。tane は文脈によって、「今」「今や」「今すぐ」「もう」などと訳されるのだが、佐藤(2008)は、tane は「今現在」を軸としつつも、「今より少し前」「今より少し後」を含めた比較的広い「今」を意味すると指摘し、「あまり tane を「もう」と同一視し過ぎないほうが良い (佐藤 2008 : 185)」⁷³としている。次の例(173)の場合も、過去の一時点を指していると解釈することもできる。

このような点で、a は perfect ではなく perfective、すなわち「内的な時間構成とは無関係に、ひとまとまりのものとしてとらえられる場面をさししめす (コムリー1988[1976] : 25)」ものと見ることができる。

(173) tane ku=ipe _____ a wa.

今 1SG.S=食事する a FIN

今 (さっき) 私は食事をしたよ

(佐藤 2008 : 185)

ところで、タッタ形と類似の特徴が指摘されているものに「ケ形」という形式があり、竹田(2020)によれば、「山形市方言のケは、話し手が発話時までその出来事を認識したことを明示する、認識のモダリティ epistemic modality を表す形式であると考えられる。中でも

⁷² たとえば、「隣からきれいな水蜜モラッタッタ。」と言うと、それは「水蜜は今はいない (竹田 2020 : 111)」ことを表し、「もらう」動作の結果が残存していないことを表す。

⁷³ tane について、佐藤(2008 : 185)は、???esir tane ku=ipe a wa 「さっきもう食べた」や、???nisatta tane ku=hosipi kusu ne wa 「明日もう帰る」のような表現は恐らく不可能であるとしている。

証拠性 evidentiality に関わる形式であり、他者からの伝達などによるのではなく、話し手が直接に目撃・体験した出来事を根拠とする。また、当該方言のケは、回想・気づき・思い至り・驚き・意外性などのニュアンスを伴うことが多い（竹田 2020:144）。これと a を比較した場合、「回想・気づき・思い至り・驚き・意外性などのニュアンス」は a には積極的に認められず、これらの性質を表すのは 5.2 で扱う aan のほうである（なお、aan については間接証拠性を表すというのが本論文の主張である。5.2 参照。）。

a が用いられた構文として、「動詞 a 動詞 a」で動作の多回性を表す構文があるが、これも a が動作を完結的に表して連続させることによって、多回性を表しているものと考えられる（例(174)）。

- (174) orano oro ta an wa cis a cis a ayne
 それからそこ に いる.SG て 泣く ITR 泣く ITR あげく
 それからそこにて、さんざん泣いたあげく
 (ア音 1:20-21)

a のアスペクト性は、語りの中での機能にも観察される。a が後部に形式名詞 p 「もの、こと」⁷⁴や接続助詞 korka 「～けれど」、wa 「～て」などを伴い、文末相当の位置にあらわれる際、物語中ではそれが場面や話題、動作主の転換点になる傾向がある⁷⁵。これは、a が perfective を表すこと、つまり、事態を完結したものとして表すことによるものと考えられる。例(175)～(178)は、動作主は語り手のみであるが、時間経過による場面の切り替えがある例である。例(175)～(177)のように、下線部直後に「今は」「ある時」「ある晩」などの時間を明示する副詞が用いられる場合もある。

- (175) a=ekasi i=resu hine oka=an a p
 4.A=おじいさん 4.O=~を育てる て いる.PL=4.S a だが
 tane ponno poro=an wa inkar=an siri ene an hi
 今 少し 大きくなる=4.S て 見る=4.S 様子このような ある.SG こと
 私はおじいさんに育てられていたのですが、
 今はもう、やや大きくなって、見ますと、このようなことに気付きました。
 (ア音 2:48)

⁷⁴ p は接続助詞的に働くことも多く、a p は「～したが」と訳されることが多い。p は korka 「～したが」に似ているが、korka は専ら逆接として機能するのに対し、p のほうは前提となる話題を示す場合にも用いられる。

⁷⁵ ayne 「～あげく」や akusu 「～すると」や awa 「～したところ」といった、a を語構成に含む接続助詞も同様の傾向がある。(ayne : a-hine 「a-して」、akusu : a-kusu 「a-ので」、awa : a-wa 「a-して」)

- (176) nep ne yakka a=esirkirap ka somo ki no oka=an pe ne a p
 何 COP でも 4.A=~に困る も NEG するで いる.PL=4.S もの COP a だが
 sine an ta mak ne wa ne ya Iskar turasi arpa=an rusuy hine
 あるとき どう COP て COP か 石狩川 に沿って 行く.SG=4.S DESID て
 私たちは何不自由なく暮らしていました。
 ある時、どうしたわけだか石狩川をさかのぼって行きたくなりました。
 (上田トシの民話 1 : 36)

- (177) ipe ka a=nukuri wa an=an a p, sine ancikar
 食事 も 4.A=~できない て いる.SG=4.S a だが ある 晩
 wentarap=an kusu nea onne nispa itak hawe ene an hi
 夢を見る=4.S ので あの年を取る 長者 言う声 このような ある.SG こと
私は<恋煩いで>食べる気にもなれずにいました。ところが、ある晩、
 私^はは夢を見て、あの老人がこう言いました。
 (ア音 5 : 60-62)

- (178) yam patek a=e kusu somo hetuku=an pe ne kunak
 栗 だけ 4.A=~を食べる ので NEG 成長する=4.S もの COP ように
a=ramu a korka hetuku=an wa poro hekaci a=ne hine
 4.A=~を思う a けれど 成長する=4.S て 大きい 男の子 4.A=COP て
クリだけを私は食べていたので大きくならないと思っていましたが
 <私は>成長して大きな男の子になって
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0152KM_34639ABP)

次の例(179)は、動作主の切り替えも含む場面転換の例である。

- (179) pet turasi hene arpa kusu iki hi ne kunak a=ramu a p
 川 に沿って か 行く.SG ので すること COP ように 4.A=~を思う a だが
 pet or un ran pe ne kusu nenos ran=an a p
 川 ところへ 下りる.SG もの COP ので 同様に 後ろから 下りる.SG=4.S a だが
 pet parur ta pet cicay ta ran kor
 川 へりに 川 縁 に 下りる.SG と
tap aynu ne wa os ran=an humi ne kunak a=ramu a p
 今 人 COP て 後から 下りる.SG=4.S 感じ COP ように 4.A=~を思う a だが
 worosma akusu poro ciray ne hine wotcakacaka hine arpa

水に落ちる すると 大きい イトウ COP て 水をバチャバチャする て 行く.SG
川を逆上りかして行くためにそうした<出かけた>と、思っていたのに
 <兄は>川に下りるので、同じ様に後から下りていったところ
 <兄は>川のへりに、川の縁に下りると、
今の今まで<兄が>人間であって、その後を私が下りてきたように思っていたのに
 <兄は>水の中に入ると大きなイトウになって水をバチャバチャさせてのぼって
 いく

(アイヌの民話 1 : 107)

5.1.3 助動詞 a と直接証拠性

a には、テンス的意味 (=past) からもアスペクト的意味 (=perfective) からも解放された用法がある。先に挙げた例(171)(再掲)と例(172)(再掲)は、いずれも時間の影響を受けることのない恒常的性質であり、a がなかったとしても同じような文意をあらわすことが可能だと思われる。しかし、無標の場合と違いがあるとすれば、a を伴った場合には直後の文と何らかの対比関係があるという点である。例(171)(再掲)は湧別の中流に住む者にもかかわらず、全く別の場所にいるという場所の対比性がある。例(172)(再掲)は水が増えた場合と水がなくなった場合との対比である。

(171)(再掲) Yupet emko un aynu a=ne a p sitturaynu=an hine
 湧別川 中程 の 人間 4.A=COP a だが 道に迷う=4.S て
 oro ta ek=an ruwe ka a=erampewtek ruwe ne wa
 そこに 来る.SG=4.S こと も 4.A=~がわからない こと COP て
 mak a=ye uske ne ruwe ne ya a=kopisi akusu,
 どう 4.A=~を言う ところ COP こと COP か 4.A=~に尋ねる すると
私は湧別川の中流の者だけれども、道に迷って、
 どこに来たのかわからないので、何という場所なのかと、たずねますと
 (ア音 6 : 30)

(172)(再掲) a=kor Iskar anak pon usketa anak nay pakno an
 4.A=~を持つ 石狩川 TOP 小さい とき に TOP 沢 ほど ある.SG
 oraun, poro kor anakne to neno kane an poro pet ne
 そして 大きくなる と TOP 沼 のような 大きい 川 COP
p ne a p,
 もの COP a だが
 pet sat hine nay neno kane an rapok ne hike
 川 乾くて 沢 のような ~の間 COP だが

petkasu=an hine okusne wa yan=an ruwe ne.
川を渡る=4.S て 向こう側 から 上がる=4.S こと COP

石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、
水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、
その時は川が水がなくなって沢のようになっている時でしたが、
私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。

(ア音 5 : 77)

こうした対比関係は、過去の事態の場合に顕著にあらわれる⁷⁶が、過去の事態の場合は、aのアスペクティブ的性質 (=perfective) からくるものともいえる。しかし、それ以外の恒常的な性質について述べる場合にも対比性があらわれていることを考えると、アスペクトという観点からは説明しきれない。

ここで、aが直接証拠性(direct evidentiality)を示す形式であるとして説明を試みる。直接証拠のマーカは、話者の確信、内的状態、知識、信念などに関わる場合がある (Aikhenvald2004 : pp.160-162, 190-191, 373-376)。金田一(1993[1931])はaが「『ちゃんと…した』意 (金田一 1993[1931] : 293)」をあらわすこと、知里(1974[1936])は「文の内容を既定の事実として確説するもの (知里 1974[1936] : 157)」とみている。このようなaのモーダルな側面は今まであまり問題にされてこなかったが、本論文ではこの点に着目したい。

aには基本的に、当該の事態の確信性を強めることで、後続文との対比を際立たせる作用があると考えられる。そしてまた同時に、話者の内的状態 (例(171)) や知識 (例(172)) を対比の対象として挙げるためにaが用いられていると捉えることができる。

なお、例(171)については、同じ物語の中に似た構造の例(180)があるが、直後の文の「狩りに出かけた」というのは日常的な状況を述べているに過ぎないため、対比性がなく、aが現れていないのだと考えられる。

(180) Yupet emko un aynu a=ne hine
湧別川 中程 の 人間 4.A=COP て
iramante kus ekimne=an akusu sitturaynu=an.
狩猟する ために 山へ行く=4.S すると 道に迷う=4.S

私は湧別川の中流の者で、
狩をしに山へ行きましたところ、道に迷ってしまいました。

(ア音 6 : 38)

⁷⁶ 用例(164)参照。田村(1960)の「比較」は過去と現在との比較を意味しているが、本論文における「対比」はその限りではなく、時間関係がない場合でもaは対比関係をあらわすという認識である。

以下の例(181)(182)も同様に、対比関係がある。例(181)は「自身の弟は立派な人物であるから、これくらいの（価値の）品物を出してきても、話に応じるわけがない」という意味で発している言葉である。弟の人間性と、品物の価値との対比が見てとれる。また、自分の弟が立派な人物であるという話者の信念があらわれているとみられる。例(182)は下線部全体がある種の挿入文のようになっているが、「村の中央には村長が住み、年下のほうは上手に住んでいる」という話者の知識が、発話時の眼前の風景と対比されている。

- (181) nispa rak pe aynu rak pe a=akihi ne a p
 長者らしいもの 人間(男)らしいもの 4.A=弟 COP a だが
 ene pak an pe ani a=hopunire yakka
 これほどある.SG もので 4.A=~を起こすても
 hopuni kuni p ka somo ne kusu
 起きる ようにものも NEG COP ので
 na akkari an pe a=aniyar yak pirka
 もっとより ある.SG もの 4.A=~を人に持たせると 良い
弟は長者であり、男であるものを、<lit. 長者であるもの、男であるものが私の弟な
 のだが>
 これくらいのもので起こしても起きるはずがないから、
 これ以上のものを持たせて寄越せ

(ア音 6 : 50)

- (182) tomari or ta cip a=yanke hine kotan or ta arpa=an
 舟着場 ところに 舟 4.A=~をあげる て 村 ところに行く.SG=4.S
 akusu kotan noski kiyanne kur kotankorkur ne
 すると村 中央 年上の 人 村長 COP
poniwne kur kotanpa ta an pe ne a p
 年下の 人 村の上手に いる.SG もの COP a だが
 eun patek supuya at hine
 そこへ だけ 煙 のぼる て
 舟着き場に舟を上げて村に行ったところ
村の中央(に住む)年上の方が村長^{むらおさ}で、年下のほうは村の上手に
その(二軒の家の)方にだけ煙が上がって

(アイヌの民話 1 : 153-154)

金田一(1993[1931])や知里(1974[1936])が指摘していたモーダルな側面は、話者の確信

と関連するものであり、これは過去の出来事について述べる場合でもあらわれている。服部編(1964)『アイヌ語方言辞典』の「確かに」という項目(服部編 1964: 302)では、「たしかに見かけました (I'm sure I saw it.)」に対応するアイヌ語文としていくつかの方言の例がある中で、沙流方言(例(183))、帯広方言(例(184))において a が使用されている。

(183) sonno ku=nukar a p un. (沙流)

本当に 1SG.A=~を見る a もの FIN

(服部編 1964: 302)

(184) nekon an akkay ku=nukar a wa. (帯広)

どう ある.SG しても 1SG.A=~を見る a FIN

(服部編 1964: 302)

但し、同項目の他方言の用例には a は無く、例(183)も sonno 「本当に」という副詞が用いられていることから、必ずしも a だけが確信性を担っているとはいえない。また、a が付加された場合と無標の場合とで完全な対立があるとも言えず、義務的な形式であるとはいえないのだが、a の機能を考えるうえでは重要な手掛かりになると考える。

5.1.4 諸問題

5.1.4.1 「a noyne」について

接続助詞 noyne 「～らしい、～ようだ」は、「様子や状況から判断して推測することを言うのに使われる(田村 1996: 436)」。noyne と a が共起して、a noyne 「～たらしい、～たようだ」といった形で用いられるときがあるが、この場合、a を直接証拠のマーカールとみなすと、noyne の推測用法に反してしまう。この場合、a は直接証拠ではなく、現在とは切り離された過去を表すものと考えられる。

(185) i=ye p koraci pon nay an hine

1SG.O=~を言う もの ように 小さい 沢 ある.SG て

nay turasi arpa san sinenne ruwehe ne a noyne siran

沢 に沿って 行く.SG 下りる.SG ひとりで 跡 COP a らしい 様子だ

huskotoy wa ene iki kor an pe ne a noyne

昔 から このように する て いる.SG もの COP a らしい

rukocihi cininanina hine siran hine

足跡 びっしりついている て 様子だ て

言われたとおり、小沢があって、

沢づたいに上り下りしてひとりで歩いた跡らしくなっています。<lit. ?沢に沿って

行って下りた跡だったらしい様子だ。>

ずっと前からそのように行き来していたらしく<lit. そのように行き来しているものだったらしく>、足跡が、びっしりついています。

(ア音3 : 8-10)

- (186) asinno anak nep ka a=rayke a katu ka isam
新しく TOP 何 も 4.A=~を殺す a 様子 も 無い
husko no anak ison kur an usi ne a noyne
昔に TOP 狩りが上手い 人 いる.SG ところ COP a らしい
kamuy ka yuk ka sapaha piciwpone anak poronno inawcipa or ta
熊 も 鹿 も 頭 白骨 TOP たくさん 祭壇 ところに
oka siri iki ka asinno nep ka a=rayke a katu ka a=erampewtek
ある.PL 様子 する も 新しく 何 も 4.A=~を殺す a 様子 も 4.A=~がわからない
新たには何も獵があった様子はないのですが
昔は狩りの名手が住んでいたようで<lit. 狩りの名手がいる所だったらしく>
祭壇にはたくさんの熊や鹿の頭部の白骨があるのですが、最近は何も獵があった
様子がありません。<lit. 最近は何も殺した様子もわからない>

(千葉大学 2015c : 1746)

例(187)は、utarpake「立派な人物である」という性質が述べられ、その人物の現在の状態を説明しているように読める。しかし、前文脈を参照すると、この人物は既に亡くなっており、この場面では神の姿で現れている。そのため、ここでは utarpake ne a noyne「(元は)立派な男性(人物)であったらしい」と解釈し、過去において utarpake であったことを述べていると考えるのが適当だと考えられる。

- (187) hemanta san hine ape sam ta san wa inkar=an akusu
何 下りる.SG て 火 側 に 下りる.SG て 見る=4.S すると
aynu ka utarpake ne a noyne an pe
人 も 立派な人物 COP a らしい ある.SG だが
何かが下って来て、火の近くへと下って来たのを見ると
男のなかでも特に立派な男性であるようで

(千葉大学 2015a : 296)

5.1.4.2 「a yak/yakne/yakun/yakka」について

a は、接続助詞 yak、yakne、yakun、yakka⁷⁷と共に用いられることがある。yak、yakne、yakun、yakka はいずれも仮定条件を表し、このうち yak、yakne、yakun は「～ならば、～すれば、～すると、～したら」などと訳される。yak と yakne の間には意味の差異はない(田村 1996 : 836、中川 1995a : 393)。yakun については「必ずしも仮定条件とは限らず、事実を認め、納得した上で、「そうであるなら」「それなら」「その場合は」のような表現にも用いられる(田村 1996 : 837)」という記述がある。一方、yakka は「(たとえ)～しても」のような逆接仮定条件を表すが、「～けれども」のような単なる逆接として用いられることもある。

a との共起について、辞書を参照すると、a yakne 「.....デ有ルナラバ ph. If it were. If he were. (バチラー1981 : 66)」、a yakka 「～だったが(萱野 1995 : 36)」とある。また、a yak 「果して…ならば」と力を入れる仮定条件(金田一 1993 [1931] : 323)」といった記述からは、a によって強意の意味が付与されることが推測される。これらの記述をまとめると、以下の表 6 のような対応になる。

yak	～すれば、～したら、～すると	a yak	果たして～ならば
yakne	～すれば、～したら、～すると	a yakne	～であるならば
yakun	～したら、～する/したならば、 ～する/したのだとすれば	a yakun	(記述なし)
yakka	～しても、～する/したけれども	a yakka	～けれども、～だったが

表 6 yak/yakne/yakun/yakka と a の共起 (先行研究)

それぞれの対応を見る限り、a が加わったとしても大きな意味の差は生まれていない。今回収集したデータを見ると、まず a yak については次のような例(188)がある。この場合、a yak の a は、次の rokoka aan と呼応しているように見える。aan は、後の 5.2 で述べるが、パーフェクトを表わす形式であり、反実仮想的な意味を表すこともある。しかしながら、aan が反実仮想を表す場合に、前文脈に a を伴った仮定が必ず現れるわけではないため、ここで a yak が用いられている理由ははっきりしない。

(188) kamuy tarap e=kosinninu a yak
 神 夢 2SG.A=~を宝として持つ a yak
 ene an wayru somo a=ki rokoka aan pe⁷⁸

⁷⁷ yak-ne 「すると-COP」、yak-un 「すると-強意(?)」、yak-ka 「すると-も」

⁷⁸ 原典は「a=ki rok oka=an pe」となっていたが、音声を確認した上で変更した。aan は「～ただ」というパーフェクトを表わす形式であり、これについては 5.2 で詳述する。rokoka は aan の複数形であるが、このように重ねて用いられる場合がある。

このように ある.SG 間違い NEG 4.A=~をする だった だった だが
カムイが見せた夢を心に留めていれば、こんな間違いを犯すことがなかったのに
 (AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト：川上まつ子民話 13)

先行研究に記述のない a yakun にしても、たとえば例(189)を見てみると、yakun 単独であっても同様の解釈が可能であると考えられ、a yakun と yakun に意味的な差は無いとも言える。

(189) tewano ka suy neno an wen kewtum wen puri e=kor kuni
 これから も また このような 悪い心 悪い行い 2SG.A=~を持つ ように
e=ramu a yakun tane nani a=e=wenpakasnu kusu ne.
 2SG.A=~を思う a yakun 今 すぐ 4.A=2SG.A=~を罰する つもり COP
 これからもまたこのような悪い心、悪いふるまいをあなたがするならば
 <lit. 悪い心、悪いふるまいをあなたが持つようあなたが思ったならば>
 すぐにあなたを罰するつもりです。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0154KM_34650AP)

そしてさらに、a が事態の完結さえも表さない場合もある。a yakne の例を見ると、田村(1998)⁷⁹は次の例(190)の a の使用について、「日常語とは違う、叙事詩の用法の一つ。日常の助動詞 a のように、完了・以前の意味は、とくに感じられない (田村 1998 : 179)」とし、「確定・既定を表しているのではなからうか (田村 1998 : 179)」と述べている。

(190) tane an ki kor / Ponaynu-Ponkur / oka rok kusu /
 今 ある.SG する て ポナイヌポンクル いる.PL た ので
pirka uhekotpa / a=ki kane wa / oka=an ruwe / ne a yakne
 良い 一緒に暮らす 4.A=する ながら て いる.PL=4.S こと COP a yakne
 いまは / ポナイヌポンクルが / いてくれたから /
幸せな結婚を / して / 一緒に暮らして / いるけれども⁸⁰

(ア音 11 : 177-178)

この「確定・既定」の a は、田村(1998)は「叙事詩の用法」すなわち韻文体での語りにおける用法としているが、類似の現象は散文体の物語中にも見られる。たとえば例(191)では、主人公が墓標の神様から授かったものを「ここにこうして持っているのだ」と、その場にい

⁷⁹ 田村(1988)は、資料記号【ア音 11】と同一。

⁸⁰ 「yakne は直訳すると「…すると」だが、ここではむしろ「…けれども」。(田村 1998 : 179)」

る人々に説明している場面である。「a=kor ruwe ne a yakne」は直訳では「私は持っているのであったならば」となるが、この文脈で yakne は（原典和訳に反映されているように）条件というよりも理由に知覚、既に定まった事態を示しており、日本語としては「～から」と訳す方が自然になる。つまりここでの a は、田村(1998)の言う「確定・既定」を表していると解釈するほうが妥当である。

- (191) Mosirpasari wa ek kuwa kamuy sonkokor kor
 斜里 から来る.SG 墓標 神 言づてを持って行くて
 se wa ek pe tap a=kor ruwe ne a yakne
 背負うて 来る.SG もの このように 4.A=~を持つ こと COP a yakne
 'Mosirpasari un orukessak katkemat a=nurappa na!' sekor
 斜里 に 跡継ぎが無い 奥様 4.A=~を供養する FIN と
 icarpa=an yak easir pirka.
 先祖供養をする=4.S ならば 本当に 良い
 斜里からいらした墓標の神様が、ことづてを添えて背負って来たものを、
ここに私は持っていますから<lit. このように私は持っているのであったならば
>、私達は『斜里の、後継ぎのない奥様を供養しますよ。』と言いながら、お供物をまかなければなりません。

(ア音 2 : 46-47)

a yakka の例を見ると、例(192)はスズメが語っている場面だが、cikappo a=ne a yakka を「私が小鳥であったとしても」と解釈すると文脈に合わなくなる。yakka が「(たとえ) ~であるとしても」のように解釈されるのに対し、a yakka の場合は既定の事実を表しているという解釈が適当であり、「(たとえ) ~であったとしても」のような仮定は表さないようである。

- (192) cikappo a=ne a yakka kewtumu pirka no ramutunas no
 小鳥 4.A=COP a yakka 心 良い て 思いが早い て
 moy moyke=an kuskeraypo aynu sake aynu inaw a=eyaykamuynerere.
 動く=4.S おかげで 人 酒 人 イノウ 4.A=~で神になる
小鳥である私だけれど正しい心を持ちすぐに行動を起こしたおかげで
 人間の酒と木幣により立派な神になりました。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0146KM_34600AP)

ここまでを見た限りでは、a yakne や a yakka が「～だが」という前提を表すのは、a が「確定・既定」の意味を表し得るからだと言える。

a yakun については、たとえば例(193)では、yakun の後に a yakun が出現しているが、a の既定性を踏まえるならば、yakun 単独のほうは今後の状態を、a yakun のほうは発話時現在を含むこれまでの状態を表しており、後者が既定の状態を指していると言えるだろう。

(193) e=kewtumuhu e=sawnure kuni e=ramu yakun
 2SG.A=心 2SG.A=~を緩める ように 2SG.A=~を思う ならば

a=e=siknure korka

4.A=2SG.A=~を生かす けれど

tane pakno e=yaynu hi neno e=yaynu a yakun

今 まで 2SG.S=思う こと ように 2SG.S=思う a ならば

a=e=wenpakasnu kusu ne na

4.A=2SG.A=~を罰する つもり COP FIN

あなたの心が穏やかになったなら<lit. あなたの心をあなたが緩めるとあなたが思うなら>あなたを生かしますが

今まであなたが思っていたように考えているならば

あなたをひどく罰するつもりですよ

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0154KM_34650AP)

一方で、a yakun の後に yakun もしくは yakne が来る例を見てみると、a を伴う事態が、伴わない事態よりも先行していることがわかる (例(194)~(198))。つまり、yakun の直前の文が表す事態は、a yakun によって、ある確定した場面が設定されたうえで成り立つ事態であり、これも既定性のあらわれと考えられる。a yakun が連続で用いられる場合や、a を伴わない yakun が前後にあらわれない場合については、使用意図は不明瞭であるなどの問題点はあるが、a が表す既定性はこれまでに述べた a の機能と繋がるものだと考えられる。

(194) e=isam a yakun

2SG.S=いない a yakun

ne Iskar putuhu un kur utarihi pewre utar

その 石狩川 河口 の 人 仲間 若い 者たち

opitta eiyok wa isam yakun

皆 ~を売る て いない yakun

ray ne yakka ray sinnaisam ki rokoka... an pe

死ぬ COP ても 死ぬ 霊 ~をする だった ある.SG もの

おまえがいなかったら

その石狩川河口部の人の仲間若者達がみんな交易に連れて行かれてしまうなら

死んでも亡霊になってしまうところだったが

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0149KM_34621AP)

- (195) petoput pakno nenpoka iki=an wa san=an wa an a yakun
川の河口 まで なんとか する=4.S て 下る.SG=4.S て いる a yakun
nep ka a=eukoytak yakun ora asinuma ka onne=an yakka pirka
何 も 4.A=~を互いに話す yakun それから 私 も 老いて死ぬ=4.S ても 良い
川の河口部まで何とかして下って行ったならば
何か互いに話をしたならば私も死んでしまってもいいのです。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0159KM_34683ABP)

- (196) e=kor rusuy pe ne a yakun
2SG.A=~を持つ DESID もの COP a yakun
yaunmosir un e=ek wa turano e=an kusu ne yakun
こちらの国 へ 2SG.S=来る.SG て 一緒に 2SG.A=いる.SG つもり COP yakun
eci=ukoonne pakno utura eci=oka yakka pirka korka
2PL.S=一緒に老いる まで 一緒に 2PL.S=いる.PL ても 良い けれど
repunmosir un e=tura kusu ne hawe ne yakun
沖の国 へ 2SG.S=~を連れる つもり COP 話 COP yakun
somo an kusu ne ruwe ne na.
NEG ある.SG つもり COP こと COP FIN
あなたが妻を望むのならば
この国にあなたが来て一緒に暮らすというのなら
年老いるまで一緒にいたらいいいけれど
海の向こうの国に連れて行くつもりだというのなら承諾できません。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0160KM_34688ABP)

- (197) oha kamuy ukor pe ne aynu anak oha aynu ukor
ただの 神 結婚する もの COP 人 TOP ただの 人 結婚する
pe ne hike kateomare wa iki menoko ne a yakun
もの COP したが ~に惚れる て する 女 COP a ならば
menoko kar pe ani sake a=kar wa sorekus
女 ~を作る もの で以て 酒 4.A=~を作る て それこそ
sake tura inaw tura sorekus a=nomi pa yakne
酒 と共に イナウ と共に それこそ 4.A=~に祈る PL ならば
kamuy or ta eyaykamuynerere p
神 ところに ~で神格を高める が

カムイはカムイ同士、人間は人間同士結婚するものであるが
惚れた女であるというのなら<lit. 惚れて結婚する女であったなら>
 その女の作ったもので、酒をかもして
酒やイナウでお祈りをしたならカムイの世界で神格を増すことができるものを
 (国研コーパス：K8010291UP)

- (198) nen ka iki=an wa arwenkamuy a=simaketare a yakun
 何 も する=4.S て 悪い神 4.A=~に自ら負ける a yakun
nisatta an yakun
 明日 なる yakun
 ta ipenake un kotan orwa ikaopaspa p arkipa nankor kusu
 この川上 の 村 から 助けに行く.PL もの 来る.PL だろう から
arkipa yakun e=tura wa e=arpa wa
 来る.PL yakun 2SG.A=~を連れる て 2SG.S=行く.SG て
 何かあって悪い神に私が負けたなら
翌日になったら
 この川上の村から助けが来るだろうから
来たならばおまえは一緒に行って
 (アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0161KM_34690AB_34691AP)

5.1.5 小括

以上、5.1 では、助動詞 a の意味機能について考察した。a はこれまで過去、完了 (perfect) を表す助動詞だと考えられてきたが、本項目ではそれらを表さない例外的な用例に注目した。結論として、a をテンス的意味 (=past)・アスペクト的意味 (=perfective)・証拠性 (=direct evidential) を表す複合形式であり、そのときどきによって表出する意味が変化する形式であると位置づけた。

5.2 助動詞 aan

a のほかにもうひとつ、過去ないしは完了をあらわす形式としてみなされてきたのが助動詞 aan である。5.1 で a を証拠性表示の形式として考えた背景には aan の存在がある。5.2 では aan があらわす証拠性について述べる。

5.2.1 先行研究の検討

金田一(1993 [1931])、知里(1974[1936])、田村(1988a,1996)、中川(1995)において、aan は「何か物事が起こったあと、その物事が実際はこういうことであった」というように、aan が既に起こった事態に対して、その事態の生起時には分からなかったことが、発話時現在において判明したことを表す形式であることが述べられている。久保寺(2020)は aan を「完了して今にその結果が及んでいる (久保寺 2020 : 2)」意味を表すものとみて、「完了存在態 (久保寺 2020 : 2)」と位置付けている。

また、知里(1974[1936])、萱野(1996)は、aan が意外な事実または結果に対する驚きを示すことを指摘しており、同様に、井筒(2008)は aan を「驚嘆性」⁸¹の表現、ブガエワ(2014)は aan を「感嘆ムード」を表す形式とみている。

たとえば、例(199)は、袋だと思っていたものが袖であったということに気づいたことを表している。aan は複数形 rokoka の形をとることもある (例(200))⁸²。

(199) pukuru ne kunak ku=ramu a p tusaha ne aan.
袋 COP ように 1SG.A=~を思う a だが 袖 COP aan
袋だと (私は) 思ったが袖だったんだな

(田村 1988 : 42)

(200) kamuy unpirma an siri ne rokoka an hi an!
神 おつげ ある.SG 様子 COP rokoka ある.SG ことある.SG
神様のおつげがあるのだったなあ!

(田村 1988 : 42)

5.2.2 助動詞 aan と間接証拠性

先行研究の記述から、aan は間接証拠性および意外性をあらわしうることが伺える。意外性については 5.2.3 で述べることとし、5.2.2 では間接証拠性について説明する。

間接証拠性(indirect evidentiality)は、話者は出来事を目撃してはいないが、出来事のあと

⁸¹ 井筒(2008)は mirativity の訳語として「驚嘆性」を用いている。本論文では mirativity の訳語に「意外性」を使用する。

⁸² 千歳方言では aan の形はまれで、単数形 anan、複数形 rokoka(y)が用いられる。また、とくに複数表示をする必要がないような場面でも rokoka(y)が用いられることがある。(中川 1995a : 12)

に事実を知った場合に用いられる。間接証拠は推量(inference)と引用(quotatives)に分けられる。推量証拠(inferential evidentials)は、話者が身体的証拠に基づいて推定する場合に用いられる。引用(quotatives)は一報告(reportatives)や伝聞(hearsay)やセカンドハンド(second-hand)とも呼ばれるが一話者が動作や出来事について他者から知った場合に用いられる。本論文では「推量」と「伝聞」の用語を用いる。

例(201)(202)(203)は推量の例である。例(201)は、話し手(=物語の主人公)が自分の家に戻ってきたときに、家の中が荒らされている形跡を目にし、それが熊の仕業であることを推測した場面である。この場面で、既に熊はいなくなっている。

(201) a=uni ta ek=an ruwe ne akusu

4.A=家に 来る.SG=4.S こと COP すると

a=uni ta kamuy san aan hine

4.A=家に 熊 下りる aan て

私の家に来たところ、私の家にクマが下りて来ていたのです。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0215UT_35237AP)

例(202)は、倒れた祭壇の下から虫のなくような声がするのを聞いて祭壇を起こすと、そこに赤ん坊がいたのを見て、状況を推測した場面である。nusakohokusteとは「一族がもう絶体絶命というときに、神々に守護を願って赤ん坊を地面に置き、その上に祭壇を倒す(ア音10:69)」ことだが、ここでは話し手が、赤ん坊の母親が夜襲から赤ん坊を救うためにnusakohokusteしたのだらうと考えている場面になっている。

(202) iwatarap e=ne wa, e=unuhu e=nusakohokuste,

赤ん坊 2.A=COPて 2.A=母 2.A=~の上に祭壇を倒す

ekohopi a=rayke wa isam hi ne aan.

~と別れて 4.A=殺す て なくなる こと COP aan

乳飲み子のお前を、母親が祭壇を倒してその下に隠し、

まもなく殺されてしまったのだっらしい。

(ア音10:68)

例(203)は、雪ぼこりが渦巻いている様子を見た話し手が、その渦巻いている場所の前方に先回りして行ったところ、男が熊に追いかけているのを目にし、それが雪ぼこりが渦巻いていた原因であったのだと確認するところである。

(203) nea aynu kesianpa wakusu upasupun sinoye katu ne aan hine

その人間 追いかける ので 雪ぼこり 渦巻く 様子 COP aan て

(熊が) その男を追いかけますので、それで雪ぼこりが渦巻いていたのでした

(ア音 6 : 72)

次の例(204)~例(206)は、伝聞の例である。例(204)では、話し手が自分の身の上を語っている。主人公はもともと村長の息子であったが、幼い時に村に伝染病が流行って主人公以外全滅してしまった。それを天から降りてきた飢饉の神が育てていたのだが、主人公は大きくなってから初めてそのことを聞かされ、別の村を訪れたときにその経緯を話している場面である。村長の息子であったことと、神に育てられたことが、言語情報を通して間接的に確認されている。

- (204) tapne Iskar penikehe rera oyan wa
このように 石狩川 川上 伝染病が流行る て
oro ta kotan kor kur poho a=ne aan korka
そこに 村長 息子 4.A=COP aan けれど
i=resu kamuy isam wakusu kanto or wa kemram kamuy ran wa
4.O=~を育てる 神 いないので 天 ところから 飢饉 神 降りる て
i=resu hi ne aan pe
4.O=~を育てる こと COP aan だが
かくかくしかじかで、石狩川の上流に伝染病がはやって
私は、その、村長の息子だったのですけれど、
私を育てる神様がいなかったので、天から飢饉の神様が降りて来られて、
私を育ててくださったのでしたが

(ア音 2 : 52)

例(205)は、話し手が、自分の村に飢饉があり、大半の人が飢え死にしてしまったという噂を聞いた場面である。主人公はかつて息子夫婦に自分の村を追い出されており、今は別の村で暮らしているのだが、そこに息子の嫁が今にも死にそうな様子で訪ねてくる。しかし主人公は自分を追い出した息子の嫁を無視し、嫁は帰っていく。そしてそのあと、飢饉の噂を耳にして、以下のように推測する。

- (205) a=kotanu kemus aan hine ora kem koyaywennukar pe omanan ayne
4.A=村 飢饉になる aan て それから 飢饉 ~に苦しむ もの 歩き回る 挙句
i=pa siri ne aan hawe a=nu wa po hene a=ruska
4.O=見つける 様子 COP aan 声 4.A=聞くて なおまた 4.A=~に怒る
私の村が飢饉になったのだなあ、そして飢えて苦しんだ奴が、歩いているうちに
私を見つけたのだなあと思われる話を聞いて私はいっそう、腹が立ちました。

(ア音 2 : 10-12)

例(206)は、相手（話し手の兄）が、幼い頃から千里眼⁸³の持ち主であったことを明かし、話し手がそれを初めて知った場面である。

(206) easir a=yupihi isoytak kus

初めて 4.A=兄 話す ので

oyaciki ponram oro wano ueinkar kur ne aan.

なるほど 幼いとき から 千里眼 人 COP aan

初めて兄が話してくれたのでわかったのですが、実は、兄は小さいときから 目に見えないことでも見ているようにわかる能力の持ち主だったのでした。

<lit. 「初めて兄が話したので、兄は幼い頃から千里眼の持ち主であった。」>

(ア音 6 : 54)

aan が間接証拠を表すとすると、過去の場面が引き続き現在に関わってくるという点で、アスペクト的には perfect を表していることになる。これまでの研究では、a は perfect を表し、aan は感嘆というモーダルな意味を表わす形式とされ、これらが互いに関係づけられて議論されることは無かったが、本論文では a と aan を関連づけて考え、アスペクト的意味においては「perfective—perfect」、証拠性においては「直接証拠—間接証拠」という対立を示すものとする（証拠性の対立については 5.2.4 で詳述する）。

ちなみに aan は以下の例(207)(208)のような反実仮想を表す場合がある。こうした例では、過去というテンス性からは解放されている。

(207) tan pon menoko isam yak anakne

この 若い 娘 無い なら TOP

a=kotanu a=wente kusu ne aan pe

4.A=村 4.A=~を滅ぼす だろう COP aan だが

この娘がいなかったら村は滅ぼされるところだったろうに

<lit. 私達の村は滅ぼされるはずだったが>

(平石 2003 : 102)

(208) e=se wa e=arpa wa e=utari e=ere yakun

2.A=~を背負う て 2.S=行く.SG て 2.A=同胞 2.A=~に…を食べさせる ならば

⁸³ 巫力によって、遠くで起こっているできごとが見えたり、これから起こることがわかったり、病気の原因を見つけたりすることができる。(中川 1995a : 52)

e=utari opitta ray kusu ne aan pe

2.A=同胞 皆 死ぬ することになる aan だが

あなたが<魚を>持って帰って、あなたの村の人たちに食べさせたら、
あなたの村の人はみんな死んでしまうところでした<lit. 死ぬはずだったが>

(ア音 6 : 6)

5.2.3 助動詞 aan と意外性

間接証拠性と関連するカテゴリーとして意外性(mirativity)があるが、aan も意外性との関連が考えられる。意外性とは、話し手の予想外の気持ちや新情報を表す意味範疇である (Delancy 2001、Aikhenvald2004)。以下に例を挙げる (例(209)~(211))。

(209) nen ka ku=kor poci ikopa wa kor wa arpa aan.

誰 も 1SG.A=~を持つ 帽子 取り違える て ~を持つ て 行く aan

「誰か私の帽子を間違えて持って行った。」

(神保小虎・金澤庄三郎(1986[1898]) : 230)

(210) ohayne tap sisam ye hi KESIKOMU ne aan.

なるほど 本当に 和人 ~を言う こと 消しゴム COP aan

tanepo ku=nu hawe ne wa.

初めて 1SG.A=聞く 声 COP FIN

なるほど和人が言うのは消しゴムだったのか。初めて聞いたわ。

(ア音 1 : 58)

(211) inkar=an akusu tan sunku nitek epokikomomse

見る=4.S すると この エゾマツ 枝 折れ下がる

cise neno kane an uske ta an=an hi ne aan wa

家 のように て ある.SG 所 に いる.SG=4.S こと COP aan て

見ると、このエゾマツの枝が折れ下がり、

家のようになっている所に私はいたのでした。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0150KM_34626ABP)

5.2.4 助動詞 a との対応—直接証拠と間接証拠

5.1.3 では a が直接証拠性、5.2.2 では aan が間接証拠性を表すことを述べた。ここに、a と aan の証拠性における対立を見出すことができる。De Haan(2005)によれば、過去をあら

わす要素が直接証拠性と間接証拠性で対立する現象は、多くの言語にみられる⁸⁴。例えば以下のトルコ語の例では、過去辞-di が話者によって目撃されたことを示すのに対し、過去辞-miş は目撃されていないことを示す。

a. *Ahmet gel-di.*

Ahmet come-PST.DIR.EVD

‘Ahmet came.’ (witnessed by the speaker)

b. *Ahmet gel-miş*

Ahmet come-PST.INDIR.EVD

‘Ahmet came.’ (unwitnessed by the speaker)

(De Haan 2005, WALS Online, chapter77、グロス は原典通り)

また、デイリック(2018)は、トルコ語の過去辞-di は話者が「実際に動作を行ったか、あるいは行われたのを目撃し、確信を持って言う場合 (デイリック 2018:14)」に用いられ、過去辞-miş は話者が「直接目撃した出来事ではなく、他人から聞いたり、後から気づいたり、何らかの形で間接的に知った出来事や行為を表す (デイリック 2018:14)」と記している。

細江逸記(1973)⁸⁵はこれらのトルコ語の過去辞の対立と同じ関係を、古代日本語の過去助動詞キ・ケリに見出し、キを「目撃回想」、ケリを「伝承回想」と位置付けた。細江(1932)は、「[き]は『目撃回想』で自分が親しく経験した事柄を語るもの、「けり」は『伝承回想』で他よりの伝聞を告げるに用いられたものである。(細江 1932:119-120)」としている。加藤(1998)は細江説を基本的には継承し、キ・ケリの基本的な意味機能の差異について、以下のように記している。

原則として、発話時の表現主体にとって、過去に生起したと意識される事象を表現する場合、

キ……その事象が生起するのをその時点で自分自身が直接目撃したり明確に意識したりしたという視覚的・感覚的記憶を伴うものを表現するのに用いる。

ケリ…こうした記憶を伴わないものを表現するのに用いる。それは、後になってからその後の状況によって気づいたり、また推定したり、また他人からの伝聞によって知ったりなど、何らかの方法で間接的に認識した事象である。

(加藤 1998:207-208)

本論文が主張する a と aan の対立もおおよそこうした対立である。「ケリ」が「キ (過去の

⁸⁴ ジョージア語などの南コーカサス諸語、チュルク諸語、コミ・ジリエーン語、ハイダ語、イカ語など。WALS ONLINE chapter77 参照。

⁸⁵ 細江逸記(1932)『動詞時制の研究』泰文堂の改訂新版。

助動詞) + アリ (存在動詞)」という構造であるならば、アイヌ語の aan (=助動詞 a+存在動詞 an) という構造と同一であり、意味的形態的な並行性も注目すべき点である。⁸⁶

ところで、aan は次の例(212)の「rokoka aan」のように、複数形と単数形が連続した形で用いられることがあるが、このような場合でも、単独で用いられる場合と意味の差異は特にみられない。

(212) opitta a=onautari kor rokoka aan pe

全部 4.A=父たち ~を持つ rokoka aan もの

soy o pa ruwe ne hine

外 ~を~に入れる PL こと COP て

父さんの持っていたものだというものを、ぜんぶ外に運び出して、

(国研コーパス：K8007292UP)

最後に、形態的な方言差について少し触れておきたい。aan は方言ないしは話者によって形態が異なる。千歳方言話者の白沢ナベ氏の語りでは、aan の形はまれであり、専ら anan という形が用いられる (中川 1995a : 12)。静内方言では haw'an、十勝方言では awan、幌別方言では awokay、awan が用いられる。沙流方言の aan はさまざまな方言形の一つであり、どれがより語源に近いものなのかは、文献や地理的な分布からは判断することができない。そのため、aan 系の助動詞がすべての方言において「動詞 a+動詞 an」と分析できるかどうかは、確実ではない。つまり、anan という形態を見れば「動詞 an+動詞 an」と分析できる可能性もあり、また、haw'an や awan を見れば「haw (名詞「声」) +動詞 an」と分析できる可能性もある。

しかし、動詞 a の複数形 rok、動詞 an の複数形 oka(y)をそれぞれ反映している rokoka (沙流、千歳) や rokokay (千歳、幌別) といった形態があることから、aan を中心的形態とし、anan、awan、haw'an は aan の音声的なバリエーションと捉え、いずれも「動詞 a+動詞 an」という構成であると本論文では考えている。

5.2.5 小括

以上、5.2 では、助動詞 aan の意味機能について考察した。aan は間接証拠性、意外性を表す形式であり、5.1 で扱った a との間には、以下の表 7 のような対立関係が見いだせる。

⁸⁶ キとケリの意味機能については、鈴木(1992, 2009)、加藤(1998)、井島(2011)などが諸説を整理して記述している(渋谷 2014 も参照)。日本語古典文学とアイヌ語口承文芸には、テンスの有無や叙述形態 (語り手の視点など) の差異があることから、キとケリの意味機能をそのまま a と aan に当てはめてよいと主張するわけではないが、通言語的な共通性を見出す一助として挙げておく。

	アスペクト的意味	テンス的意味	証拠性	拡張的意味
a	perfective	過去（基本）	直接証拠性	確信、過去場面の思い出
aan	perfect		間接証拠性	過去場面の推測、詠嘆

表 7 助動詞 a と助動詞 aan の意味機能

5.3 本章のまとめ

以上、第 5 章では、5.1 において助動詞 a、5.2 において助動詞 aan の意味機能を分析した。

a は、これまで過去・完了(perfect)をあらわすと考えられてきたが、現在との断絶性を示す傾向が強いことから、a が表すのは perfective であることを主張した。さらに、テンス的意味からもアスペクト的意味からも解放された例があることを指摘し、a が直接証拠性をあらわす証拠性表示の側面も持つことを主張した。

aan は、意外な事実に対する驚きや感嘆といったムード、完了アスペクトを表すことが既に述べられている形式であったが、本章では aan を間接証拠性、意外性を表す形式であると整理したうえで、aan と a を関連付けて考え、両者の間に証拠性における対立を見出した。

まとめると、a と aan の関係は以下の表 7（再掲。5.2.5 に掲載したものと同一。）のようになる。

	アスペクト的意味	テンス的意味	証拠性	拡張的意味
a	perfective	過去（基本）	直接証拠性	確信、過去場面の思い出
aan	perfect		間接証拠性	過去場面の推測、詠嘆

(再掲) 表 7 助動詞 a と助動詞 aan の意味機能

第6章 結論

本論文では、アイヌ語の存在動詞 an「ある、いる、なる」を含むアスペクト形式を「存在型アスペクト形式」と位置づけたうえで、存在型アスペクト形式を中心に、その意味機能を分析した。対象としたアイヌ語の方言は、沙流方言、千歳方言である。分析対象とした形式は、kor an、wa an、kane an、hine an、a、aan である。これらのうち、本論文で存在型アスペクト形式としたのは、a 以外の形式、すなわち構造上存在動詞 an を含んでいるものである。a は存在型アスペクト形式ではないが、特に aan や wa an の機能との関連で議論の必要があることから、分析対象に含めた。

kor an、wa an、kane an、hine an については4章で取り上げた。アイヌ語のアスペクト研究は、これまで主に kor an と wa an の比較が主体であり、kor an は動作継続または変化の進行過程、wa an は変化の結果継続を表す形式であるとされてきた。しかし、両形式は完全に対立するものではない上に、その定義にそぐわない用例も散見されるという状況から、課題も多く残されていた。4章ではまずその課題解決を含め、kor an、wa an を対比させつつその意味機能を記述した。また、アスペクト的観点からの分析が少なかった kane an と hine an も研究対象とし、「接続助詞+存在動詞」という共通構造を持つこれらの四形式の用法を整理した。

非状態性動詞について、動作動詞は、kor an では動作継続か動作の習慣性・多回性を表す。限界性をもたない動作動詞は基本的には wa an とは共起しない。変化動詞は、kor an では変化の進行過程、wa an では変化の結果継続を表す。kor an が習慣性・多回性を表す例についてはこれまで一部の動詞で認められているものであったが、今回のデータを見る限りでは、動詞の性質に関わらずひろく見られる現象である。

動作動詞の中でも、いわゆる二側面動詞や、認識・言語・表現活動を表す動詞、思考・感情・知覚動詞の一部には、動作と変化の両面が現れるものがある。この場合 kor an では動作性が前面に現れて、動作継続や習慣性・多回性を、wa an では変化性がより前面に現れて、変化の結果継続を表す。先行研究で指摘されていた nukar の能動性の対立も、これに含まれるものと考えられる。

状態性動詞の場合、同じ動詞でも限界的に捉えるかどうかによってアスペクト的意味が変化する。kor an は、限界性が問題とならない場合には動作の習慣性・多回性、単なる状態を表し、問題となる場合には変化の進行過程を表す。wa an は、限界性が問題とならない場合には単なる状態を、問題となる場合には変化の結果継続を表す。先行研究では、wa an が状態性動詞と共起した場合に、その状態の一時性が現れ得ることが指摘されていたが、今回のデータを見ると、一時性の現れは段階的なものであり、恒常的性質を表す場合もある。

また、kor an、wa an は、具体的な存在を要求する形式である。それは、特定時の運動の基本的意味またはポテンシャルな事態を表すのに限られること、an が人称表示を要求す

ること (an の非文法化)、否定表現と共起しにくいこと、未来の事態を推量する場合に用いられにくいことから説明され得る。ここから、kor an、wa an は存在の様相を表すのが第一義であり、事態の内的時間にかかわるアスペクト的意味はそれに付随するものと考えられる。

kane an は、基本的には wa an と同じく変化の結果継続または状態を表すが、kane an の場合は主体の属性 (ステータス) を積極的に表し、また、主体の動作・状態が何らかの比喩になる傾向がある。また、kane an は構文全体で常套句として固定化し、いわゆる形容詞的な機能をみせているものが散見され、脱アスペクト的な現象を見出すことができる。

hine an は基本的には wa an と同じく変化の結果継続を表すアスペクト的性質を持ち、今回の調査では wa an との顕著な差異は見られなかった。物語の語りにおいては wa の代わりに hine を用いる場合があることが先行研究では指摘されており、口承文芸資料を対象とした分析の場合、wa an と hine an の対立は見出しにくいものと思われる。

存在型アスペクト形式は、「動詞 kor an wa an」のように複数の形式が連続して用いられるケースがあるが、話者が意図的に付加したものかそうでないかは判然としない。しかし、このような連続があったとしても、意味の重なりが生じることはないと考えられる。

5 章では、助動詞 a と助動詞 aan を取り上げ、両者はテンス性・アスペクト性・証拠性を表示する複合的形式であると結論づけた。a はこれまで過去、完了 (パーフェクト) を表すとされてきた形式であるが、それに該当しない用例が散見される。本論文では a をテンス・アスペクト・証拠性の観点から捉えて分析した。また、aan は驚きや感嘆などを表すモーダルな形式とされてきたが、本論文では aan を a と関係づけて捉え、こちらもテンス・アスペクト・証拠性の観点から分析した。

その結果、次のような対応が示された。テンスの面では、a と aan は基本的には過去を表す。アスペクトの面では、a は perfective、aan は perfect を表す。証拠性の面では、a は直接証拠、aan は間接証拠を表す。また、これらの拡張的な意味として、a は確信や過去場面の思い出しを、aan は過去場面の推測や詠嘆を表す。

第 4 章、第 5 章で得られた結果から、次のような見解が示される。第 3 章で述べたように、アイヌ語において、完結相と不完結相の対立は不明瞭であり、さらに、kor an、wa an、kane an、hine an は、いわゆるアスペクトなのか付帯状況を表しているのか、明確な境界を設けることはできない。これまでアイヌ語においてアスペクト形式として扱われてきたものは、文法的にも意味的にも、一部でアスペクト的解釈を許す場合があるにすぎない。そうした問題点を指摘したうえで、本論文は、存在動詞 an を含むアスペクト的形式を存在型アスペクト形式として位置づけ、先行研究で残された問題の解決を目指しつつ、各形式の意味機能を分析した。全体を通してみれば、存在動詞 an が表す継続性が、アスペクト的意味を表わす要素として機能していると言えるだろう。つまり、アイヌ語の動詞は、kor an、wa an、kane an、hine an を伴った場合、基本的には発話時を軸とした継続性が顕在化し、この拡がりのある時間は存在動詞 an によって表されると考える。an を内部

に含む助動詞 aan は perfect を表すが、これは過去と現在にまたがる時間の広がりを示している。また、a と aan の、perfective—perfect という対応は、無標の動詞と「動詞 wa an」の、完成—変化の結果継続（状態パーフェクト）の対応と並行している。

本論文で示した結論は、沙流方言、千歳方言のデータに基づくものであり、他方言のアスペクトにそのまま適用できるものではない。また、アスペクト形式が相互排他的ではないことや、資料のもつ語彙的・文体的制限などの問題から、本論文で得られた結果は、使用傾向に留まるものではあるが、今後のアイヌ語のアスペクト研究に若干なりとも示唆を与えるものになることを願う。

謝辞

千葉大学文学部教授中川裕先生には、不肖な筆者に研究の機会を与えていただき、博士前期課程・後期課程においてご指導ご鞭撻を賜りました。ここに、深甚なる謝意を表します。

本論文は中川裕先生、同学部教授田口善久先生、同学部教授岡部嘉幸先生にご審査いただき、大変貴重なご指摘やご意見を賜りました。心より感謝申し上げます。

東京外国語大学の学部生時代においては、アイヌ語学の授業で志賀雪湖先生にご指導いただき、筆者が千葉大学の博士前期課程に進学するきっかけを頂きました。前期課程進学後から現在に至るまでは、札幌学院大学教授の奥田統己先生、慶応義塾大学環境情報学部専任講師の藤田護先生はじめ、アイヌ語・アイヌ口承文芸研究に関わる諸先生方から、様々な機会においてご教示ご厚意を賜りました。皆様に深く感謝申し上げます。

また、論文投稿や研究発表の場で重要なご指摘やご助言を賜りました諸先生方、日頃よりサポートして下さった諸先輩方、ゼミの皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に、筆者をずっと支え続けてくれている母、そして、天国から見守ってくれているであろう父に感謝します。

参考文献

- 井島正博(2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房.
- 井筒勝信(2008)「「想定範囲内」からの消失と「予想外」の存在・出現：アイヌ語の驚嘆性(mirativity)表現とその主な概念化」井筒勝信編『アイヌ語学と現代の言語理論』, pp.217-234, 北海道教育大学旭川校.
- 岡智之(2013)「第1章 日本語存在表現の文法化」第2章 テンス・アスペクトの文法化と類型論」山梨正明・吉村公宏・堀江薫・靱山洋介編『認知歴史言語学』pp.3-75, くろしお出版.
- 奥田統己(1995)「アイヌ語静内方言の接続助詞」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1, pp.139-159, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 奥田統己編(1999)『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROMつき)』札幌学院大学.
- 尾上圭介(2001)『文法と意味 I』くろしお出版.
- 加藤浩司(1998)『キ・ケリの研究』和泉書院.
- 萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂.
- 金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- 金田一京助 (1993 [1931])「アイヌ語学講義」『金田一京助全集 アイヌ語 I』5, pp.133-366, 三省堂.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
- 久保寺逸彦(2020)『アイヌ語・日本語辞典稿 (久保寺逸彦著作集 4)』草風館.
- 児倉徳和(2015)「証拠性」斎藤純男・田口義久・西村義樹編『明解言語学辞典』, p118, 三省堂.
- 佐藤知己(2002)「アイヌ語千歳方言における kane の用法」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8, pp.61-88, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 佐藤知己(2006)「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12, pp.43-67, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 佐藤知己(2007a)「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26(3), pp.44-52, 明治書院.
- 佐藤知己(2007b)「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて—特に完了を表す形式をめぐって—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13, pp.1-14, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 佐藤知己(2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林.
- 渋谷勝己(2014)「方言研究と通言語的研究」定延利之編著(2014)『日本語学と通言語的研究

- との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』, pp.97-145, くろしお出版.
- 神保小虎・金澤庄三郎(1986[1898])『アイヌ語會話字典』(新版)北海道出版企画センター.
- 鈴木泰(1992)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房.
- 鈴木泰(2009)『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房.
- 須田義治(2010)『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房.
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』, pp.117-153, むぎ書房.
- 高橋靖以(2004a)『アイヌ語十勝方言の助詞』北海道大学大学院文学研究科博士論文.
- 高橋靖以(2004b)「アイヌ語十勝方言の継続相を表す形式 kor an について」『日本言語学会 第 129 回大会予稿集』, pp.243-246, 日本言語学会.
- 高橋靖以(2006)「アイヌ語十勝方言の進行相を表す形式 kor an について」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』13, pp.75-82, 北海道大学大学院文学研究科.
- 高橋靖以(2015)「アイヌ語のアスペクトと証拠性」(2015年1月10日「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班研究会発表資料)
- 高橋靖以(2018)『アイヌ語十勝方言文法概説』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 高田祥司(2008)「日本語東北方言と韓国語の<過去>の表現について」『日本語の研究』第4巻4号, pp.32-47, 日本語学会.
- 竹田晃子(2020)『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房.
- 田村(福田)すず子(1960)「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」『季刊民族學研究』24(4), pp.343-354.
- 田村すず子(1972)「アイヌ語沙流方言における<…して…>の表現」『國學院雑誌』第73巻11号, pp.147-163, 國學院大學.
- 田村すず子(1988)「アイヌ語」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典』1, pp.6-94, 三省堂.
- 田村すず子(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.
- 田村雅史(2003)「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記述の概観」『itahcara 創刊号』, pp.17-24, itahcara 創刊号編集事務局.
- 知里真志保(1973[1942])「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3, pp.457-586, 平凡社.
- 知里真志保(1974[1936])「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』4, pp.3-197, 平凡社.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版.
- ディリック,セバル(2018)『トルコ語チャナッカレ方言の述語形式』岡山大学大学院社会文化科学研究科博士論文.
- 中川裕(1981)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習 '81』, pp.131-141, 東京大学文学部言語学研究室.
- 中川裕(1982a)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞(要旨)」『北方言語・文化研究

- 会成果報告(8)』(紀要 24 抜刷), pp.95-101, 早稲田大学語学教育研究所.
- 中川裕(1982b)「助動詞としてのオアシの用法」『アイヌ文化』7, pp.240-246, アイヌ無形文化伝承保存会.
- 中川裕(1995a)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 中川裕(1995b)『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店.
- 中川裕(1998)「アイヌ語」『世界の言語ガイドブック 2 (アジア・アフリカ地域)』三省堂.
- 中川裕(2020)『改訂版 アイヌの物語世界』平凡社.
- 中川裕・中本ムツ子(2004)『CD エクスプレス アイヌ語』白水社.
- 野田高広(2015)「アスペクト(相)」斎藤純男・田口義久・西村義樹編『明解言語学辞典』,pp.4-5, 三省堂.
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- バチラー, ジョン(1981)『アイヌ・英・和辞典』第 4 版, 岩波書店.
- ブガエワ, アンナ(2014)「北海道南部のアイヌ語」『早稲田大学高等研究所紀要』6, 早稲田大学高等研究所.
- 細江逸記(1973)『動詞時制の研究〔新版〕』篠崎書林.
- 吉川佳見(2015)『アイヌ語沙流方言の散文説話中にみる助動詞 a の機能』(修士論文、未公刊) 千葉大学人文社会科学研究所.
- 吉川佳見(2016)「アイヌ語のアスペクト的表現「kor an」「wa an」をめぐる問題について」『アイヌ語の文献学的研究 (2)』 pp.28-41, 千葉大学大学院人文社会科学研究所.
- 吉川佳見(2018)「アイヌ語の助動詞 aan と証拠性」『アイヌ語の文献学的研究 (3)』 pp.3-18, 千葉大学大学院人文公共学府.
- 吉川佳見(2019)「アイヌ語の存在型アスペクト「kor an」「wa an」の意味範疇について」『ユーラシア言語文化論集』 21, pp. 87-106, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 吉川佳見(2020a)「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』 10, pp.203-218, 富山大学人文学部.
- Asai, Toru. 1974. Classification of dialects: Cluster analysis of Ainu dialects. *Bulltein of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures*. 8: 45-136.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford University Press.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology : A Study of the Relation between Meaning and Form*. John Benjamins.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press. (コムリー, バーナード 山田小枝(訳)(1988)『アスペクト』むぎ書房.)
- De Haan, Ferdinand. 2005. Semantic distinctions of Evidentiality. In *The world atlas of language structure online*, ed. Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath, chapter

77. Max Planck Digital Library. Available online at <http://wals.info/chapter/77>
 Accessed on 2020-09-30.
- De Haan, Ferdinand. 2012. Evidentiality and Mirativity. In Robert I. Binnick(ed.), *The Oxford handbook of Tense and Aspect*, 1020-1046. Oxford University Press.
- DeLancey, Scott. 2001. The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33(3): 369-382.
- Izutsu, Katsunobu. 2000. The semantics of the Ainu auxiliary OASI: aspectual and modal senses. *Journal of Hokkaido linguistics*, 1, 1-14.
- Izutsu, Katsunobu. 2001. Ainu Okere and Isam: Where Completion, Remarkableness, Adversity, Absence, and Disappearance Meet. *Journal of Hokkaido linguistics*, 2, 19-34.
- Refsing, Kirsten. 1986. *The Ainu language : the morphology and syntax of the Shizunai dialect*. Aarhus University Press.
- Sato, Tomomi. 1997. 'Possessive expressions in Ainu', in Hayashi Tōru & Bhaskararao, Peri (eds.) *Studies in Possessive Expressions*, 143-160, Tokyo University of Foreign Studies.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The languages of Japan*. Cambridge University Press.
- Маслов, Ю.С. 1984. *Очерки по аспектологии*. Л. (Маслов, यूरीー 林田理恵・金子百合子(訳)(2018)『アスペクト論』ひつじ書房.)

参考資料

- ・用例収集は以下に挙げた資料から行なった。
- ・資料略号を付したものは資料名末尾【】内に記した。

■文献

- アイヌ民族博物館編(1997)『伝承記録3 上田トシのウエペケレ』アイヌ民族博物館。【上ウ】
- アイヌ民族博物館編(2015)『上田トシの民話』1, アイヌ民族博物館。
- アイヌ民族博物館編(2015)『上田トシの民話』2, アイヌ民族博物館。
- アイヌ民族博物館編(2015)『上田トシの民話』3, アイヌ民族博物館。
- アイヌ無形文化伝承保存会編(1982)『英雄の物語』アイヌ無形文化伝承保存会。
- アイヌ無形文化伝承保存会編(1983)『アイヌの民話1』アイヌ無形文化伝承保存会。
- アイヌ無形文化伝承保存会編(1983)『人々の物語』アイヌ無形文化伝承保存会。
- 大谷洋一(1995)「松島トミの伝承」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1, pp.27-50, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(1997)「小川シゲノから上田トシへの伝承」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3, pp.77-119, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(1998)「小川シゲノから上田トシへの伝承 2」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, pp.29-68, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(1999)「小川シゲノから上田トシへの伝承 3」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5, pp.85-113, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2000)「松島トミさんの口承文芸 2」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6, pp.113-149, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2001)「松島トミさんの口承文芸 3」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7, pp.95-147, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2002)「松島トミさんの口承文芸 4」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8, pp.89-128, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2003)「松島トミさんの口承文芸 5」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』9, pp.81-116, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2004)「松島トミさんの口承文芸 6」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10, pp.77-123, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2005)「ネコに殺されそうになった友人を助けた男の話」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』11, pp.109-142, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2006)「小川シゲノさんの口承文芸」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12, pp.69-82, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 大谷洋一(2011)「和人の散文説話—継母から殺されかけた姉を救った妹—」『北海道立アイ

- ヌ民族文化研究センター研究紀要』17, pp.19-89, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 大谷洋一(2015)「カムイの散文説話―白キツネ兄弟の物語―」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』21, pp.27-44, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 大谷洋一(2016)「アイヌ口承文芸「散文説話」―河童に助けられた男の物語―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1, pp.57-77, 北海道博物館.
- 大谷洋一(2017)「アイヌ口承文芸「散文説話」―山の神と沖の神の子を身ごもった女の物語―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2, pp.53-66, 北海道博物館.
- 大谷洋一(2018)「アイヌ口承文芸「散文説話」―人間の女に惚れたフリを殺した男―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3, pp.117-133, 北海道博物館.
- 大谷洋一(2019)「アイヌ口承文芸「散文説話」―タンネサラの男―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, pp.79-92, 北海道博物館.
- 萱野茂(1987)『アイヌ語会話 初級編』カムイト° ラノ協会.
- 萱野茂監修(1992)『アイヌ語日常会話集 1 凍ったミカン』片山言語文化研究所.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 1 カムイユカラ編 I』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 2 カムイユカラ編 II』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 3 カムイユカラ編 III』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 4 ウウエベケレ編 I』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 5 ウウエベケレ編 II』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 6 ウウエベケレ編 III』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 7 ユカラ編 I』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 8 ユカラ編 II』平凡社.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 9 ユカラ編 III』平凡社.
- 萱野茂(2005)『新訂復刻 ウウエベケレ集大成』日本伝統文化振興財団.
- 金田一京助(1993)『金田一京助全集』10 三省堂.
- 金田一京助(1993)『金田一京助全集』11 三省堂.
- 楠本克子(2004)「上田とし氏のウウエベケレ～ウパシチロンヌプの兄弟の話～」『itahcara』3, pp.33-42, itahcara 創刊号編集事務局.
- 楠本克子(2004)「上田とし氏のウウエベケレ～狼の襲撃から危うく難を逃れた女の話～」『itahcara』4, pp.20-23, itahcara 創刊号編集事務局.
- 久保寺逸彦(1977)『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店.
- 佐藤知己(2008)「フクロウ神の神謡」『アイヌ語文法の基礎』 pp.282-286, 大学書林.
- 佐藤知己(2008)「タヌキの毛皮を着ていて大きな鳥にさらわれた娘の物語」『アイヌ語文法の基礎』 pp.319-323, 大学書林.
- 佐藤知己(2012)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』1, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

- 佐藤知己(2013)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』2, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2014)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』3, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2015)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』4, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2016)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』5, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2017)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』6, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2018)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』7, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己(2019)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』8, 北海道大学
アイヌ・先住民研究センター.
- 白石英才(2002)「アイヌ語沙流方言の昔話—上田トシのウエペケレー」『環北太平洋の言語』
8 (「環太平洋の言語」成果報告書 A2-012), pp.71-93, 大阪学院大学情報学部.
- 白石英才(2003)「アイヌ語沙流方言の昔話—上田トシのウエペケレ 2—」『環北太平洋の言
語』10 (「環太平洋の言語」成果報告書 A2-033), pp.111-137, 大阪学院大学情報学部.
- 白石英才(2004)「アイヌ語沙流方言の昔話—上田トシのウエペケレ 3—」『環北太平洋の言
語』11, pp.179-208, 北海道大学大学院文学研究科.
- 田村すず子(1984)『アイヌ語音声資料 1 —ワテケさんとサダモさん』早稲田大学語学教育
研究所. 【ア音 1】
- 田村すず子(1985)『アイヌ語音声資料 2 —ワテケさんの昔話』早稲田大学語学教育研究所.
【ア音 2】
- 田村すず子(1986)『アイヌ語音声資料 3 —サダモさんの昔話』早稲田大学語学教育研究所.
【ア音 3】
- 田村すず子(1988)『アイヌ語音声資料 5 —二風谷の昔話と歌謡・神謡』早稲田大学語学教
育研究所. 【ア音 5】
- 田村すず子(1989)『アイヌ語音声資料 6 —国松さんと幸作さんの昔話』早稲田大学語学教
育研究所. 【ア音 6】
- 田村すず子(1991)『アイヌ語音声資料 7 —サダモさんのユーカラ 1. 村焼き国焼き』早稲田
大学語学教育研究所. 【ア音 7】
- 田村すず子(1993)『アイヌ語音声資料 8 —サダモさんのユーカラ 2. 村焼き国焼き』早稲田
大学語学教育研究所. 【ア音 8】
- 田村すず子(1994)『アイヌ語音声資料 9 —サダモさんのユーカラ 2R. 村焼き国焼き』早稲
田大学語学教育研究所. 【ア音 9】

- 田村すず子(1997)『アイヌ語音声資料 10 一川上まつ子さんの昔話と神謡』早稲田大学語学教育研究所. 【ア音 10】
- 田村すず子(1998)『アイヌ語音声資料 11 一シヌタプカの少女』早稲田大学語学教育研究所. 【ア音 11】
- 田村すず子(1999)『アイヌ語音声資料 12 一ワテケさんの神謡』早稲田大学語学教育研究所. 【ア音 12】
- 田村すず子編(2001)『アイヌ語沙流方言の音声資料 1 一近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡—』大阪学院大学情報学部.
- 田村すず子編(2002)『アイヌ語沙流方言の音声資料 2 一近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡—』大阪学院大学情報学部.
- 田村すず子編(2003)『アイヌ語沙流方言の音声資料 3 一近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡—』大阪学院大学情報学部.
- 千葉大学(2015a)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次(北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 1/3』千葉大学.
- 千葉大学(2015b)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次(北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 2/3』千葉大学.
- 千葉大学(2015c)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次(北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 3/3』千葉大学.
- 中川裕(1992)「アイヌ語文字化資料から」『国文学解釈と鑑賞』第57巻7号, pp.33-37, 至文堂.
- 中川裕監修(1995)『カムイユカラ』片山言語文化研究所.
- 中川裕(2000)「アイヌ口承文芸テキスト集 1 白沢ナベ口述 狼から逃れた娘」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』3, pp.52-66, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 中川裕(2001)「アイヌ口承文芸テキスト集 2 白沢ナベ口述 主人を助けられなかった犬」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4, pp.77-94, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 中川裕(2002)「アイヌ口承文芸テキスト集 3 白沢ナベ口述 トバットゥミから逃れたウライウシナイの少年」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』5, pp.111-143. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 中川裕(2003)「アイヌ口承文芸テキスト集 4 白沢ナベ口述 ナナカマドのイナウで伝染病の神を倒した」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6, pp.107-120, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 中川裕(2004)「アイヌ口承文芸テキスト集 5 白沢ナベ口述 ワウォリ：アオバトが生まれたわけ」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』7, pp.161-174, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 中川裕(2005)「アイヌ口承文芸テキスト集 6 白沢ナベ口述 兄に殺されかけ、犬に救われた」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』8, pp.151-184, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

座.

中川裕(2006)「アイヌ口承文芸テキスト集 7 白沢ナベ口述 狼が人間の母親に虐待された」
『千葉大学ユーラシア言語文化論集』9, pp.219-256, 千葉大学ユーラシア言語文化論講
座.

中川裕(2008)「アイヌ口承文芸テキスト集 8 白沢ナベ口述 ユカライルパイェ：シヌタプカ
人、石狩人と戦う」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』10, pp.291-313, 千葉大学ユー
ラシア言語文化論講座.

中川裕(2009)「アイヌ口承文芸テキスト集 9 白沢ナベ口述 カニに手足が生えるわけ」『千
葉大学ユーラシア言語文化論集』11, pp.113-132, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

中川裕(2010)「アイヌ口承文芸テキスト集 10 白沢ナベ口述 ペナンペ金の子犬を授かる」
『千葉大学ユーラシア言語文化論集』12, pp.163-185, 千葉大学ユーラシア言語文化論
講座.

中川裕(2011)「アイヌ口承文芸テキスト集 11 白沢ナベ口述 キネズミに妹をさらわれた男」
『千葉大学ユーラシア言語文化論集』13, pp.95-115, 千葉大学ユーラシア言語文化論講
座.

中川裕(2012)「アイヌ口承文芸テキスト集 12 白沢ナベ口述 ユカライルパイェ 敵の村の美
女を妻に迎えたシヌタプカウシクル」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』14, pp.179-
213, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

中川裕(2013)「アイヌ口承文芸テキスト集 13 白沢ナベ口述 チセコロカムイの怒り」『千葉
大学ユーラシア言語文化論集』15, pp.175-204, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

中川裕(2015)「アイヌ口承文芸テキスト集 14 白沢ナベ口述 ウエペケレ 和人の殿様にもら
われた男の子」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』17, pp.135-167, 千葉大学ユーラシ
ア言語文化論講座.

中川裕(2016)「アイヌ口承文芸テキスト集 15 白沢ナベ口述 ウエペケレ 悪おじと少年」『千
葉大学ユーラシア言語文化論集』18, pp.79-99, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

中川裕(2017)「アイヌ口承文芸テキスト集 16 白沢ナベ口述 ウエペケレ 虐待された子熊」
『千葉大学ユーラシア言語文化論集』19, pp.155-209, 千葉大学ユーラシア言語文化論
講座.

中川裕(2018)「アイヌ口承文芸テキスト集 17 白沢ナベ口述 カムイユカラ アテヤテンナ：
六つ首の狐」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20, pp.309-322, 千葉大学ユーラシア
言語文化論講座.

中川裕(2019)「アイヌ口承文芸テキスト集 18 白沢ナベ口述 カムイユカラ ソレイパソレ：
和人の若殿の物語」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21, pp.155-173, 千葉大学ユー
ラシア言語文化論講座.

平石清隆(2003)『沙流地方のウエペケレ～上田としの伝承～』

北海道教育庁社会教育部文化課編(1988)『アイヌ民話』北海道教育委員会.

北海道教育庁社会教育部文化課編(1989)『オイナ (神々の物語)』1, 北海道教育委員会. 【オ
イナ 1】

北海道教育庁社会教育部文化課編(1994)『オイナ (神々の物語)』3, 北海道教育委員会. 【オ
イナ 3】

北海道教育庁社会教育部文化課編(1998)『トゥイタク (昔語り)』2, 北海道教育委員会. 【ト
ウイタク 2】

北海道教育庁社会教育部文化課編(2000)『トゥイタク (昔語り)』3, 北海道教育委員会. 【ト
ウイタク 3】

本田優子(2001)「川上まつ子アイヌ語文例集」『アイヌ民族博物館研究報告』7, pp.9-76, ア
イヌ民族博物館.

門別町郷土史研究会編(1969)『アイヌの叙事詩』[鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康ローマ字化・訳]
門別町郷土史研究会.

■Web サイト (すべて 2020-9-30 閲覧)

中川裕、アンナ・ブガエワ、小林美紀、吉川佳見(2016-2020)「アイヌ語口承文芸コーパス
ー音声・グロス付きー」, <<https://ainucorpus.ninjal.ac.jp>>, 国立国語研研究所.

「アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ」, <<https://ainugo.ainu-museum.or.jp/>>.

「AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト」, <<https://ainugo.aa-ken.jp/>>.

初出一覧

本論文の初出および執筆の基盤とした論文、口頭発表原稿は以下の通りである。本論文作成にあたり、いずれも加筆・修正を行なった。

第4章

4.1 および 4.4

吉川佳見(2016)「アイヌ語のアスペクト的表現「kor an」「wa an」をめぐる問題について」『アイヌ語の文献学的研究(2)』pp.28-41, 千葉大学大学院人文社会科学研究科.
吉川佳見(2019)「アイヌ語の存在型アスペクト「kor an」「wa an」の意味範疇について」『ユーラシア言語文化論集』21, pp. 87-106, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

第5章

5.1

吉川佳見(2015a)『アイヌ語沙流方言の散文説話中にみる助動詞 a の機能』(千葉大学大学院人文社会科学研究科修士論文、未公刊) 千葉大学人文社会科学研究科.
吉川佳見(2015b)「アイヌ語沙流方言の助動詞 a の「完了」用法について」(2015年6月13日発表、「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班 平成27年度 第1回研究発表会、於国立国語研究所)
吉川佳見(2015c)「アイヌ語における完了表現の位置づけについて」(2015年12月19日発表、シンポジウム「ひろがる北方研究の地平線」、於札幌学院大学社会連携センター)
吉川佳見(2019)「アイヌ語の助動詞 a と証拠性」(2019年11月9日発表、日本北方言語学会第2回大会、於富山大学)

5.2

吉川佳見(2018)「アイヌ語の助動詞 aan と証拠性」『アイヌ語の文献学的研究(3)』pp.3-18, 千葉大学大学院人文公共学府.

5.1 および 5.2

吉川佳見(2020a)「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』10, pp.203-218, 富山大学人文学部.

付録

kor an / wa an / kor an と wa an の両方 / kane an / hine an と共起する動詞の一覧

■ kor an と共起する動詞

A	主体動作・客体変化動詞	
a1	客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞	
	kire	～に…をさせる
	mososo	～を起こす
	ikusa	人を(舟で川を)渡す
	kusa	～を舟で渡す [単]
	rayke	～を殺す [単]
	ronnu	～を殺す [複]
	kamuyokere	神殺しをする
	seyreka	～を煎る
	kohorak	～に…を倒す
	tuituri	～を何度も伸ばす
	ruyke	～を研ぐ
	suyesuye	～を何度も揺らす
	supa	～を煮る [複]
	popte	～を煮立たせる
	satke	～を干す
	ruyruyka	～を燃やす
	roski	立つ [複] / ～を立てる [複]
	uominaeroski	一緒に笑って立つ
	are	～を座らせる
	usi	～を…に付ける
	anu	～を置く [単]
	omare	～を…に入れる / 置く
	ukosinanpa	～を紐で縛り合わせる
	uciwpare	～を積み重ねる
	ukaosmare	～を溜める
	uk	～を取る [単]
	nina	薪を取る
	ica	穂摘みをする
	ca	～を摘む / 刻む
	risparispa	～を次々と引き抜く
	mim	～を一本一本に裂く

	pitattarke	～をほどく (?)
	etuye	～の先を切り落とす
	kotuye	～を…のところで切る
	iri	解体 (皮剥ぎ) する
	ri	～を解体 (皮剥ぎ) する
	toykohumpa	～をひどく刻む
	rura	～を運ぶ
	eawnarura	(獲物) ～をたくさん家に運び込む
	yanke	～を陸に上げる [単]
	yaokuta	(魚など) ～をどさっと岸にあげる
	cepyanke	魚を陸に上げる
	uekarpare	～を集める
	uomare	～を集める
	uekarire	～を寄せ集める [単]
	casnure	～を片付ける
	cokokse	～をこぼす
	rankeranke	～を下ろし下ろしする
	eikra	～を送る
	orante	～を…に落とす
	osurpa	～を捨てる [複]
	o	～を…に入れる
	kar	～を作る / する
	aykar	矢を作る
	otukasinkop orekasinkop ranke ranke	糸の結び目を下げ下げする (糸撚りをする)
	itese	ごぎ織りをする
	tese	～を織る
	iuta	(杵と臼で) 搗きものをする
	sitouta	団子の粉を搗く
	utek	～を使いだてする
	menokokoarpare	～を女と一緒にいかせる
	owpekare	～を真っ直ぐにする
	ahupte	～を (家などに) 家に入れる [複]
	ikokamahupte	獲物の肉を (上座の窓から) 家の中に入れる

	eunahunke	～を招待する
	aske uk	～を招く
	hokao	～を火にくべる
	otte	～を…に掛ける
	hopitare	～を終わらせる
	ninpa	～を引きずる
	ussiwekor	下人にする
	rewsire	～を泊める
	arkimatekka	～をひどく驚かせる
	ikure	～に酒を飲ませる
	ewkohonisikar	～で互いの腹を満たしあう
	caricari	～を散らかす
	pirkare	～を良くする
	wente	～を痛めつける
	eaynuwente	～に危害をもたらす
	uninka	～を苦しめる
	esipa	～を邪魔あつかいする
	ukosiuturuyruke	～を邪魔者にする
	kotarar	～を…に差し伸べる
	moymoye	～を動かす
	ukannare	互いに上にする
a2	所有関係の変化をひきおこす動詞	
	kore	～に…を与える
	korpare	～を…に与える
	ikorpare	ものを～に与える
	kowsaraypa	～に分配する
	kowsaraye	～に…を分ける
	ukousaraye	～を一緒に分け合う
	kouyna	～から…を奪う [複]
	eunkeray	～をもらう
	iasinke	賠償を出す
B	主体変化動詞	
b1	意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞	

ek	来る [単]
arki	来る [複]
koarki	～（のところ）に来る [複]
arpa	行く [単]
paye	行く [複]
ekimne	山に行く
ekimun	山に行く（?）
kimun	山に行く
ahun	入る [単]
soyne	外へ出る [単]
san	山手から浜手へ下りる／前へ出る [単]
yan	沖から陸に向かう／陸に上がる [単]
yap	沖から陸に向かう／陸に上がる [複]
hemesu	（川、山、木などに沿って）のぼる [単]
hemespa	（川、山、木などに沿って）のぼる [複]
rikin	上る [単]
koemuemu	～を這いのぼる
eturasiturasi	～を登る
oika	～を越える
kus	～を通る
iwak	（山仕事や畑の仕事から）帰る
koywak	～（のところ）に通う
sinewe	遊びに行く [単]
sinewpa	遊びに行く [複]
kosinewe	～のところへ遊びに行く [単]
ukosinewe	訪問しあう [単]
ukosinewpa	訪問しあう [複]
sinewearpa	訪ねていく
kopayoka	～を訪問する
ukopayoka	互いに訪問しあう
ukoapkas	お互いに行き来する
koykutasa	～の酒宴に赴く [単]
kesanpa	～を追いかける
hosipi	帰る [単]

	eyaykohosipi	家に戻る
	uekarpa	集まる
	sinusinu	ずっと這う
	erutrutke	～をずっと移動する
	kohemuymuye	～でふて寝する [単]
	rawosma	下方に飛び込む
	sini	休む
	yayhesere	休む
	hotke	横になる
	ewkotumam	～を二人で抱いて寝る
	tere	～を待つ
	teretere	～を待つ
	eyokoyoko	～を待ち伏せする
	apekur	火にあたる
	eyaykotutturi	(～で?) 体を伸ばす
	urakotesure	羽すれすれに飛ぶ
	suwanu	(鳥が) 滑空する
	rew	(鳥が枝に) とまる
	yayriterite	自分の体を慣らす
	eyaykamuynerere	～で立派な神になる
	enispene	～で長者になる
	eyaypikare	～で自分を高める
	se	～を背負う
	temkunnere	～をかつぐ
	kasi ose	～を背負って持っていく
	yayosura	身を投げ出す
	sipine	身支度をする [単]
	yayetokoyki	身支度をする
	eyayetokoyki	～の身支度をする
	ekimneeyayetokoyki	山へ行くための身支度をする
	sipita	装束を解く
	tumihayokpa	武装する
	yayowpekare	人に気に入られるようにする
	koyayowpekare	～に気に入られるようにする

	kosiknaraante	～に対して目を伏せる (?)
	yaykorpore	～を自分に与える
	iemetu	酒を容器に入れてもらって持ち帰る
	siewtannere	～と同族になる
	rewsi	泊まる
	korewsi	～(のところ)に泊まる
	kotoritori	～に泊まる
	usatturasi	下座にずらっと座る
	rawkus	潜る
b2	無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞	
	hetuku	生える [単]
	kosikirmampa	～で寝返りを打つ
	tuykansikirmanpa	何度も寝返りを打つ
	nuwapkosikirumampa	唸って寝返りをうつ
	pakar	すすける
	eukopaste	もたれ合う
	sireok	引っ掛かる
	kopokor	子をもうける
	ukopokor	二人の間に子をもうける
	uesukup	互いに成長する
	epirka	～で幸せになる
	uepirka	共々に幸せになる
	ru	溶ける
	ratki	垂れ下がる
	ruyruy	降り注ぐ
	tattarke	煮え立つ
	(supuya) at	(煙が) 立ち上る
	cik	ぼたぼたと垂れる
	pop	煮立つ
	sirpeker	夜が明ける
	osumtapes	(干してある肉から) 油が流れる
	osumtacik	(干してある肉から) 油が垂れる
	osirmuke	見えなくなる
	ecupyoni	～で何ヶ月も過ぎる

C	主体動作動詞	
c1	主体動作・客体接触をあらわす動詞	
	ipe	食事する
	ipeno	よく食べる
	onumanipe(pa)	夕食を食べる
	ipere	～に食事をさせる
	e	～を食べる
	ere	～に…を食べさせる
	parkoinunte	～に口移しで食べさせる
	iku	飲酒する
	ku	～を飲む
	kuykuy	～を噛む
	kemkemnu	～を舐める
	kemkem	～をぺろぺろ舐める
	koyki	～をいじめる／捕える
	ekoyki	～を…でいじめる
	kik	～を殴る／叩く
	kikkik	～を何度も殴る／叩く
	temesirkik	手であたりを叩く
	pekokikkik	～を水と一緒に叩く
	esirkikkik	～を激しく何度も叩きつける
	toykokikkik	～をひどく何度も殴る
	enikik	～を木にバンバンぶつける
	komuraypa	～を抱きしめる
	eturasturas	～にとびかかる
	eukaopiwiki	～にとびかかる (?)
	puyarkoterke	窓にとびかかる
	coknure	キスする
	ecoknure	～にキスする
	cokcoksekar	～にキスする
	kosetane	～と不純な性交をする
	ikaopiwiki	人を助ける
	eikaopiwiki	～で助ける

	ekaopiwiki	～で助ける
	ikasuy	人の手伝いをする
	kasuy	～を手伝う
	ekasuy	～に関して…を手伝う
	eykasuy	～する手伝いをする
	ukasuy	助け合う
	eukasuy	～のために協力し合う
	arukasuy	手伝いあう
	pirpa	～を拭く [複]
	raraypa	～を撫でる
	koruyruypa	～の体を撫でて挨拶する [複]
	esiru	～を…でこする
	yayesiru	自分の体を～にこすりつける
	parunpekonumnumte	～に舌を吸わせる
	iruyke	(刃物を) とぐ
	koypuni	～に料理をよそる [単]
	ouri	～を掘る [単]
	tokpa	～をついばむ
	oprari	槍を押さえつける
	eywanke	～を使う
	ekoorsutke	～に…を勧める
	ukomuy	互いにシラミを取る
	konoytanke	～に甘える
	iorot	人の集まりに参加する
c2	認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞	
	nukar	～を見る
	nukare	～に…を見せる
	inkar	見る
	esikenukar	～を見る
	osikkurkote	～をじっと見つめる
	hehewpa	覗く
	siruwante	あたりを見回して調べる
	esiruwante	～を探してあたりを見る
	esikkankari	～であちこち見回す

	sipiskaniohosari	まわりを見渡す
	isikreyepare	目を這わせる
	huymampa	～を注意して見る
	ukoukpare	～を共に見上げる
	unukarpare	～を互いに見せ合う
	sikerayke	～をにらみつける
	toykosikerayke	～をひどくにらみつける
	erikinukar	～を見上げる
	sikkasma	～を見守る
	kasikkasma	～を見守る
	yaykakewe	自分の身を守る
	kasi huye	～を看病する
	epunkine	～を守る
	inu	聞く
	nu	～を聞く
	nure	～に…を聞かせる／知らせる
	ikokanu	よく聞く
	kokanu	～をよく聞く
	itak	話す
	koytak	～に言う
	ukoytak	話し合う
	ewkoytak	～について話し合う
	uenewsar	よもやま話をしあう
	euenewsar	～の話をしあう
	eyaynewsarka	～で退屈をまぎらわす
	ukoysoytak	語り合う
	ewkoysoytakpa	～について語り合う
	hawean	言う [単]
	haweoka	言う [複]
	ye	～を言う
	hawkarpare	～を言う (?)
	eyaykoormom	ぶつぶつ言う (?)
	yayepakasnu	ひとり言を言う
	yaykopinupinu	ひとり言を言う

	hawkokari	～を何度も繰り返して言う
	isoytak	物語る
	eysoytak	～について物語る
	koysoytak	～に話して聞かせる
	ekoysoytak	～に…について話して聞かせる
	koytakmuye	～に言い残す
	ukouepeker ukoyukar	ウエペケレやユカラを言い合う
	ukopiitak	ひそひそと言葉を交わす
	kouepekennu	～に事情を尋ねる
	yayasurani	自分の身に起こったことを知らせる
	caranke	談判する
	kocaranke	～に談判する
	sinotcaki	歌を歌う
	yukar	ユカラをする
	kosakayokar	～を怒鳴りつける
	arukosakayokar	ひどく怒鳴りつける
	kewehomus	～に危なかったことの見舞いを言う
	ueyayrenka	互いに会えた喜びを言い合う
	ukosontay	相談する
	uoruspenu	相談する
	eyop	～を呼ぶ
	eporose	～によって…を言い表す
	itaktasare	～に返答をする
	ukohetceturpa	互いに相槌をうつ
	ukoorsutke	互いに励ましあう
	pasrota	罵る
	kopasrota	～を罵る
	ukokopasrota	～を皆で罵る
	yupyupkere	～にきつく言い聞かせる
	pawetenke	～に指図する
	ikaspaotte	人に指図する
	kaspaotte	～に命じる
	ekaspaotte	～に…を命じる
	kopak	～を咎める

	koypak	～を咎める
	homekarpa	～を褒める
	ekosunke	～について…に嘘をつく
	inomi	お祈りする
	nomi	～に祈る
	ukonomi	～に皆で祈る
	kamuynomi	神に祈る
	pasekurnomi	～に深く祈る
	kamuyorotak	神に祈る
	kamuynomire	～を神に祈らせる
	kamuy oro pakuste	神に祈る
	okanomi	供養する
	icarpa	供養する
	koycarpa	～を供養する
	onkami	拝礼する
	koonkami	～に拝礼する
	ukoonkami	共に拝礼する
	inonnoytak	祈る
	einonnoytak	～のことを祈る
	nonnoytak	～を祈る
	yayoturimkote	悪い出来事を知らず前触れの声あげる
	humsehumse	(魔払いの) 雄たけびの声あげる
	ukopewtanketurpa	皆で危急の叫び声をあげる
	ukokirirse ukohererse	互いに金切り声をあげ互いに咳き込む
	hunara	～を探す [単]
	hunarpa	～を探す [複]
	koramuuwante	～に対して心を探る
	ramhunarare	～を心の中で探す
	etukarkar	女性の挨拶の所作をする
	reko	～に名づける
	oyraoyra	～を忘れる
	pakasnu	～に教える
	epakasnu	～に…を教える
	etanontaro	～に頼む

c3	意志的動作をあらわす動詞	
	iki	する
	ki	～をする
	ukar	互いにする
	ekarkar	～をする
	osiruwenruy	～を激しく行う (?)
	moymoyke	動く
	apkas	歩く
	apkasapkas	歩き回る
	imekeapkas	食べ物を配って歩く
	omanan	歩き回る
	koomanan	～(のところに) 通う
	pastetterke	よちよち歩きする
	hoyupu	走る [単]
	hoyuppa	走る [複]
	ehoyupu	～を走り回る
	uhoyuppare	一緒に走り回る
	orounu	～について行く
	reyereye	這いずり這いずりする [単]
	reypareypa	這いずり這いずりする [複]
	ukoyki	喧嘩する
	(tanpaku) epakpakse	(煙草) ～をふかす
	ewonne	顔を洗う
	yaynankapirpa	顔を拭く
	kemeyki	針仕事をする
	usamkemnu	針仕事をする
	sinot	遊ぶ
	esinot	～で遊ぶ
	aysinot	弓矢遊びをする
	uturasinot	一緒に遊ぶ
	yayturasinot	一人で遊ぶ
	tapkar	踏舞する
	tapkattapkar	踏舞する
	horippa	踊る [複]

	niwenhorippa	凶事の際の踏舞をする
	uhorippare	皆で一緒に踊る
	ueterke	一緒に飛び跳ねる
	terketerke	びよんびよん跳ぶ
	tetterke	びよんびよん跳ぶ
	terke kane pas kane	跳ぶように走るように
	yayoterkeeciwi	跳ねて走り回る
	hocikacika	(苦しんで) ばたばた暴れる
	hotakpatakpa	(苦しんで) ばたばた暴れる
	wenpurikor	悪事をする
	sikesar	悪事をする
	iramante	狩猟する
	okuyma	小便する
	okuyma osoma	小便大便をする
	kuetunnay	用を足す
	nurappa	～を供養する
	konurappa	～を供養する
	sinnurappa	先祖供養をする
	nepki	働く
	ukonepki	一緒に働く
	ewmonkatanure	～で一緒に働く
	yaykoyuptek	一生懸命働く
	suke	料理する
	sukekoarikiki	料理を一生懸命やる
	sukeetokoyki	料理の準備をする
	sukekotekkankari	料理を手早くする
	yayparosuke	自炊する
	yay'ipere	自炊する
	supuyaatte	炊事の煙をたてる
	apeari	火を焚く
	nuwap	うめく／出産する
	keci	うめく
	hese	息をする
	isenuwap	しわぶく

	isapte	給仕する
	peray	釣りをする
	ihuraye	洗濯する
	huraye	～を洗濯する
	hurayeyarkar	～を洗わせてもらう
	cepsatsatu	魚を干す
	suhuraye	鍋を洗う
	hosura	陰部をちらちら見せる
	hepuni	頭を上げる
	kohepoki	～に頭を下げる
	toykohepokihepoki	何度も頭を下げる
	herapparappa	何度も頭を下げる
	corewewe cotesusu	前へ屈んだり後ろへ反り返る
	kaeka	糸よりをする
	raymik	女性の挨拶（礼拝）をする
	sakekor	酒を持つ
	yayunakotaci	自分に灰をまぶす
	turepetuye	ウバユリを切る
	suhurayeitankihuraye	鍋を洗い腕を洗う
	yaykaryaykar	いろいろな真似をする
	mintarnupa	庭を掃く
	ihunarpa	人探しをする
	henkotpa	～に頷く
	ukohemuhemu	互いに頷く
	ewaraewara	フーフー吹く
	ni	(汁など) ～を吸う
	nire	～に (汁など) …を吸わせる
	amamuomare	穀物を拾い集める
	haruuekarpare	食糧を集める
	harukor	食糧を得る
	arukoterke	取っ組み合う
	yayrek kikikiki	もみあげを掻き掻きする
	nipukar	流木を乾かすために互いに斜めに立てかけてもたれ合わせる

	sirkerkeri	あたりをごそごとと引っ掻く
	raporapo	羽ばたく
	ukoraporapora	飛び交う
	uymam	交易する
	sinonruki a sinonruki a	生唾を飲み飲みする
	ukotonotoante	酒宴を開く
	etokoyki	～の準備をする
	ukotumuncikor	互いに殺戮しあう
	koarikikpa	～の看病をする
	hetaritari	頭をそらせて上げる
	yaymonikor	忙しくする
	eyaymonikor	(仕事) ～を自分だけにする
	koorsutke	～をあおりたてる
	sitemraypa	手探りする
	cukokarikari	くるくると巻く
	utamkirpare	(刀など) ～の素振りをする (?)
	yaywennukare	～を苦しめる
	sikoyaywennukare	～を苦しめる
	yayramusitnere	苦しませる
	imekkore	～に食料を分け与える
	emonkataunure	～を教わる (?)
	homekar	～を褒める
	rusuwekarpare	毛皮を溜める
	nuye	～を彫る
	ke	～を削る
	carpa	～をまき散らす
	toyke	土を掘る
	toyta	畑仕事をする
	wakkata	水汲みをする
	turepta	ウバユリ掘りをする
	turepkar	オオウバユリを採る
	yukkoterke	鹿にとびかかる
	karkarse	転がる
	yaykarkarsere	のたうち回る

	uhawepopo	大勢でがやがや騒ぐ
	yaytuytuye	自分の体のほこりを払い落とす
	tekutometa	(喜んで)手を叩く
	hokerekere	足をばたばたさせる(だだをこねる)
	omkeomke esnaesna	(訪問を知らせるために)咳やくしゃみをする
	sihawnuyar	(訪問を知らせるために)物音をたてる
	kaneuomare	金集めをする
	ukoterke	取っ組みあいをする
	ukoterkere	(子供)～を(かわいがって)取り合いする
	mukemuke	押し合いへし合いする
	ukesanpa	追いかっこする
	imekyanke	食べ物を用意する
	kopan	～を断る
	kokopan	～に対して…を禁止する
	tu pinu hus re pinu husse ekar	二つの微かな(病人の治療のための)息吹き、三つの微かな息吹きをする
c4	長期的動作をあらわす動詞	
	resu	～を育てる [単]
	respa	～を育てる [複]
	eresu	～で…を育てる
	ewrespa	～で子供を育てる
	pirkaresu	～を大事に育てる [単]
	pirarespa	～を大事に育てる [複]
	pirkareska	～を大事に育てる
	omapresu	～をかわいがって育てる [単]
	omaprespa	～をかわいがって育てる [複]
	pirkakurresu	～を大事に育てる
	epirkatomteresu	～で…を大事に育てる
	yaykoresu	～を一人で育てる
	ukopekapeka	～を大事にする
	nunuke	～を大事にする
	ukonunuke	～と一緒に大事にする
	pirkanunuke	～の面倒をよくみる

	pirkakurnunuke	～を大事にする
	tomteresu	～を大事に育てる
	pirkakurrunere	～を大事に育てる
	epirkakurrespa	～をよく大切に育てる
	pirkakor	～をよく育てる
	ouneus	～を世話する (?)
	kouerayrinne	～の子守をする
	nukannukar	～の面倒をみる
	ikaoyki	援助する
	kasi oyki	～の面倒をみる
	paro oyki	～を養う
	siparooykire	養ってもらう
	yayparoyki	自活する
	eyayparoyki	～で自活する
	ewparoyki	皆～を食べて暮らす
	parosuke	～の食事の世話をする
	ueniste	頼りあう
	ukoeniste	頼りあう
	omap	～をかわいがる
	omapkar	～をかわいがる
	eomapkar	～をかわいがる
	koomap	～をかわいがる
	koiomap	～の子どもを特に愛する
	ikoyomap	人の子をかわいがる
	ukoomap	一緒に～をかわいがる
	epuni	畑の収穫物で（倉）を立てる [単]
	epunpa	畑の収穫物で（倉）を立てる [複]
	ipe imi	衣食をする
	ukatayerotke	仲良くする
	ukoyayeus	暮らす
	ukoyaysamne	何事もなく暮らす (?)
	uheturaste	一緒に暮らす
	ukatayrotke	仲良く暮らす
	ukotokuyekorpa	仲良く暮らす

	eyayramkopaste	～で自分で何でもやって暮らす(?)
	hese attom sampe attom hekote	仲睦まじく暮らす
c5	非意志的な動き(現象)をあらわす動詞	
	mina	笑う
	eminarusuy	～を可笑しく思う
	eeminarusuy	～を可笑しく思う
	ominausi	～を笑う
	eominausi	～を笑う
	uominausi	笑いあう
	cis	泣く
	ciskar	～を泣く
	rayciskar	大泣きする
	cisus	慟哭する
	picis	すすり泣く
	eyayciste	～について一人で泣く
	naytaro	泣く
	paraparak	大声で泣き叫ぶ
	rayparaparak	大声で泣き叫ぶ
	poroparaparak	大声で泣き叫ぶ
	ukoparaparak	一緒に泣き叫ぶ
	ucistaspare	一緒に泣く
	ciskoesuttanke	泣いてしゃくりあげる
	cisoroytak	泣きながら言う
	cisun	死を悲しんで亡骸に手を当てて泣く
	(nupe) ~ rankeranke	(涙を) ~ 何度もこぼす
	nupekorapapse	涙をはらはらこぼす
	yaynupe ka atte	自分の涙も流す
	umusa	抱き合って泣く
	rek	鳴く
	etoro	いびきをかく
	ukoetoroturpa	皆でいびきをかく
	aysuye	居眠りをする
	etupecikka	鼻水を垂らす
	tususke	震える

	yaysawsawe	身もだえする
	emik	(犬が) ~に向かって吠える
	ukonoyoyse	唸りあう (?)
	puyrototke	(煙が) もうもうと出る
	cihopunire	起こる
	cawrototke	響き渡る
	karikari	響く
	kewrototo	ごろごろ鳴る
	mesramesra	(いびきの音が) ごうごうと響く
	ukomikemike	互いにぴかぴか光る
	cukopoyepoye	(川などの水が)激しく渦巻く
	pataparse	煮えたてで湯気が立っている
	yaykarire	自身をめぐらす
	asur as	噂が立つ
	ciasuraste	人の噂に立つ
	siasuraste	名が通る
	easuras	~で有名になる
	pasrototke	パチパチ燃える
	sircipukrototo	プツプツと音がする
	pene	(水気が多くて) ぐちゃぐちゃである
	raysisuye	ひどく揺れる
	yakukor	役目を持つ
	sittewnintewnin	光る
	supuyapo at	煙が立ち上る
	kurkotkurkot	キラキラ輝く
	ukomoyoyke	うごめく
	tasmaktasmak	息が切れる
	nukoan	~の獲物に恵まれる [単]
	nuwe koan	~の獲物に恵まれる [単]
	nuwe kooka	~の獲物に恵まれる [複]
	tupsumawekor repsumawekor	二つの獲物三つの獲物を獲る
	ruokake ruetoko coyranke	道の前、道の後ろに、獲物が下ろされる (何の苦労もせずに獲物がたくさんとれる)
	emonipirka	~で猟運がある

D	思考・感情・知覚動詞	
d1	思考をあらわす動詞	
	ramu	～を思う
	yaynu	思う
	ramuan	思う [単]
	ramuoka	思う [複]
	yaykosiramsuypa	考える [複]
	eyaykosiramsuypa	～について考える [複]
	yaykouepeker	悩んでいろいろと考える
	ewkohoniskar	ふたりで考える
	yayesanniyo	算段する
	esanniyo	～を算段する
	eyaysanniyo	～に気を配る
	eraman	～がわかる／知っている
	eramiskari	～を知らない
	erampewtek	～がわからない
d2	感情をあらわす動詞	
	iruska	怒る
	koiruska	～に腹を立てる
	ruska	～に怒る
	yaykoyruska	自分に対して怒る
	kohepututu	～にふくれっ面をする
	ekonukosne	～について…を憎む
	yaywennukar	苦労する
	koyaywennukar	～に苦しむ
	irampekamama	苦しい思いをする
	eyaykorampetetne	～で苦労する
	erayrinne	～で苦労する
	kimatek	驚く
	ekimatek	～に驚く
	raykimatek	とても驚く
	eraykimatek	～にとっても驚く
	okunure	～に驚きあきれる

	sirkirap	困る
	esirkirap	～に困る
	samesirkirap	～のことで困る
	eramu ka pekamam	～で困る
	eyaysirkirapte	～にひとり苦しむ
	ukosirkirap	共々苦勞する
	ukoesirkirap	共々～に苦勞する
	yayramsitne	苦しむ
	eyayramu ka sitne	～で苦しむ
	ukoyayeramusitne	互いに苦しむ
	ukoerampekamama	皆が苦勞する
	eyayramuwente	～を気に病む
	esampesituriri	～でほっとする
	yaykotuyasi	～で安心である
	eyaykotuyasi	～で安心である
	eramuhemesusu	～に安心する
	esampesituri	～で安心する
	samperakka	～で気持ちが落ち着く (?)
	ekiroroan	～を面白く思う
	okunnure	～に驚きあきれる
	iokunnure	驚きあきれる [単]
	iokunnurpa	驚きあきれる [複]
	weniokunnure	ひどく驚きあきれる
	aroserke	ひどくあきれる
	siokunnure	えらぶる
	esiokunnure	～を誇りに思う
	kosiramuisamte	(～に対して?) とぼける
	erayap	～に感心する
	mismu	寂しく思う
	yaykomismu	一人で寂しく思う
	yaypuktacis	一人で悲しむ
	eyayrampokiwen	～を残念に思う
	ikopuntek	喜ぶ
	yaykopuntek	喜ぶ

	kopuntek	～を喜ぶ
	eyaykopuntek	～を喜ぶ
	eukoyaykopuntek	～と一緒に喜ぶ
	iekanunara	待ち焦がれる
	ekanunara	～を待ち焦がれる
	ekannara	～を待ち焦がれる
	kewtumu wen	気分が晴れない
	yaykewtumwen	気持ちが晴れない
	yaykewtumwente	気持ちが晴れない
	ekewtumwen	～のことがつらい
	nukuri	(億劫で) ～できない
	nukurpa	(億劫で) ～できない [複]
	ipenukuri	(億劫で) 食事できない
	annukuri	(ひどく億劫で) ～できない
	ununiununi	～を面倒がる
	ikoytupa	うらやましいと思う
	isitoma	恐ろしく思う
	wenisitoma	ひどく恐ろしく思う
	eyaysitoma	～を恥ずかしがる
	yaytuyaskarap	～を惜しむ
	koipewnara	～を物惜しみする
	sitne	(心が) よじれるように苦しむ
	ekonramsitne	～でもだえ苦しむ
	eyayramukasitne	～を悔しく思う
	iosserkere	困ったと思う
	koyairayke	～に感謝する
	eykoytupa	～をうらやむ
	poeykoytupa	子を欲しがる
	yayepataraye	遠慮する
	eyaytupa	～したがる
	esirkosetak	～に飽きないでいる (?)
	aynueniste	人間を頼りにする
	yupnatara	信頼する
	eniste	～を頼りにする

	kotuyasi	～を信頼する
	oyamokte	～を不思議に思う
	eoyamokte	～を不思議に思う
	iekenkenu	敵がくるのを恐れてびくびくする
	eyaykopezka	～を恨む
	epotara	～を心配する
	eyam	～を心配する
	esinpay	～を心配する
	eranak	～を心配する
	erayninne	～で苦勞する
	kotomka	～を好む／～と合う
	ikemnu	気の毒に思う
	kemnu	～を気の毒に思う
	erampokiwen	～を気の毒に思う
	eyayerampokiwen	～をいやだと思う
	simuyamuya	いやいやをする
	ikaraski	もったいない
	okaramotte	～を名残惜しく思う
	koramukaotte	～を名残惜しく思う
	eyayramikar	～をあきらめる
	koehese	～のことで…をいい気味だと思う
	korewen	～につらくあたる
	koytakearka	～につらくあたる
	yayrampekamama	不愉快に思う
	kewtumu wen	気分が悪い
	keske	～を嫌う
	eemaka	～を嫌う
	eramasu	～が好きだ
	ramucuptek	心細い
	koayneayne	～に対してとげとげしい
d3	知覚・感覚をあらわす動詞	
	arikiki	一生懸命やる
	koarikiki	～を一生懸命やる
	eaykap	～ができない

	koyaykus	～ができない
	koyayeus	～に手間取る
	oripak	恐れ慎む
	eoripak	～を畏れる
	kooripak	～を畏れる
	koyayoripak	～を畏れる
	ukoeoripak	～に対して皆でかしこまる
	humas	音が聞こえる／感じがする
	haw as	声がする
	etoranne	～を面倒くさがる
E	状態性動詞	
	an	ある／いる [単]
	un	～に属する
	isam	ない
	ne	である
	kor	～を持つ
	utura	一緒にいる
	hekote	～に連れ添う [単]
	eus	～の先に付いている
	pirka	良い／美しい
	iwanke	元気である
	iperusuy	空腹である
	sikopayar	～のごとくである
	ison	狩りがうまい

■ wa an と共起する動詞

A	主体動作・客体変化動詞	
a1	客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞	
	ronnu	～を殺す [複]
	cire	～を焼く／煮る
	supa	～を煮る [複]
	satke	～を干す
	satsatu	(魚や肉など) ～を干す
	tuye	～を切る [単]
	roski	立つ [複] / ～を立てる [複]
	anu	～を置く [単]
	konotukamure	～をくわえる
	uk	～を取る [単]
	iri	解体 (皮剥ぎ) する
	ri	～を解体 (皮剥ぎ) する
	rura	～を運ぶ
	kimorura	～を山へ運ぶ
	yanke	～を陸に上げる [単]
	eyaotke	～を陸に乗り上げる
	sap	山手から浜手へ下りる / 前へ出る [複]
	osura	～を捨てる [単]
	osurpa	～を捨てる [複]
	o	～を…に入れる
	oroo	～を入れる
	omare	～を…に入れる / 置く
	ahunke	～を (家などに) 入れる [単]
	ranke	～を下ろす [単]
	kar	～を作る / する
	cisekar	家を建てる
	kotankar	村を作る
	sikekar	荷作りをする
	kikinni-kutek-kar	ナナカマドの柵を作る
	toproski	竹を立てる
	kinaca	草を刈る

	sirkar	あたりを（～の様子に）する
	rewsire	～を泊める
	sikoyantonere	～を泊める
	iuta	（杵と臼で）搗きものをする
	pirkare	～を良くする
	kire	～に…をさせる
	karar	～を…に作らせる
	hotkere	～を寝かせる
	sinire	～を休ませる
	ekte	～を来させる [単]
	siknure	～を生かす／生き返らせる
	siepunkinere	～に自分を守らせる
	wentarapte	～に夢に見させる
	sirepare	～を到着させる
	sina	～を縛る
	sirkosina	～をきつく縛る
	siosmakomare	～を自分の後ろに入れる
	ninu	～を縫う
	yaykoapaseske	自分の家の戸を閉める
	koetaye	～を引っ張り上げる
	esirkopaste	～を立てかける
	upsire	～を伏せる
	ante	～にいさせる
	atte	～を掛ける
	sere	～に…を背負わせる
	nuyna	～を隠す
	onuyna	～を隠す
	inuyna	隠す
	eesina	～を隠す
	tupetupe	～を縛りつける
	siekotannere	～を村の一員にする
	eokokte	～を…にひっかける
	situtanure	～を自分の方に向ける
	muncatcari	ごみを散らかす

	etoyta	～を植える
	uekarire	～を寄せ集める [単]
	apekor	火を焚く
	apeo	火を焚く
	apekure	～を火にあたらせる
	esinnaari	～を別につくる
	turi	～を伸ばす [単]
	tustekka	～をポーっとさせわからなくさせる
	kohokuste	～の上に...を倒す
	siresikte	～でいっぱいにする
	esikte	～を...でいっぱいにする
	opusnaracitkere	～をぶら下げる (?)
	seske	～を覆う
	ekamure	～を上にかぶせる
	kamure	～に...をかぶせる
	kokari	～を...に包む
	yantokor	～を泊める
	yaykokomo	(子ども) ～を自分の手もとに離さずに置いておく
	upsoromare	～を懐に入れる
a2	所有関係の変化をひきおこす動詞	
	kore	～に...を与える
	ramatkore	～に魂を与える
	yakukore	～に役を与える
	souk	借財をする
	esouk	～を借りる
	ekasnukar	～に...を授ける
	ukousaraypa	～と一緒に分け合う
	etomte	～に...で財産を与える
	eykosi	～に任せる
B	主体変化動詞	
b1	意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞	
	as	立つ [単]
	astustekka	仁王立ちする

	a	座る [単]
	rok	座る [複]
	urorerok	並んで座る
	usamerok	並んで座る
	urokpare	皆で座る
	mehuntokiki	片ひざを立ててその上にあごをのせて座る
	ukomehuntokiki	互いに片ひざを立ててその上にあごをのせて座る
	ek	来る [単]
	arki	来る [複]
	arpa	行く [単]
	oarpa	～へ行く [単]
	paye	行く [複]
	ka opas	～を助けに行く
	eoma	～のほうへ向かっていく
	yaypekare	～に向かっている
	ekimne	山に行く
	kimun	山に入る
	ahun	入る [単]
	ahup	入る [複]
	osma	～に入る
	soyne	外へ出る [単]
	asin	外へ出る [単]
	san	山手から浜手へ下りる／前へ出る [単]
	yan	沖から陸に向かう／陸に上がる [単]
	yap	沖から陸に向かう／陸に上がる [複]
	hemesu	(川、山、木などに沿って) のぼる [単]
	rikin	上る [単]
	ran	下りる [単]
	kus	～を通る
	iwak	(山仕事や畑の仕事から) 帰る
	hoppa	～を残して去る
	sinewpa	遊びに行く [複]
	eot	～に赴く
	hosipi	帰る [単]

	hosippa	帰る [複]
	sirepa	到着する
	kira	逃げる
	uekarpa	集まる
	hopuni	起き上がる [単]
	hemuymuye	ふて寝する [単]
	hemuymuypa	ふて寝する [複]
	kohemuymuye	～でふて寝する [単]
	kohemuymuypa	～でふて寝する [複]
	ciskohemuymuye	泣きながらふて寝する
	sini	休む
	osini	～で休む
	yaysinire	休む
	mokor	眠る
	mokonno	よく眠る
	hotke	横になる
	ehotke	～に寝る
	usamehotke	一緒に寝る
	tumam	～を抱いて寝る
	utumam	抱き合って寝る
	sirkaoma	横たわる
	kasi eoma	～にもたれる
	samatki	横たわる
	ukoyantone	同宿する
	tere	～を待つ
	untere	待つ
	apekur	火にあたる
	apehosi	炉に背中を向ける
	setursesekka	背中を (火で) あぶる
	rew	(鳥が枝に) とまる
	se	～を背負う
	mi	～を着る
	sipine	身支度をする [単]
	yayetokoyki	身支度をする

	eyayetokoyki	～の身支度をする
	esinupte	～を身に付ける (?)
	koyayowpekare	～に気に入られるようにする
	ewtanne	～と同族になる
	siewtannere	～と同族になる
	eyewtanne	～と同族になる
	uewtanne	互いに同族になる
	ekotanne	～の村の一員になる
	iekotanne	村の一員になる
	rewsi	泊まる
	korewsi	～(のところ)に泊まる
	ukorewsi	一緒に泊まる
	sirkamu	地面にふさる
	toykosirkamu	ひどくふせる
	toykohepokiki	ひどく頭を下げる
	sikussisamomare	ひなたぼっこをする
	yayukokarkari	体を丸める
	yaykar	化ける
	ukor	結婚する
	yayramekote	結婚する
	esone	～と夫婦になる
	utannekor	～の一族に加わる
	nuynak	隠れる
	hoparata	陰部を出す
	sirasatke	自分の翼を乾かす
	esapane	～の最高位になる
	ewtarkor	～の長になる
	yayepunkine	自分を大事にする
	ponpakkay	赤ん坊をおぶう
	okere	～を終える [単]
	sukeokere	料理を終える
	eusi	～を頭に付ける
	kamuynere	神格を高める
	yaykoseske	体を丸めて(顔など)～を隠す

	anpa	～を手に持つ [複]
	kisma	～をつかむ
	usipiraspa	皆で広がる
b2	無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞	
	makke	開(あ)く
	turse	落ちる
	hacir	落ちる
	horak	崩れ落ちる
	hokus	倒れる
	sirosma	倒れる
	situri	伸びる (単)
	ray	死ぬ [単]
	mawetuy	こときれる
	tasutuyno	こときれる
	yayerampewtek	意識を失う
	yayramekomo	人事不省になる
	onne	年をとる
	kemapase	年をとる
	sara	現れる
	hetuku	生える [単]
	hetukpa	生える [複]
	honkor	妊娠する
	kohonkor	～で妊娠する
	ukopokor	二人の間に子をもうける
	posiresikte	子供がたくさん生まれる
	siyeye	病気になる
	kewotne	回復する
	sinki	疲れる
	epirka	～で幸せになる
	iyoski	酔っ払う
	koyyanke	波に打ち上げられる
	yaypirkare	幸せになる
	kironnu	満腹になる
	ukokarkarse	一緒に転がる

	kemaracici	足をぶら下げる
	ru	溶ける
	ouhuy	焦げる
	emeske	欠ける
	sipusu	浮かび上がる
	ci	焼ける、煮える
	ukaosma	重なる
	munin	腐る
	rupus	凍る
	sat	乾く
	kay	折れる
	okonrupuni	～を氷が持ち上げる (?)
	okaskamuysak	運が無くなる
	eotoypuk	堆積する
	ratki	垂れ下がる
	epese	～で生きる (治る)
	cipiratekka	一面に広がる
	us	～に付く
	sirkotuk	くっつく
	ikopoyke	混入する
	opuk	からまる / 混じる (?)
	iopuk	混じる
	racitke	ぶら下がる
	uorun	並ぶ
	ewato	互いに並ぶ (?)
	cicari	散らばる
	esik	～でいっぱいになる
	iokane	後に残る
	hepokikomomse	折れ曲がって下がる
	esitciw	倒れ伏す
	osirus	床に臥す
	hecawpa	ほぐれる [複]
C	主体動作動詞	

c1	主体動作・客体接触をあらわす動詞	
	e	～を食べる
	koyki	～をいじめる／捕える
	kotuk	～にくつつく
	oskoni	～に追いつく
	kasuy	～を手伝う
	eywanke	～を使う
	enuypa	～に…を書く
	iorot	人の集まりに参加する
	iemawne	人と交わる
	oterke	～を踏む
	ekatki	～に近づく
	eninuy	～を枕にする
	koyonpitne	～にしがみつく
	koypuni	～に料理をよそる [単]
c2	認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞	
	nukar	～を見る
	inkar	見る
	ioroinkar	遠くから眺める
	enucisiske	～をじっと見つめる
	nantuyere	～をじっと見つめる
	enutomam	～をじっと見つめる (?)
	esiruwante	～を探してあたりを見る
	sikerayke	～をにらみつける
	toykosikerayke	～をひどくにらみつける
	isikipipka	のぞき見する
	siarsonukar	～を向かい側の座に見る
	erikinukar	～を見上げる
	sikkasma	～を見守る
	kansikkasma	～を見守る
	usikkasma	お互いを見守る
	sermaka us	～を陰で見守る
	epunkine	～を守る
	etoko us	～を待ち伏せする

	yoko	狙いをつける
	eyoko	～に狙いをつける
	kasi oyoko	～の様子をうかがう
	sikeranaatte	～に目を落とす
	pa	～を見つける
	inu	聞く
	nu	～を聞く
	nure	～に…を聞かせる／知らせる
	ikokanu	よく聞く
	kokanu	～をよく聞く
	uenevsar	よもやま話をしあう
	newsar	よもやま話をする
	ueytakno	よく話し合う
	ye	～を言う
	uyepnu	言うことを聞く、話し合う
	ekoysoytak	～に…について話して聞かせる
	ekaspaotte	～に…を命じる
	koasurani	～に危急を知らせる
	sonkokuste	～に言葉を通す
	kosunke	～に嘘をつく
	yaykoesina	秘密にする
	inonnoytak	祈る
	kamuynisuk	神頼みをする
	macittaro	～を祀る
	reko	～に名づける
	etanontaro	～に頼む
	oyra	～を忘れる
	kokewtumkor	～に同調する
	kasi itakunte(?)	～について約束を交わす(?)
	sittustekka	～をひどくばかす
	kir	～に覚えがある
	ueytaknu	～と示し合わせる
	hawas	(という) 話である／声がる
c3	意志的動作をあらわす動詞	

	iki	する
	ki	～をする
	emosma	～と手分けして（仕事）…をする
	nepki	働く
	yayparosuke yaymonikor	自炊して働く
	suke	料理する
	kopan	～を断る
	simusiska	（訪問を知らせるための）咳ばらいをする
	yayrekkisarakikikiki	もみあげをかきかきする
	apkas	歩く
	yaykomuye	～をひとりじめする
c4	長期的動作をあらわす動詞	
	resu	～を育てる [単]
	respa	～を育てる [複]
	omapresu	～をかわいがって育てる [単]
	yaykoresu	～を一人で育てる
	wenresu	（親の亡くなった子ども一人）～を引き取って育てる
	koresu	～の許嫁として…を育てる
	reska	～を養う
	ereska	～で…を養う
	kasi oyki	～の面倒をみる
	nukannukar	～の面倒をみる
	omap	～をかわいがる
	ukatayerotke	仲良くする
	yaykoan	一人暮らしする
	uhkotpa	一緒に暮らす [複]
	ukoyayeus	暮らす
	uheturaste	一緒に暮らす
	sisounte	～とそばに隣り合って暮らす
	sikaoykire	養ってもらう
	horari	住む
c5	非意志的な動き（現象）をあらわす動詞	
	mina	笑う

	uwaste	繁殖する
	tom	日が射す
	siknu	生きる／生き返る
	kosiknu	(〜と共に?) 生きる
	nipek maknatara	輝いている
	kotoyse	(虫などが) 〜にたかる
	uhuy	燃える
	onumposo	生き残る [単]
	onumpospa	生き残る [複]
	aperuy	火が激しい (激しく燃える)
D	思考・感情・知覚動詞	
d1	思考をあらわす動詞	
	yaynu	思う
	eyaykosiramsumyapa	〜について考える [複]
	castustekka	〜を立ちつくして考える
	eraman	〜がわかる／知っている
	eramiskari	〜を知らない
	ukoeramiskaripa	〜が互いにわからない
	erampewtek	〜がわからない
	rameunin	知らないでいる
	yaysanniyo	算段する
	ositciwre	(気持ち、考えなど) 〜を決める
d2	感情をあらわす動詞	
	iruska	怒る
	hepututu	ふくれっ面をする
	kohepututu	〜にふくれっ面をする
	toykohepututu	ひどくふくれっ面をする
	yaywennukar	苦勞する
	sirkirap	困る
	kosiramuisamte	(〜に対して?) とぼける
	nukuri	(億劫で) 〜できない
	ikoytupa	うらやましいと思う
	eoyamokte	〜を不思議に思う

	eyaykopepka	～を恨む
	eyam	～を心配する
	erampokiwen	～を気の毒に思う
	emismu	～を寂しがる
	kowen	～で不快な思いをする
	erampekamam	～で困る
	yayunnatarare	一人で苦しむ
	eramusinne	安心する
	ekonupur	～を気に入る
	yaykoramuosma	～を自ら気に入る
	eyayokapaste	～を後悔する
	yaynittekka	辛抱する
d3	知覚・感覚をあらわす動詞	
	eaykap	～ができない
	oripak	恐れ慎む
	eoripak	～を畏れる
	toykooripak	ひどく恐れ慎む
	nuwe koan	～の獲物に恵まれる [単]
	yaykoeramewnin	油断する
	ukokoeramewnin	(皆/二人とも) ～に気づかない
	easpa	～が聞こえない
	yaynumiwen	気分が悪い
E	状態性動詞	
	an	ある／いる [単]
	oka	ある／いる [複]
	ne	である
	kor	～を持つ
	cisekor	家を持つ
	matkor	妻を持つ
	pokor	子をもつ
	casikor	(神などが) 家を持つ
	motokor	起源を持つ
	ramatkor	魂を持つ

	kosinninu	～をお守りにして持つ
	ukokor	～と一緒に持つ
	yaykore	～を持つ (?)
	inne	(人や家が) 多い
	utura	一緒にいる
	tura	～を連れる
	uwoma	大勢集まって一緒にいる
	pokoinne	子供がたくさんいる
	hekote	～に連れ添う [単]
	upokor	親子 (親と息子) である
	ri	高い
	poro	大きい
	pirka	良い / 美しい
	wen	悪い
	sak	～を欠く
	sikopayar	～のごとくである
	emateniwkes	～に妻を持たせられずにいる (?)
	ramne	無傷である
	utcike	内気である
	siusaraye	分岐する
	uekohopi	分岐する
	oworkoas	水の中からそびえたっている
	sinna	別である
	numo	(穀物などに) 実が入る
	hu	生である
	husko	古い
	pon	小さい
	pikan	すばやい
	nucaktek	心が明るく楽しい
	kiyanne	年上である
	poniwne	年下である
	uyupikor	兄と弟妹である
	irwakne	兄弟姉妹である
	uirwakkor	兄弟姉妹である

	umurek	夫婦である
	totek	丈夫である
	tumasnu	丈夫である
	siknak	目が見えない
	esiknak	～で目が見えない
	monak	目覚めている
	arka	痛い
	hepokiki	頭を下げている
	eus	～の先に付いている
	niwkes	～しきれない
	oha	空である
	siresik	～がとてもたくさんある
	apkasenitan	歩くのが早い
	oma	～に入っている
	woroma	水の中に入っている
	yayutapke	直っている (?)

■ kor an と wa an の両方と共起する動詞

A	主体動作・客体変化動詞	
a1	客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞	
	kire	～に…をさせる
	ronnu	～を殺す [複]
	supa	～を煮る [複]
	satke	～を干す
	roski	立つ [複] / ～を立てる [複]
	anu	～を置く [単]
	omare	～を…に入れる / 置く
	iri	解体 (皮剥ぎ) する
	ri	～を解体 (皮剥ぎ) する
	rura	～を運ぶ
	yanke	～を陸に上げる [単]
	osurpa	～を捨てる [複]
	o	～を…に入れる
	kar	～を作る / する
	iuta	(杵と臼で) 搗きものをする
	rewsire	～を泊める
	pirkare	～を良くする
a2	所有関係の変化をひきおこす動詞	
	kore	～に…を与える
B	主体変化動詞	
b1	意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞	
	ek	来る [単]
	arki	来る [複]
	arpa	行く [単]
	ekimne	山に行く
	kimun	山に行く
	ahun	入る [単]
	soyne	外へ出る [単]
	san	山手から浜手へ下りる / 前へ出る [単]
	yan	沖から陸に向かう / 陸に上がる [単]

	yap	沖から陸に向かう／陸に上がる [複]
	hemesu	(川、山、木などに沿って) のぼる [単]
	rikin	上る [単]
	kus	～を通る
	iwak	(山仕事や畑の仕事から) 帰る
	sinewpa	遊びに行く [複]
	hosipi	帰る [単]
	uekarpa	集まる
	kohemuymuye	～でふて寝する [単]
	sini	休む
	hotke	横になる
	tere	～を待つ
	apekur	火にあたる
	rew	(鳥が枝に) とまる
	se	～を背負う
	sipine	身支度をする [単]
	yayetokoyki	身支度をする
	eyayetokoyki	～の身支度をする
	koyayowpekare	～に気に入られるようにする
	siewtannere	～と同族になる
	rewsi	泊まる
	korewsi	～(のところで) に泊まる
b2	無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞	
	hetuku	生える [単]
	ukopokor	二人の間に子をもうける
	epirka	～で幸せになる
	ru	溶ける
	ratki	垂れ下がる
C	主体動作動詞	
c1	主体動作・客体接触をあらわす動詞	
	e	～を食べる
	koyki	～をいじめる／捕える
	kasuy	～を手伝う

	eywanke	～を使う
	iorot	人の集まりに参加する
c2	認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞	
	nukar	～を見る
	inkar	見る
	esiruwante	～を探してあたりを見る
	sikerayke	～をにらみつける
	toykosikerayke	～をひどくにらみつける
	erikinukar	～を見上げる
	sikkasma	～を見守る
	epunkine	～を守る
	inu	聞く
	nu	～を聞く
	nure	～に…を聞かせる／知らせる
	ikokanu	よく聞く
	kokanu	～をよく聞く
	uenumsar	よもやま話をしあう
	ye	～を言う
	ekoysoytak	～に…について話して聞かせる
	ekaspaotte	～に…を命じる
	inonnoytak	祈る
	reko	～に名づける
	etanontaro	～に頼む
c3	意志的動作をあらわす動詞	
	iki	する
	ki	～をする
	apkas	歩く（※ただし、apkas wa an の用例の apkas は、「行く」の意味で用いられている）
	kopan	～を断る
c4	長期的動作をあらわす動詞	
	resu	～を育てる [単]
	respa	～を育てる [複]
	omapresu	～をかわいがって育てる [単]

	yaykoresu	～を一人で育てる
	nukannukar	～の面倒をみる
	kasi oyki	～の面倒をみる
	omap	～をかわいがる
	ukatayerotke	仲良くする
	ukoyayeus	暮らす
	uheturaste	一緒に暮らす
c5	非意志的な動き（現象）をあらわす動詞	
	nuwe koan	～の獲物に恵まれる [単]
D	思考・感情・知覚動詞	
d1	思考をあらわす動詞	
	yaynu	思う
	eyaykosiramsuypa	～について考える [複]
	eraman	～がわかる／知っている
	eramiskari	～を知らない
	erampewtek	～がわからない
d2	感情をあらわす動詞	
	iruska	怒る
	kohepututu	～にふくれっ面をする
	yaywennukar	苦勞する
	sirkirap	困る
	kosiramuisamte	(～に対して?) とぼける
	nukuri	(億劫で) ～できない
	ikoytupa	うらやましいと思う
	eoyamokte	～を不思議に思う
	eyaykopepka	～を恨む
	eyam	～を心配する
	erampokiwen	～を気の毒に思う
d3	知覚・感覚をあらわす動詞	
	eaykap	～ができない
	oripak	恐れ慎む
	eoripak	～を畏れる

E	状態性動詞	
	an	ある／いる [単]
	ne	である
	kor	～を持つ
	hekote	～に連れ添う [単]
	eus	～の先に付いている
	pirka	良い／美しい
	sikopayar	～のごとくである

■ kane an と共起する動詞

A	主体動作・客体変化動詞	
a1	客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞	
	roski	立つ [複] / ~を立てる [複]
	omare	~を…に入れる / 置く
	o	~に…を入れる
	kar	~を作る / する
	tuye	~を切る [単]
	pisese	~を大きく膨らませる
	eenke	~を尖らせる
	seske	~を覆う
	kamure	~に…をかぶせる
	ekamure	~をかぶせる
	ciwre	~を下ろす
	racici	~をぶら下げる
	koetuye	~をぶら下げる (?)
	upakte	同じにそろえる
	sitomkote	~を自分の体にくっつける
	ekopaste	~を…にもたせかける
	eyaotke	~を陸に乗り上げる
	upsoromare	~を懐に入れる
a2	所有関係の変化をひきおこす動詞	
	なし	
B	主体変化動詞	
b1	意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞	
	as	立つ [単]
	se	~を背負う
	nisike	薪を背負う
	pakkay	子供をおぶう
	mi	~を着る
	ikakuste	~を着る
	opannaatte	~をうち羽織る
	utomciwre	~を身に付ける

	mut	～を身に付ける
	etaptusare	片肌脱ぐ
	eusi	～を頭に付ける
	eepanu	～を頭に巻く
	epaunu	～を頭に付ける
	ecipanu	～を頭にしめる
	ukoepanu	(二つの頭飾り) ～を一緒に頭に巻く
	heusi	～をかぶる
	sitomus	(刀など) ～を肩から下げる
	esitapkaani	～を肩に担ぐ
	ani	～を手に持つ [単]
	anpa	～を手に持つ [複]
	ukoani	～を一緒に手に持つ
	kisma	～をつかむ
	ekupa	～をくわえる
	yayramte	身を低くする
	poro parkanyastek	大口を開ける
	toytukarieus	地に頭をつけて土下座する
	ukisma	抱き合う
	hotku	屈む
	kematuri	足を伸ばす
	hociniturkuste	～を股を広げて (そこに) 置く (?)
	kaeoma	～にもたれる
	tori	逗留する
b2	無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞	
	kay	折れる
	mom	流れる
	eokok	～にひっかかる
	eracitke	～に垂れ下がる
	honkor	妊娠する
	sikekohepokiki	荷物が重くて頭を下げる
	porosukup	壮年になる
	usoskamu	何層にも重なる

	hokushokus	並んで倒れている
	eokokokok	～に付く
	kotuk kotuk	～に (いくつも?) くつつく
C	主体動作動詞	
c1	主体動作・客体接触をあらわす動詞	
	si ru	～をこする
	rari	～を押さえつける
c2	認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞	
	なし	
c3	意志的動作をあらわす動詞	
	ki	～をする
	pas	走る
	terke	跳ねる
c4	長期的動作をあらわす動詞	
	resu	～を育てる [単]
c5	非意志的な動き (現象) をあらわす動詞	
	mina	笑う
	minaunin	微笑む
	ruminaunin	微笑む
	moyoyke	うごめく
	(kumi) uehopuni	(カビが) 生える
	homar	かすむ
	kot	結びつく
	humi as as	何度も音がする
	mikemike kane kurkot (kane an)	ぴかぴか輝いている
D	思考・感情・知覚動詞	
d1	思考をあらわす動詞	
	なし	
d2	感情をあらわす動詞	
	ekonramsitne	～でもだえ苦しむ
	ipor(o) kurkus	渋い顔をする
	paiporoisam	唇の色を失う

d3	知覚・感覚をあらわす動詞	
	なし	
E	状態性動詞	
	an	ある／いる [単]
	ne	である
	kor	～を持つ
	utura	一緒にいる
	eus	～の先に付いている
	pokor	子をもつ
	yaykososo	身重である
	tura	～を連れる
	pon	小さい
	sipasnu	利口だ
	mo	静かだ
	hure	赤い
	kunne	黒い
	tumasnu	丈夫である
	iepa	能力がある
	hepokiki hepokiki	(何人もが) 頭を下げている
	kohepokiki	～に頭を下げている
	cekantoorsoye	天に向かってそびえている
	cekantokotorsuye	天に向かってそびえている
	kanto kotor cesisuye	天に向かってそびえている
	oworkaus	水際からそびえる
	rekomatu	ちゃんとひげが生えそろっている
	careaytare	(髭が) 生えそろっていない
	rekkurma	髭が生えそろっていない(?)
	inotakomo	ひげがあごの先にだけ生えている
	operatne	帯もしないでいる
	seturpeste	～を背中に沿って縦につけて持っている
	ohasikseykor	目玉が無い
	noka oma	形が付いている
	emomnatara	～であふれる (一面にある)

	moyono	人が少ない
	kasma	～が余る
	ecioukar [cieoukar]	付いている
	ociw (kane an)	(髪が) 肩に届いている
	tapsutu kasi eociw (kane an)	(髪が) 肩に届いている
	sikrap emko kootukutke (kane an)	まつ毛が半分まで埋まっている
	sikrap kootukukke (kane an)	まつ毛だけが突出している
	tu tam ukaotte (kane an)	二本の大小を腰に挿している
	hepututu wa okere (kane an)	ひどく口をとがらせている
	ramma kane katkor kane (kane an)	普段通り変わらずに過ごしている
	sike koypok kik (kane an)	荷物の下をぶつけながらいる

■ hine an と共起する動詞

A	主体動作・客体変化動詞	
a1	客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞	
	supa	～を煮る [複]
	are	～を座らせる
	omare	～を…に入れる／置く
	rura	～を運ぶ
	yanke	～を上げる／(火にかけたもの)～を下ろす [単]
	yapte	～を上げる／(火にかけたもの)～を下ろす [複]
	kar	～を作る／する
	ninpa	～を引きずる [複]
	kotankar	村を作る
	upsire	～を伏せる
	oranke	～を…に降ろす
	atte	～を掛ける
	asi	～を立てる [単]
	ari	～を置く [複]
	sikoarpare	～を自分のところに來させる
	yaeotke	～を陸に乗り上げる
	korototo	～を粉々にする
	ota	～にこぼす
	racitkere	～をぶら下げる
	etokoomare	～を先に入れる
	eusi	～を頭に付ける
	inawkotaktaku	木幣を～に付ける
	rutpa	～を押してずらす [複]
	hokuste	～を倒す
	sioromare	～を自分の家に入れる
	seske	～を覆う
	ukao	～をしまう
	uousi	～をつなぐ
a2	所有関係の変化をひきおこす動詞	
	kore	～に…を与える
	matkore	～に妻を与える

	souk	借財をする
	kosouk	～に借財をする
	soukte	～に貸付をする
	etun	～を嫁に貰う
B	主体変化動詞	
b1	意志的な位置変化・姿勢変化・状態変化をあらわす動詞	
	ek	来る [単]
	arki	来る [複]
	arpa	行く [単]
	ahun	入る [単]
	soyne	外に出る [単]
	san	山手から浜手へ下りる／前へ出る [単]
	sap	山手から浜手へ下りる／前へ出る [複]
	iwak	(山仕事や畑の仕事から) 帰る
	hosipi	帰る [単]
	uekarpa	集まる
	sini	休む
	hotke	横になる
	heanu	横になる
	yayokuste	横になる
	mokor	眠る
	tere	～を待つ
	rew	(鳥が枝に) とまる
	yayetokoyki	身支度をする
	yaykorpore	～を自分に与える
	rewsi	泊まる
	tori	逗留する
	ukotori	共に逗留する
	as	立つ [単]
	astustekka	仁王立ちする
	a	座る [単]
	rok	座る [複]
	urorerok	並んで座る

	ukirsama erok	並んで座る
	usamerok	並んで座る
	mehuntokiki	片ひざを立ててその上にあごをのせて座る
	uesopki	向き合って座る
	ka oosorusi	～に腰かける
	uorun	並ぶ
	ran	下りる [単]
	kasi eoma	～にもたれる
	sirkamu	地面にふさる
	yaykar	化ける
	nuynak	隠れる
	yaosiraye	自分の体を陸に寄せる
	rewsioka	夜を明かす [複]
	raynottarara	ぐっとなごを突き出し上を向く
	yayukokarikari	(体を) 丸くする
	sumawne	獲物となる
	orikikutkor	膝の上まで着物のすそをまくる
	ewtanne	～と同族になる
	yayramekotpa	結婚する
	ape ekopi hokus hokus	火に背を向けて寝る
	sipinpa	身支度をする [複]
	kasi kamu	～に覆いかぶさる
	notomare	～に顎をのせる
	toykokisma	～をしっかりとつかむ
b2	無意志的な状態変化・位置変化をあらわす動詞	
	sirpeker	夜が明ける
	makke	開く
	turse	落ちる
	sirosma	倒れる
	ray	死ぬ
	yayerampewtek	意識を失う
	mawetuy	ことされる
	ukoporo	共に大きくなる
	koyanrasne	～まみれになる

	racitke	ぶら下がる
C	主体動作動詞	
c1	主体動作・客体接触をあらわす動詞	
	iku	飲酒する
	ouri	～を掘る
	kotuk	～にくつつく
	koyonpitne	～にしがみつく
c2	認識活動・言語活動・表現活動をあらわす動詞	
	inkar	見る
	nu	～を聞く
	ikokanu	よく聞く
	sikerayke	～をにらみつける
	toykosikerayke	～をひどくにらみつける
	hawean	言う [単]
	onkami	拝礼する
	koonkami	～に拝礼する
	nomi	～に祈る
	icarpa	供養する
	reko	～を…と呼ぶ
	etoko us	～を待ち伏せする
	esikopayar	～のふりをする
	numke	～を選ぶ
	eese	～に承諾する
	kahuye	～を看病する
c3	意志的動作をあらわす動詞	
	iki	する
	ki	～をする
	apkas	歩く
	suke	料理する
	sukeokere	料理し終わる
	wakkata	水汲みをする
	peraykoas	釣りをする
	kopan	～を断る

	etoko oyki	～の準備をする
c4	長期的動作をあらわす動詞	
	resu	～を育てる [単]
	respa	～を育てる [複]
	pirkaresu	～を大事に育てる [単]
	koresu	～の許嫁として…を育てる
	uheturaste	一緒に暮らす
	uhekotpa	互いに連れ添う [複]
	erok	～に住む
c5	非意志的な動き（現象）をあらわす動詞	
	siknu	生きる／生き返る
	nipek maknatara	光が輝いている
	orasinacitke	～に（魚や熊の肉が）どっさりとぶら下がる
D	思考・感情・知覚動詞	
d1	思考をあらわす動詞	
	なし	
d2	感情をあらわす動詞	
	toykohepututu	ひどくふくれっ面をする
	toykohepututpa	ひどくふくれっ面をする [複]
	ikoramniwkes	人になれないと思う
d3	知覚・感覚をあらわす動詞	
	oripak	恐れ慄む
	yaykoeramewnin	油断する
	koeramewnin	～をうっかりして見逃す
	ukowayrupa	間違いを犯す (?)
E	状態性動詞	
	an	ある／いる [単]
	oka	ある／いる [複]
	ne	である
	kor	～を持つ
	pirka	良い
	poro	大きい

	ruy	激しい
	nokan	幼い
	hekote	～に連れ添う [単]
	hekotpa	～に連れ添う [複]
	matkor	妻を持つ
	oma	～に入っている
	umurek	夫婦である
	uesone	夫婦として暮らす
	oha	空である
	monak	目覚めている
	hawsak	声をたてない
	ukokor	～と一緒に持つ